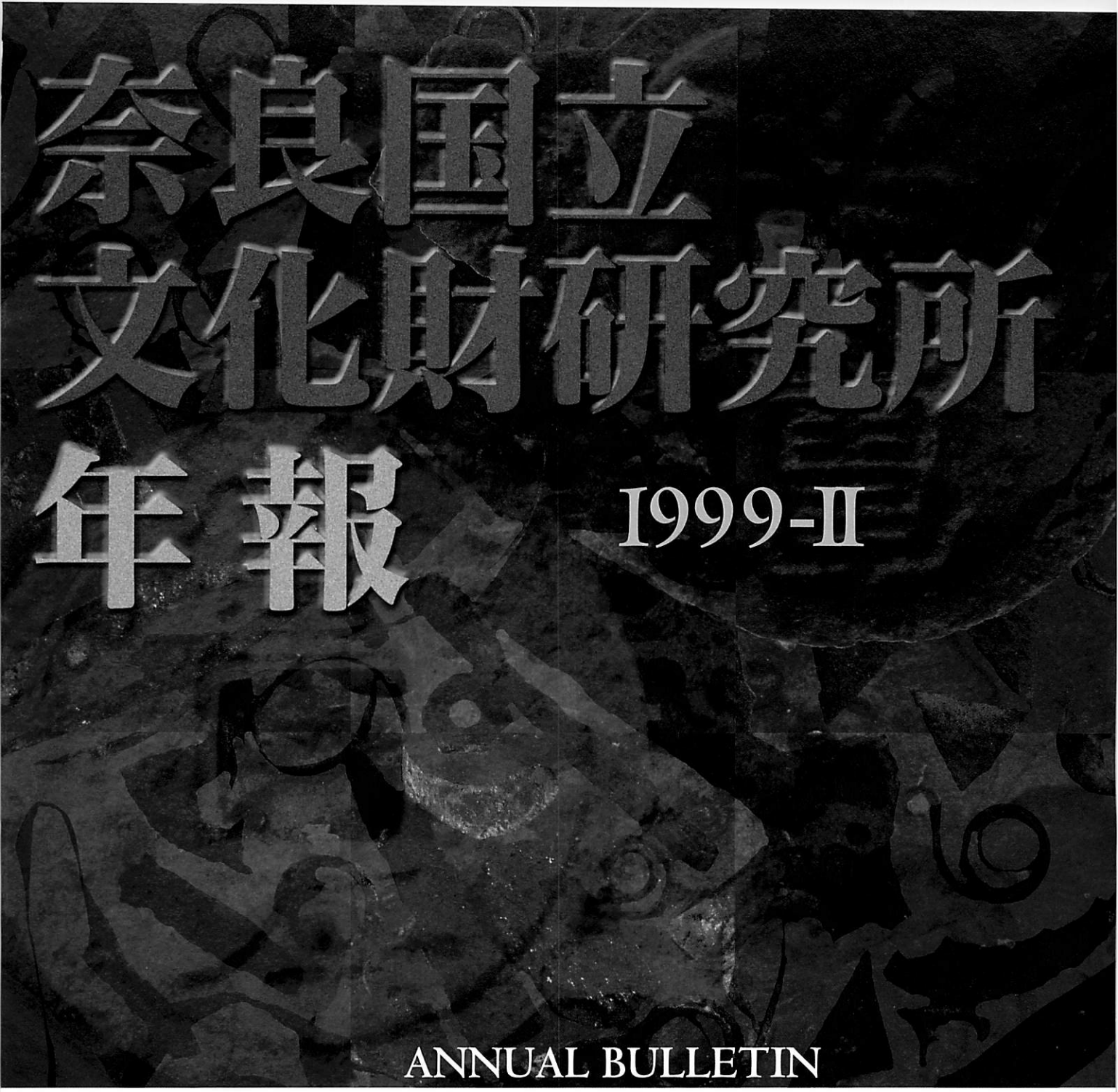
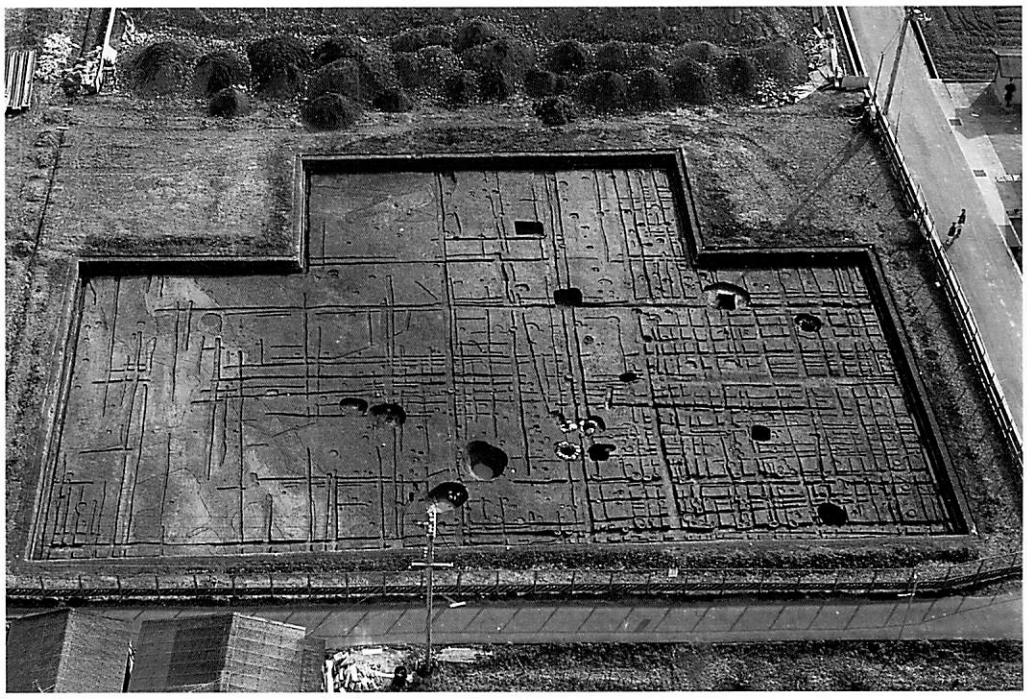


奈良国立文化財研究所年報 1999-II

ANNUAL BULLETIN
of Nara National Cultural Properties
Research Institute 1999-II

奈良国立文化財研究所

藤原宮と藤原京の調査



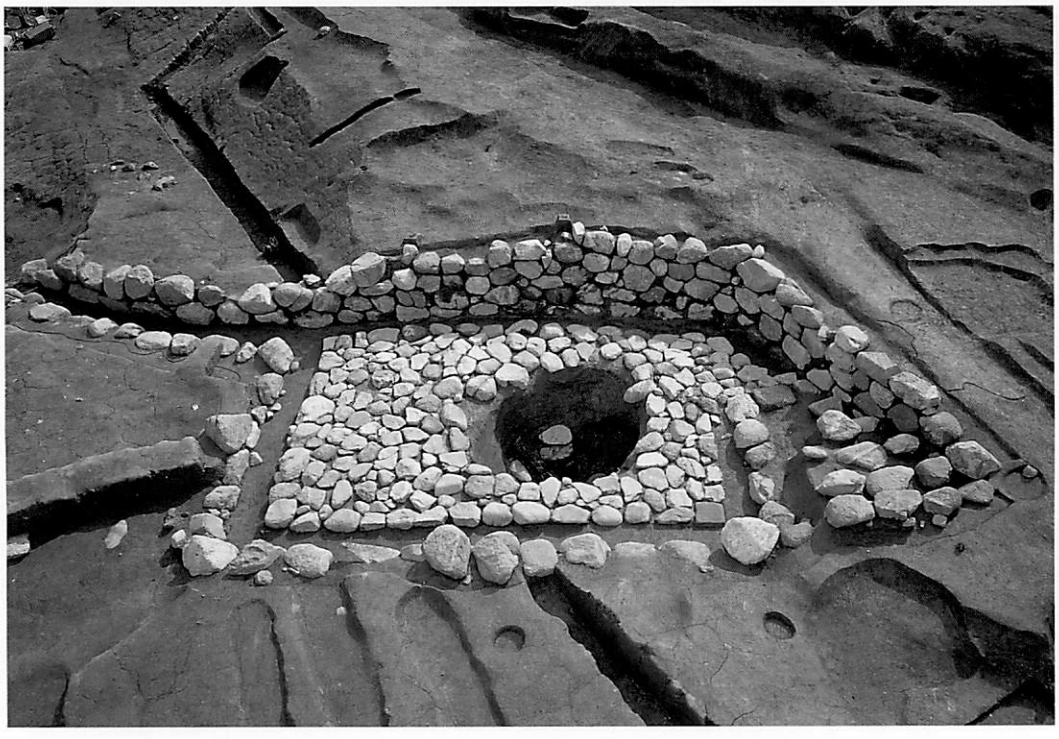
藤原宮西北官衙地区
周辺でのこれまでの調査同様、藤原宮期の遺構は希薄である。むしろ特徴的なのは平安時代末から鎌倉時代の遺構で、なかでも石組井戸の数の多さが目を引く。これらの井戸は、通常の生活用というより、何らかの生業用とみられる。北上空から。本文4頁参照（撮影／中村一郎）

藤原宮西面大垣
縄手池の護岸改修に伴って西面大垣の調査を行い、掘立柱穴列を確認した。柱穴の底には根固めの石や礎板が残っていた。調査区南端に西面南門がかかるが、既に削平を受け、痕跡を残していない。北から。本文10頁参照（撮影／井上直夫）

西一坊坊間路と右京八条一坊
西一坊坊間路の東西両側溝を検出した。道路の西には、右京八条一坊西北坪の宅地が広がり、東辺と北辺の区画塀や建物がみつかった。背後に畝傍山がみえる。東から。本文14頁参照（撮影／井上直夫）

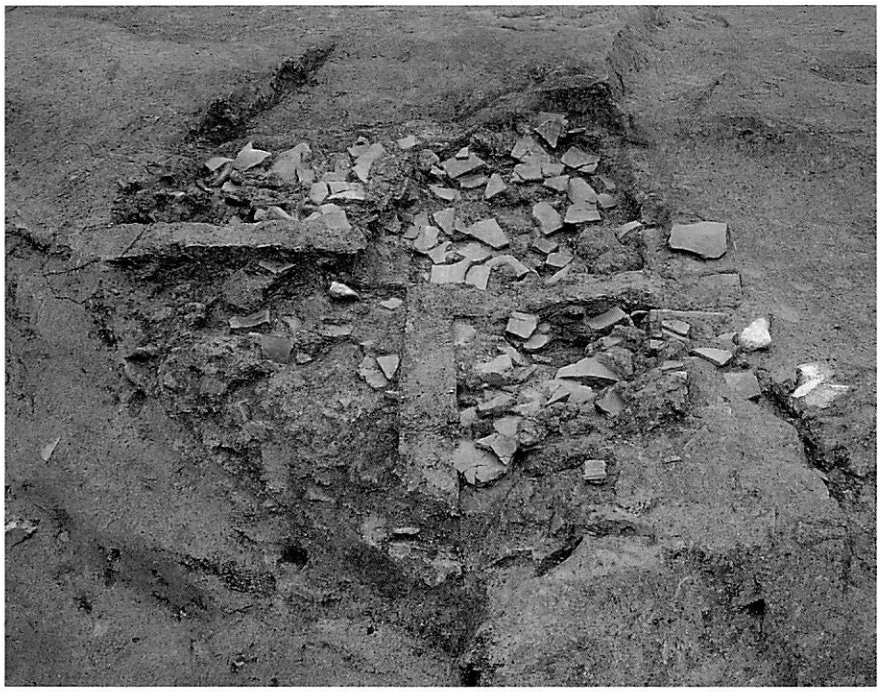
飛鳥池遺跡の調査

飛鳥池遺跡
第93次調査は、飛鳥池工房跡の中央部にあたる。調査区中央の３条の東西塀で、南北に分かれる構造が明かになった。塀の南側では、谷の中央には炭を主体とする工房廃棄物層が分厚く堆積し、両岸で工房が営まれていた。北上空から。本文33頁参照（撮影／中村一郎）



石敷井戸
３条の塀の西側には、石敷の井戸がある。北辺が長い台形で、石を積み上げて周壁をつくる。北西隅に階段が残る。井戸の周りに石を敷き並べ、周囲に溝を巡らせ、南東隅から排水していた。北から。本文33頁参照（撮影／井上直夫）

富本銭と鋳棹
わが国最古の鋳造貨幣。いずれも鋳放し銭で、周囲に鋳バリや堰の切断痕が残る。鋳損じた破片が大半を占め、不良品として廃棄された。第84次調査で出土した鋳棹は堰の断面が一致し、成分も同一で、富本銭の鋳棹と判断した。本文33頁参照（撮影／井上直夫）



飛鳥池瓦窯
飛鳥池工房の一画に設けられた瓦窯。窖窯であるが、焼成部は削平され、燃焼部が残る。飛鳥寺東南禅院へ瓦を供給した。富本銭出土土層の年代の決め手となった。西から。本文33頁参照（撮影／井上直夫）

飛鳥池遺跡出土の様（ためし）
木製の製品見本である。釘・工具・鏃・建築金物など、飛鳥池工房の多様な産品の一端を示す資料である。本文33頁（撮影／井上直夫）

飛鳥寺と吉備池廃寺の調査

飛鳥寺南面大垣と外周道路
飛鳥寺南面東半の大垣を検出した。掘立柱塀で、縁石を備えた基壇が伴う。大垣外は外周道路となり、南側の側溝まで幅約9.5m。一部に石敷きがあり、ここに門を開くのであろうか。南には前年度調査した下層の石列がみえる。東から。本文23頁参照（撮影／井上直夫）

吉備池廃寺の南面回廊
石組溝と石抜取跡がみえる素掘溝との間が南面回廊。削平が著しい。回廊は塔－金堂中軸線を越えて東に延び、ここには中門は開かない。後に素掘溝の下で足場穴を検出し、回廊未完成説は否定された。西から。本文65頁参照（撮影／井上直夫）

目　次

Ⅰ 藤原宮の調査

西北官衙地区の調査　第94次　4

西面南門・大垣の調査　第96次　10

Ⅱ 藤原京の調査

藤原京右京八条一坊の調査　第90次　14

Ⅲ 飛鳥地域等の調査

飛鳥寺の調査　第91-8次、第97次　20

飛鳥池遺跡の調査　第87次、第93次　26

飛鳥池東方遺跡の調査　第92次・第91-6次　53

川原寺の調査　第91-7次　62

吉備池廃寺の調査　第95次　65

凡　例

1 本書は、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部が1998年度に実施した藤原宮跡、藤原京跡および飛鳥地域等の発掘調査の概要報告である。執筆は主として調査担当者が当たり、出土遺物については各調査室のメンバーが執筆した。

2 発掘調査の呼称は、1997年度より「飛鳥藤原第□次調査」に統一している。

3 遺構図に付す座標値は平面直角座標系第Ⅳ系により、高さは海抜高で表す。

4 遺構には一連の番号を付し、その前に遺構の種別を示す記号を付した。略称は以下の通りである。SA（築地・塀）、SB（建物）、SC（回廊）、SD（溝）、SE（井戸）、SF（道路）、SG（池・園地）、SK（土坑）、SS（足場穴）、SY（瓦窯）、SX（その他）。

5 藤原宮内の地区区分については、『飛鳥・藤原概報26』（3頁）を参照されたい。

6 7世紀代の土器の時期区分は、飛鳥Ⅰ～Ⅴと表す。詳細は『藤原報告Ⅱ』（92～100頁）を参照されたい。

7 藤原京の京域については、岸俊男の東西８坊、南北12条説を超えた広がりをもつことが確実であるが、当初から大きかったのか、後に拡大したものか、逆に縮小したものかといった未解決の問題を残し、京極（特に南北）も未確定である。当調査部で実施した本年度の京内の調査は、従来の岸説藤原京の範囲内に納まるため、調査位置図は岸説藤原京域を用いて表すこととする。

8 本報文未収録の調査については、72頁の「その他の発掘調査概要」を参照されたい。

9 年報Ⅰの編集は木村勉・深澤芳樹、年報Ⅱの編集は長尾充、年報Ⅲの編集は金田明大が担当した。

奈良国立文化財研究所年報 1999－Ⅱ

発行日――1999年9月27日

発行――奈良国立文化財研究所

編集――奈良国立文化財研究所　飛鳥藤原宮跡発掘調査部

〒634-0025　橿原市木之本町宮ノ脇94-1　TEL 0744-24-1122

印刷――岡村印刷工業株式会社

ANNUAL BULLETIN
of Nara National Cultural Properties Research Institute
1999-Ⅱ

CONTENTS

Ⅰ Excavations at the *Fujiwara* Palace Site
- Excavation in the northwest area of government offices; No.94
- Excavation of the southern gate and wall on the western side of the palace precinct; No.96

Ⅱ Excavation at the *Fujiwara* Capital Site
- Excavation in West First ward on Eighth street; No.90

Ⅲ Excavations in the *Asuka* area and elsewhere
- Excavations at the *Asuka-dera* Temple Site; No.91-8, 97
- Excavations at the *Asuka-ike* Site; No.87, 93
- Excavations to the east of the *Aska-ike* Site; No.92, 91-6
- Excavation at the *Kawahara-dera* Temple Site; No.91-7
- Excavation at the *Kibi-ike* Temple Site; No.95
- Other excavations

表1　1998年度 飛鳥藤原宮跡発掘調査部発掘調査・立会調査一覧

調査次数	調査地区	遺跡	調査期間	面積	調査地	担当者	調査要因	掲載頁
87次	5AKA-J・H	飛鳥池遺跡	97.12.4～98.7.31	1,900m²	明日香村飛鳥	花谷　浩 小澤　毅 安田龍太郎	万葉ミュージアム建設	26～32
90次	5AWH-J・K・Q・R	藤原京右京八条一坊	98.4.7～7.30	1,200m²	橿原市上飛騨町	深澤芳樹・ 伊藤敬太郎	市営住宅地造成	14～17
92次	5AKA・B, 5AME-E・F, 5BAS-M	飛鳥池東方遺跡	98.4.7～6.15	604m²	明日香村飛鳥	長尾　充	万葉ミュージアム建設	53～61
93次	5AKA-H, 5BAS-N	飛鳥池遺跡	98.7.6～99.2.21	2,200m²	明日香村飛鳥	花谷　浩・ 巽淳一郎	万葉ミュージアム建設	33～52
94次	5AJE-T	藤原宮西北官衙地区	98.11.20～99.3.17	1,300m²	橿原市醍醐町	鈴木恵介・ 小野健吉	鴨公公民館建設	4～9
95次	5ADD-T・U, 5ADL-E	吉備池廃寺	99.1.7～4.22	724m²	桜井市吉備	西口壽生	学術調査	65～72
96次	5AJL-C・D	藤原宮西面南門・大垣	99.2.8～3.4	204m²	橿原市縄手町	毛利光俊彦	縄手池護岸改修	10～11
97次	5BAS-M	飛鳥寺東南隅	99.3.15～5.7	360m²	明日香村飛鳥	毛利光俊彦	万葉ミュージアム建設	23～25
91-2次	5BYD-D・L	山田寺	98.4.16	11m²	桜井市山田	伊藤敬太郎	史跡整備・立会	72
91-3次	5AJC-L	藤原京左京五条三坊	98.4.21～4.22	30m²	橿原市下八釣町	安田龍太郎	住宅建設	72
91-4次	5BOQ-L	奥山久米寺	98.5.19～5.20	8m²	明日香村奥山	水戸部秀樹	住宅建設	72
91-5次	5BYD-M	山田寺	98.5.21	1m²	桜井市山田	田福　涼	史跡整備・立会	72
91-6次	5AKA-A・B	飛鳥池東方遺跡	98.6.18～6.29	111m²	明日香村飛鳥	長尾　充	万葉ミュージアム建設・立会	53～61
91-7次	5BKH-A	川原寺	98.6.24～7.23	126m²	明日香村川原	鈴木恵介	共同溝埋設	62～63
91-8次	5AMD-N	飛鳥寺北面大垣	98.7.6～7.29	65m²	明日香村飛鳥	花谷　浩	住宅建設	20～22
91-9次	5AJP-J	藤原京左京一条一坊	98.7.21	8m²	橿原市醍醐町	島田敏男	道路拡幅（165号線）	72
91-10次	5AJP-J	藤原京左京一条一坊	98.8.19	8m²	橿原市醍醐町	水戸部秀樹	道路側溝付替（165号線）	72
91-11次	5AJL-E・F	藤原宮西面内濠	98.9.3	77m²	橿原市四分町	水戸部秀樹	史跡整備・立会	72
91-12次	5BYD-M	山田寺	98.9.25	1m²	桜井市山田	水戸部秀樹	史跡整備・立会	72
91-13次	5AKA-C	飛鳥池遺跡	98.11.17	2m²	明日香村飛鳥	田福　涼	吉野川分水・立会	72
91-14次	5BAS-M	飛鳥池遺跡	98.11.19	35m²	明日香村飛鳥	長尾　充	万葉ミュージアム建設・立会	72
91-15次	5AJE-S	藤原宮内裏西官衙地区	98.12.16～12.17	12m²	橿原市醍醐町	小澤　毅	住宅建設	72
91-16次	5AJM-A	藤原宮西面内濠	99.2.17～2.18	4m²	橿原市四分町	水戸部秀樹	史跡整備・立会	72
91-17次	5BAS-M	飛鳥寺東南隅	98.10.21	5m²	明日香村飛鳥	小澤　毅	万葉ミュージアム建設・立会	72

I 藤原宮の調査

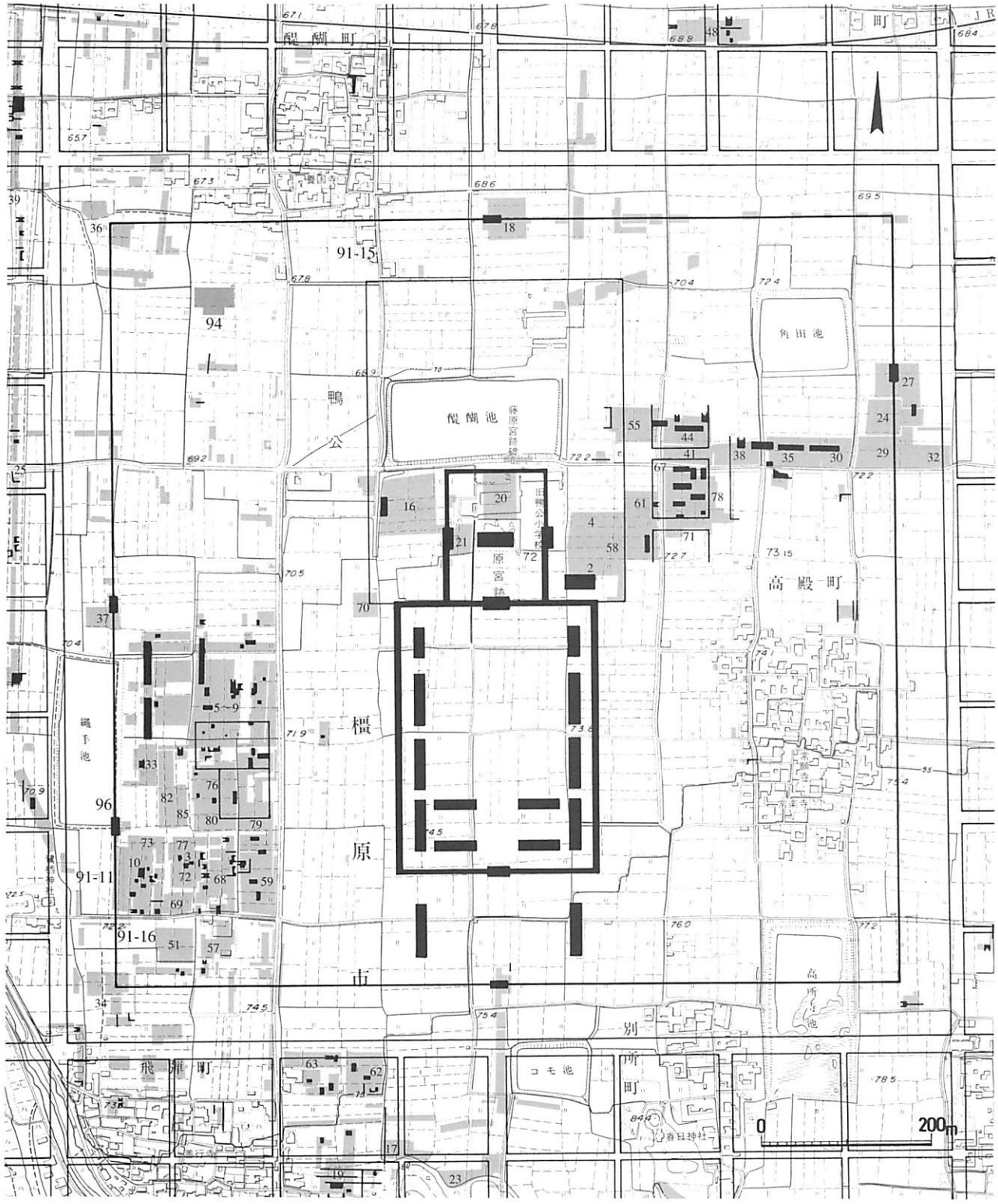


図1　藤原宮の調査位置図　1：7000

◆西北官衙地区の調査―第94次

1　はじめに

この調査は、公民館建設に先立ち、橿原市醍醐町で実施したものである。調査面積は1,260㎡、調査期間は、1998年11月20日から1999年３月17日であった。

本調査区は藤原宮西北官衙地区にあたるが、これまでの周辺での調査では藤原宮期の遺構はあまり検出されておらず、むしろ平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構が多く検出されている。したがって、本調査でも、藤原宮期の遺構の確認とともに、平安時代末から鎌倉時代の遺構の確認を視野に入れた。

本調査区の基本層序は、上から新旧２時期の耕土、茶灰色砂質土、灰褐色砂質土（遺物を含む）、黄灰褐色粘質土または微砂（耕作溝検出可能面）と続き、その下に暗褐色粘質土および暗茶褐色砂質土がある。遺構検出は、おおむね暗褐色粘質土および暗茶褐色砂質土で行い、その標高は66.9～67.0mである。

2　検出遺構

本調査区（図３）で検出した遺構は、弥生時代～古墳時代、藤原宮期、平安時代末～鎌倉時代のおおむね３つの時代のものに分けられ、このうち平安時代末から鎌倉時代の遺構の密度が最も高い。以下、各時代の遺構をとりまとめておく。なお、遺構の時期は、基本的に出土遺物から推定した。

弥生時代～古墳時代の遺構

調査区の東部で南南東から北北西の方向に流れる弥生時代後期後半～古墳時代の流路（図２）を検出、また、調査区南東部で東西方向の流路を検出した。

SD8890　SD8891とSD8892に先行する南南東から北北西の方向の流路。底部付近には砂層が見られ、水が流れていた状況を示している。弥生時代後期後半の土器が出土しており、この時期に機能していたものと見られる。もともと調査区北部では広がっていたこの流路が徐々に埋まって、SD8891とSD8892のかたちとなり、さらにSD8891が最後まで流路としての姿を保ったのであろう。

SD8891　SD8890の東部を踏襲した流路。延長約25mを検出し、幅２～４mの屈曲した形状であるが、堆積土は、粘土ないし粘質土であり、比較的滞水していた状態が推定できる。出土する土器は基本的には布留式のものであり、この流路が古墳時代初頭まで存続していたことがわかる。

SD8892　SD8890の西部を踏襲した流路。幅１～２mで延長10m分を検出した。布留式もわずかに混じるものの庄内式の土器が多数を占めていることから、SD8890が徐々に埋まった後SD8891と併存し、その後SD8891よりも早い時期、おおむね弥生時代終末期に埋まったものと見られる。

SD8893　東からSD8891に流れ込んでいたと見られる浅い流路。

SD8895　幅２～３mで延長８mを検出した東西方向の流路。北側にやや溢れた状況が見られ、西端で南に折れ曲がる模様。人工的な溝の可能性があり、時期は弥生時代ないしは縄文時代にさかのぼる可能性もある。

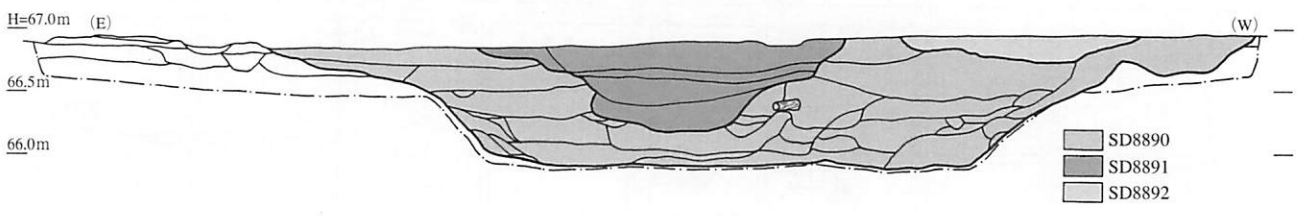


図2　SD8890・8891・8892断面図　1：60

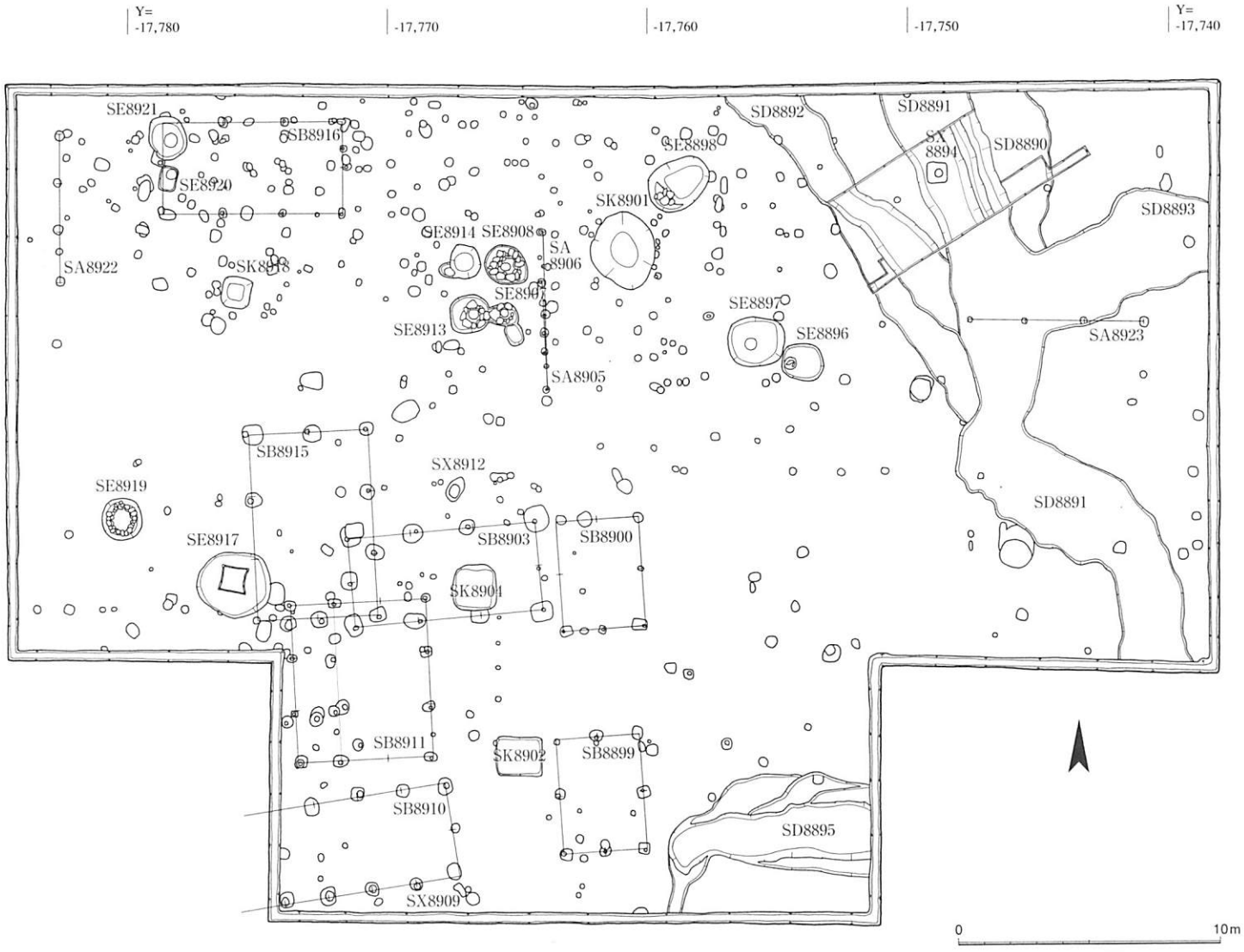


図3　第94次調査遺構図　1：250

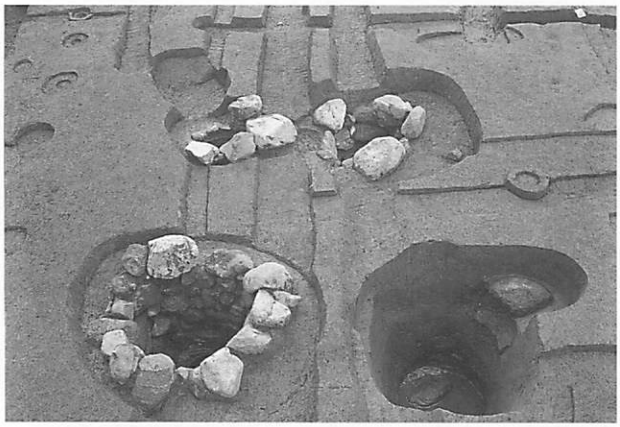
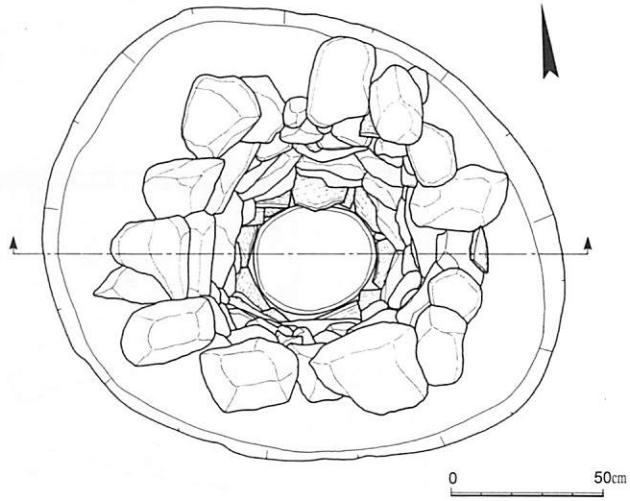


図4　4基まとまった井戸　SE8908ほか・北から

図5　曲物井戸SE8921



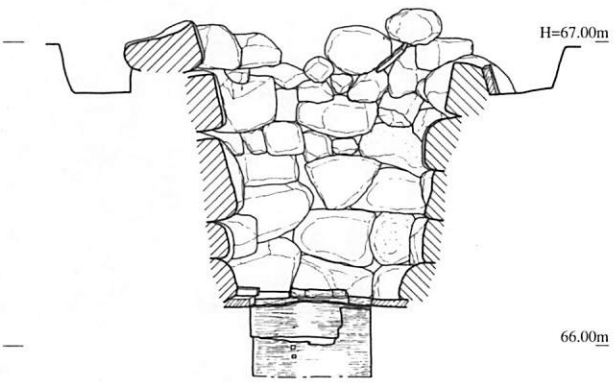


図6　SE8908平・断面図　1：25

藤原宮期の遺構

藤原宮期または藤原宮に先行する条坊の時期と推定できる遺構として、調査区中央北寄りで大きな土坑、同中央南寄りから西部にかけてで3棟の建物を検出した。

SK8901　長径3.0m、短径2.5m、深さ1.0mの楕円形の土坑。井戸の可能性もある。飛鳥Ⅴの土器が出土しており、確実に藤原宮期の遺構である。

SB8899　桁行2間（柱間2.2m）、梁間2間（同1.6m）の掘立柱南北棟建物。柱穴から飛鳥ⅣまたはⅤの土師器が出土した。

SB8900　SB8899と全く同規模・同形式の建物。SB8899と東西方向にはわずかにずれているが、約4m北に平行して建っており、同時期に併存していたものと見られる。

SB8910　桁行5間（柱間1.75m）以上、梁間2間（同1.8m）の掘立柱東西棟建物。飛鳥ⅣまたはⅤの土師器が出土。

平安時代末～鎌倉時代の遺構

平安時代末～鎌倉時代（12～13世紀前後）のものと考えられる遺構として、調査区東部と南部を除いた各部で検出した10基の井戸、同南西部の3棟の建物、同北西部の1棟の建物などがある。なお、本調査区の南方約50mの第75-12次調査で検出した環濠の一部と見られる南北溝は本調査区までは延びていないことを確認した。

SE8896　1.7×1.4mの隅丸長方形の掘形を持ち、底に曲物を据えた井戸。曲物内に石が投棄されており、曲物上部に石組が組まれていたと見られる。なお、曲物にSE8897を起点とする竹管が連結しており、併存していたことがわかる。

SE8897　2.2×1.9mの隅丸長方形の掘形を持ち、底に曲物を据えた井戸。曲物周辺に石の投棄があり、曲物上部に石組を備えていたと見られる。

SE8898　底に曲物を据えた石組の井戸。

SE8907　1.8×1.5mの楕円形の掘形を持ち、底に曲物

を据えた石組の井戸。なお、この井戸とSE8908・SE8913・SE8914の4基の井戸は、3m四方の範囲に隣接して掘られている（図4）。

SE8908　1.8×1.5mの楕円形の掘形を持ち、底に曲物を据えた石組の井戸。曲物の直径は40cmで、曲物の天端周囲を平坦にならして平瓦をドーナツ状に敷き詰め、そこから10～30cmの石を用いて円形の石組（残存高90cm）を組むという造りは、今回検出した井戸の中では最もていねいで、残存状況も良好である（図6）。

SE8913　1.5×1.5mの隅丸方形の掘形を持ち、底に曲物を据えた石組の井戸。

SE8914　1.3×1.1mの不整円形の掘形を持つ井戸。石組や曲物は残存しない。

SE8919　直径1.6mの円形の掘形を持つ石組の井戸。底に大量の石が投棄されており、曲物は確認できなかった。

SE8920　1.0×0.7mの隅丸長方形の掘形を持ち、底に曲物を据えた小規模な井戸。

SE8921　1.7×1.3mの楕円形の掘形を持ち、底に曲物を据えた井戸（図5）。曲物は直径38cm高さ27～28cmのものを3段重ね、その上に直径50cm高さ13cmのものを据えている。その上部の構造は、石組を備えた痕跡がないことから、木組の枠が考えられる。

SB8903　桁行3間（柱間2.4m）、梁間2間（同1.7m）の掘立柱東西棟建物。この建物とSB8911・SB8915は平面が重なることから時期を違えて建っていたものである。

SB8911　桁行3間（柱間2.0m）、梁間2間（同1.7m）に西庇のついた掘立柱南北棟建物。

SB8915　桁行3間（柱間2.4m）、梁間2間（同2.3m）の掘立柱南北棟建物。柱穴の一つから10世紀以降の土師器が出土しており、平安時代中期頃にさかのぼることも考えられる。

SB8916　桁行3間（柱間2.3m）、梁間2間（同1.75m）の掘立柱東西棟建物。SE8921に先行するものである。

SA8905　南北塀。3間（柱間1.4m）分を検出。4基の井戸（SE8907・SE8908・SE8913・SE8914）の東に接して作られている。SA8906とは連続する時期に作られたものと見られる（前後関係は不明）。

SA8906　南北塀。4間（柱間1.3m）分を検出。

このほか、SK8902、SK8904、SK8918の隅丸方形の土坑は、土取りの跡または井戸を掘りかけてやめた跡と見られる。また、調査区中央から北西部で検出した小穴の多数から瓦器が出土しており、この時期のものと見られる。これらの大半は、小規模な建物や塀の柱穴であったものであろう。

その他の時期・時期不明の遺構

その他の時期および時期の確定できない遺構は以下の通りである。

SE8917　調査区南西部で検出した井戸。直径2.8mの円形掘形を持ち、一辺1.4mの縦板組みの枠を据える。出土遺物から近世のものである。

SA8922　調査区西北部で3間（柱間1.9m）分検出した南北塀。検出面が高く、近世以降のものと見られる。

SX8894　調査区北東部SD8891の埋土上で検出した一辺90cmの方形掘形を持つ単独の柱穴。対応する柱穴がなく、性格は不明。形状から見て藤原宮期のものの可能性もある。

SX8909　調査区南端部中央部付近で検出した炉。わずかに焼土を残すのみで詳細は不明。すぐ西にも焼土範囲があり、これも炉と見られる。時期不明。

SX8912　調査区中央部付近で検出した炉。地面を浅く掘りくぼめた1.0×0.7mの楕円形の底を残すのみで上部構造は不明。

SA8923　調査区北東部で3間（柱間2.25m）分検出した東西塀。時期不明。　（小野健吉）

3　出土遺物

出土遺物は以下の通り。

土器　縄文時代から鎌倉時代にいたる時期の土器が出土している（図7）。

調査区内で検出された遺構には伴わないが、後期縄文土器が出土している（1～4）。

SD8890、SD8891、SD8892からは、弥生時代後半から布留式にかけての土器が出土した。特にSD8890では弥生時代後期の高坏、甕、壺が中心であり、SD8892では庄内式の高坏、甕、壺が、SD8891では布留式の甕と壺が多数を占める。

SK8901から藤原宮期の土器がまとまって出土している。土師器坏A、坏B（6）、坏C（5）、坏H、甕（7）、鍋、須恵器蓋（8）、坏A（9・10）、平瓶、甕、鉢A（11）がある。坏A（9）と鉢A（11）には内面に漆が付着して

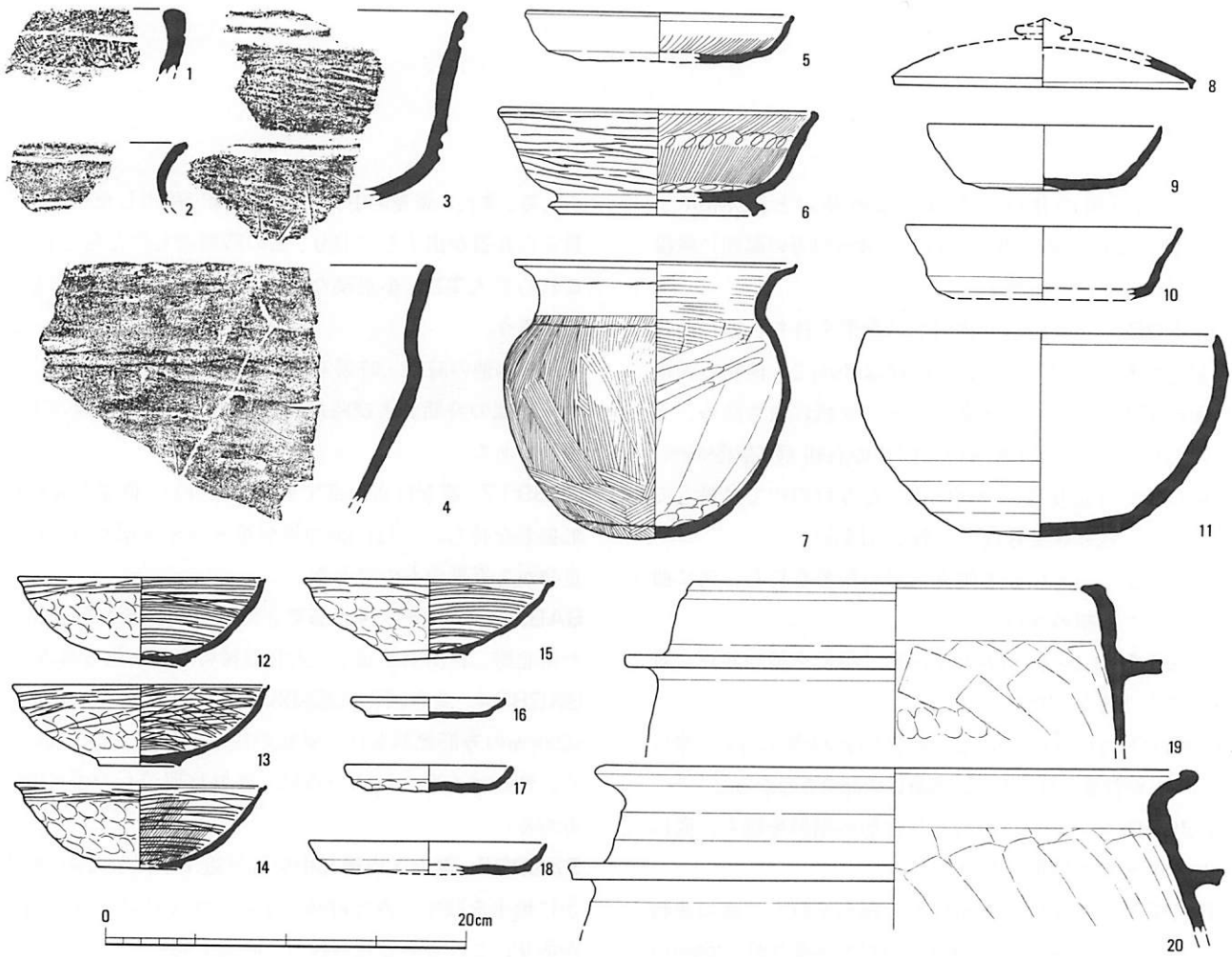


図7　第94次調査出土土器　1：4

いた。

12世紀後半から13世紀ごろに位置づけられる土器は、おもに井戸から出土している（12～20）。器種は、瓦器椀（12～15）、土師器小皿・皿（16～18）、瓦器羽釜（19・20）、摺鉢である。

瓦　軒丸瓦は6273C、6274Ab、6275A、6279B各1点、軒平瓦は6641C、6643Aaが各3点、6641E、6643C、6646A、6641、6646各1点がある。丸瓦は54点、13kg、平瓦が164点、31.8kg出土した。その他、熨斗瓦、塼、へら書きのある丸瓦がある。

木製品　中世の井戸9基で曲物を確認し、そのうち6基の井戸から遺存状態の良好であったものを中心に計10点の曲物をとりあげた。（鈴木恵介）

4　まとめ

本調査区で検出した遺構のうち、藤原宮期と確定できるのは土坑SK8910だけであり、宮に先行する条坊の時期（天武朝）の可能性のある3棟の建物（SB8899・SB8900・SB8910）を含めても、藤原宮期の遺構は希薄である。これまでの周辺の調査でも、藤原宮期の遺構はきわめて希薄であり、本調査でもその傾向は変わらなかったと言えよう。その原因として、この一帯で後世に大規模な削平が行われたことが想定されているが、もともと藤原宮のなかで空閑地的な部分であった可能性も少なからずあるのではないだろうか。その理由は、高い地下水位に求められる。この調査区の東部でも弥生時代後期後半～古墳時代の流路が南南東から北北西方向に横切り、また平安時代末～鎌倉時代、さらに近世の井戸が非常に高密度で検出され、それらが現在でもかなり高い水位を見せている。万葉集の歌からも藤原宮周辺は池や湿地の多い場所であったことがうかがえるが、そのなかでも標高が低く地下水位の高い西北部はとくに殿舎建設に適さない場所だったのであろう（図8）。藤原宮に続く平城宮は奈良山丘陵南麓の支丘先端部に位置し、二つの尾根と谷からなる地形に立地するが、水位の高い谷筋には佐紀池・水上池を築造して園池としており、地形に即した土地利用がなされている。藤原宮では、存続期間が短かったこともあって、水位の高い場所でも、そうした園池築造はなさ

図8　調査区（矢印）および藤原宮跡　西北上空から

れず、空閑地的に残されたのではないだろうか。

次に、本調査区が最も高密度に利用されていた平安時代末から鎌倉時代の状況を見ると、井戸がきわめて多いことがその特徴としてあげられる。1,260㎡に10基（近世の井戸SE8917を除く）、井戸のない東部と南部を除けば750㎡に10基という高密度になり、しかも隣接して4基あるいは2基といった配置が目をひく。こうしたことから、これらの井戸は単に通常の生活に供されていたとみるよりも、むしろ水を使用する何らかの生業用と考える方が妥当かもしれない。いずれにせよ、建替えを伴う3棟の建物等の存在とも相俟って、この場所で生業を含めた生活が営まれていたことは確実である。本調査区の南方では、これまでの調査（藤原宮第27-6・63-2・66-3・66-4・75-12次）で複数の環濠居館の存在が想定されているが、本調査区内には環濠はなかった。しかし、上記のような生活空間を想定するとき、やはりこの場所も環濠に囲われていた可能性が大きいことが指摘できよう。それが居館なのか、あるいはもっと広い範囲を含む集落なのかは、今後の周辺の調査に待ちたい。

（小野健吉）

コラム：あ　す　か　ふ　じ　わ　ら　①

1998年度も発掘現場は4班編成で、調査を行った。前年度冬班も6月初旬まで稼働したが、本年度も飛鳥池遺跡をはじめ、重要遺跡での貴重な遺構・遺物の検出が相次ぎ、各班とも延長戦を強いられた。なお、第93次調査では瓦窯の調査のため、瓦整理室を中心に「飛鳥池瓦窯特別調査班」（1998.11.30～1999.1.18）が結成された。　（N）

表2　1998年度　現場班編成

	春	夏	秋	冬
調査員 ※：総担当 調査補助員	※安田龍太郎（考古第1） 深澤　芳樹（考古第1） 長尾　　充（遺構） 水戸部秀樹 渡邉　淳子（研修）	松村　恵司（考古第2） ※花谷　　浩（考古第1） 島田　敏男（遺構） 伊藤敬太郎 田福　　涼（研修）	※巽　淳一郎（遺構） 寺崎　保広（史料） 小澤　　毅（史料） 鈴木　恵介 渡邉　淳子	毛利光俊彦（史料） ※西口　壽生（考古第2） 小野　健吉（遺構） 村上　　隆（考古第2） 田福　　涼
調査期間と主な調査	1998.4.7.～7.31. 第87次（飛鳥池遺跡） 第90次（藤原京右八・一） 第92次（飛鳥池東方遺跡）	1998.6.11.～11.6. 第90次（藤原京右八・一） 第93次（飛鳥池遺跡）	1998.10.5.～1999.2.21. 第93次（飛鳥池遺跡） 第94次（藤原宮西北官衙）	1999.1.7.～5.7. 第94次（藤原宮西北官衙） 第95次（吉備池廃寺） 第96次（藤原宮西面南門） 第97次（飛鳥寺）

総括：部長　黒崎　　直　　写真担当：井上　直夫、中村　一郎／　保存科学：村上　　隆

◆西面南門・大垣の調査―第96次

1　はじめに

本調査は、特別史跡藤原宮の指定地内にある縄手池の護岸工事に伴う調査である。工事場所は、藤原宮の西面南門と西面大垣に当たり、これまでの周辺の調査（第37次、第58-1次、第83-13次など）によって遺構が残っていると判断されたところである。

調査区は、縄手池の南半東岸に沿って幅３～４m、全長約70mを設定した。面積は約204㎡、調査期間は1999年２月８日から３月１日までであった。

調査は池岸に密生した葦を切ることからはじめ、北から南に池の堆積土を順次除去した。池の堆積土は20～40cmあり、この下は西に向かってかなりの傾斜面となる。ベースは、弥生時代中・後期の遺物を含む茶褐色粘質土であり、この上には黄褐色粘質土が部分的に残っていた。後述する藤原宮西面大垣の柱穴のベースになっているので、藤原宮か先行条坊時期の整地土になる可能性がある。

2　検出遺構

検出した主な遺構は、藤原宮の西面大垣である掘立柱塀SA258１条、先行条坊の東西溝SD6358１条、これらより新しい時期の掘立柱列SX03・04の２条である。他には、弥生時代の斜行溝SD02１条、土坑SK05１基、縄手池の護岸のしがらみSX01や、耕作に伴う東西及び南北方向の細溝が多数ある。なお、藤原宮の西面南門SB6350の基壇土は削平され痕跡もなかった。

SA258　藤原宮の西面を画す掘立柱南北塀（西面大垣）であり、19間分を検出した。柱間はほぼ2.7m（９尺）等間である。柱掘形は、一辺1.2～1.5mであるが、削平されており、残りがいい所でも深さ30～40cmほどであった。拳大の石を底に入れて根固めとしているものが多く、一部には人頭大の石や切断した角材（長さ約50cm）を礎板としていた。後者は南から２本目と５本目の柱穴である。角材は幅が33～33.5cm、厚さは19～21cm。底の一面のみきれいな手斧痕が残る。もとは梁状の建築部材であったと考えられる。

SD6358　素掘りの東西溝であるが、池の掘削によって底が５～10cm残る程度で、西は削平されていた。幅は1.5～2.0mである。遺物も弥生土器や須恵器小片が若干出土したにすぎない。東の第58-1次北区の調査で検出した先行条坊の五条大路北側溝の西の続きにあたろう。

SX03・04　藤原宮西面大垣の柱穴と重複するが、これより時期が新しい南北方向の小柱穴列２条である。南のSX03は６間分あり、総長約11.0m。柱間は1.6～2.4mと不揃いである。柱穴の大きさは20～40cm。おそらく塀であろう。方位は北でやや西に振れる。北のSX04は２間分あり、総長約4.5m。柱間は等間である。柱穴の大きさは、20～30cm。建物の西妻の可能性がある。方位は北でやや東に振れる。

SD02　西面南門の推定位置で検出した素掘りの斜行溝。北西に流れており、幅は東南部で約１m、深さは0.5mで断面がＶ字状になる。弥生土器小片が出土。藤原宮期の整地土下にあり、弥生時代の溝と考えられる。

SK05　西面大垣の柱穴と重複し、これより古い不整形な土坑。南北長は約３m、深さは約10cm。弥生時代後期後葉の土器がかなり出土した。土坑の埋土には比較的多くの炭が混じっていた。

SX01　縄手池の東南で検出した護岸施設。木杭を打って、これに竹を縫うようにからませていた。このしがらみの裏込めから土器が出土したが、池の削平年代に関わる資料はなかった。

3　出土遺物

遺構のベースが弥生時代中・後期の遺物包含層であるために、各所からこの時期の土器が出土した。石包丁７点、石鏃１点も出土。藤原宮期および先行条坊期の土器

は少ない。瓦は、藤原宮式軒平瓦6646型式の新種ほか1点と、丸・平瓦の小片約400点（約40kg）が主に池堆積土から出土した。耕作用と思われる細溝からは、平安時代及び中世の土器が少量出土。縄手池東南隅のしがらみ部分の池堆積土からは、近世の陶磁類が出土した。

4　小　結

藤原宮の西面南門SB6350は、礎石据え付けの痕跡だけでなく、基壇の地業も全く残っていなかった。だが、西面大垣の掘立柱穴が、南では途切れることから、この付近にあったと推定できる。南の第58-1次南区の調査でも同様で、ここでは西面大垣の掘立柱穴が北端で途切れている。今回の調査区で検出した柱穴心と第58-1次南区北端の柱穴の柱抜取穴心との距離は30.7～30.8m。

藤原宮で門の規模が判明しているのは、北面中門SB190（第18次調査）で、桁行5間17尺等間、総長25.2m前後、梁間2間17尺等間、総長10.1m、門と塀の取り付きは塀の柱間と等しい9尺である（1尺＝29.7cm）。西面南門も北面中門と同規模に復原できる。東面北門（第27次調査）も北面中門と同規模に復原している。

西面大垣SA258について、礎板の残る南から2番目の柱穴と根石らしい石の残る北から5番目の柱穴から、柱間寸法と柱列の方位を算出しておく。前者の推定柱心の座標値はX＝-166,816.50、Y＝-17,881.15（最小計測単位5cm、以下同じ）、後者はX＝-166,779.00、Y＝-17,881.45であり、柱間寸法は2.68m、柱列の方位はN0度27分30秒Wの値を得る。この数値は西面南門南方の第10次調査で得られた西面大垣の柱間寸法2.66m、方位N0度31分00秒Wと近似しており、同時期に計画・施工されたことを裏付ける。　（毛利光俊彦）

図9　西面大垣SA258の柱穴と礎板　北から

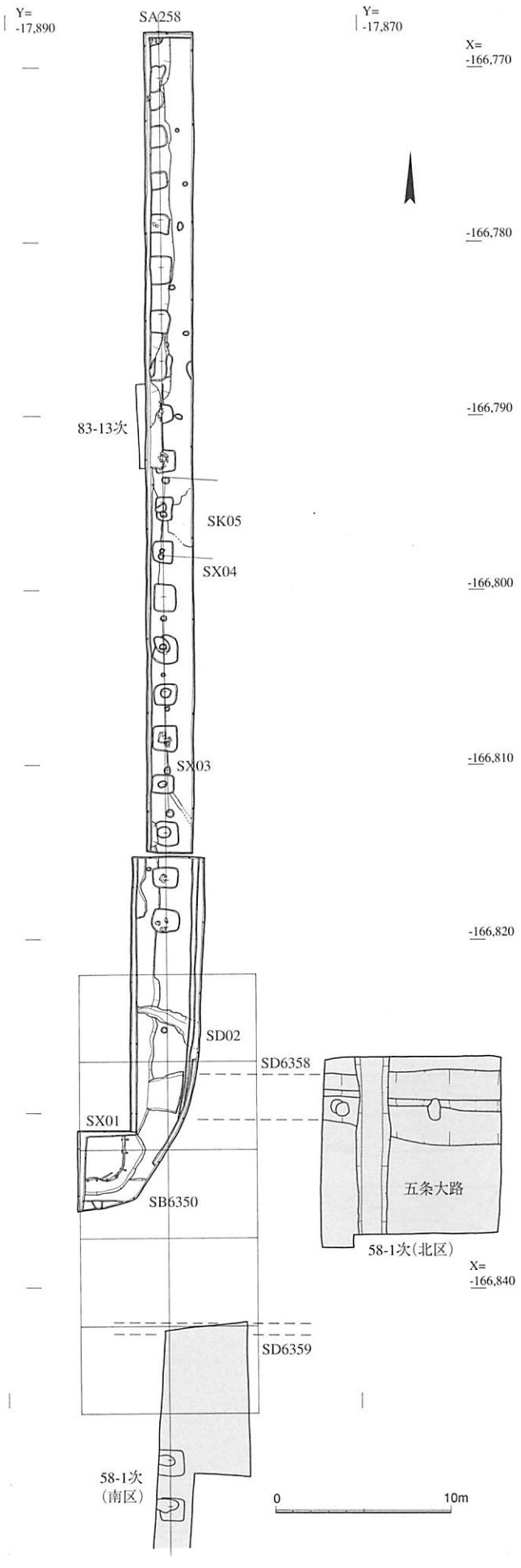


図10　第96次調査遺構図　1：350

コラム：あ す か ふ じ わ ら ②

◆和同開珎銅銭と伴出した土器

和同開珎の初鋳は和銅元年（708）とするのが通説である。平城京へ遷都する3年前のことで、藤原宮・京には初鋳後早くに埋没した和同銭が残された可能性がある。しかし、それと推定できるものは、これまでのところ、東一坊大路西側溝出土の和同開珎銀銭3枚のほかわずかで、条坊側溝出土の銅銭は2枚の富本銭だけである。

1995年1月に藤原京右京七条一坊西南坪から出土した一枚の和同開珎銅銭はその貴重な例である。和同銭は古銭研究者が「背広郭」「闊縁」と呼んで「古和同」とする特徴を持ち、その成分も、本年報50頁に報告したように西暦700年までに飛鳥池遺跡で鋳造された富本銭や、古銭研究者のいう「不隷開」古和同銭などと同じく、数%のアンチモンが含まれている。

場所は西南坪一町を占めた宅地の西北部につくられた池状遺構SX385とその北端に設けられた東西方向の排水路SD384の接点付近で、土器の他に鍛冶・鋳造・漆工関係遺物、漆塗り刀子柄などが伴出した。遺構には周辺にあった宅地内工房からの廃棄物が捨てられたとみられ、条坊施工期から藤原京廃絶後程ない頃までの遺物が含まれることになる（『藤原概報26』）。

伴出した土器には土師器蓋（1）、杯A（2～5）、杯C（6～8）、杯G（9～11）、杯H、大型椀B（12）、皿、高杯、鉢、甕、鍋（13）、カマド、須恵器杯A（18）、杯B蓋（19～21）、杯B（22～24）、蓋（14）、杯G（17）、椀B（15）、大皿、鉢、壺、短頸壺（16）、平瓶、甕などがある。これらには飛鳥Ⅳの標式資料であるSD1901A例に似たものと、飛鳥Ⅴの藤原宮東内濠SD2300例に似たものがあり、飛鳥Ⅳ～Ⅴにまたがる内容を持つ。

器高が低くて外面の磨きが粗略な土師器杯A（5）や、径高指数19の杯C（8）など、飛鳥Ⅴでも新しい傾向とみえるものがあり、須恵器杯B蓋に20・21など内面のかえりのなくなったものが多いことが、より新しい段階のものが含まれていることを示すであろう。土師器大型椀B（12）は珍しい器種であるが、ほぼ同時期の総合工房である飛鳥池遺跡の土器に類例があり、高台部はそれで補った。鍋の多様な点、杯C、杯Gなどに漆が付着し、灯明の跡がみられることでも、この土器群は飛鳥池遺跡や藤原宮造営時の運河と目されるSD1901Aでの構成に類似している。富本銭と「古和同」銅銭との関係を明らかにするためにも、遺構の性格が共通する飛鳥池遺跡及びSD1901A出土土器等との比較によって飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器の再検討を急ぎたい。（西口壽生）

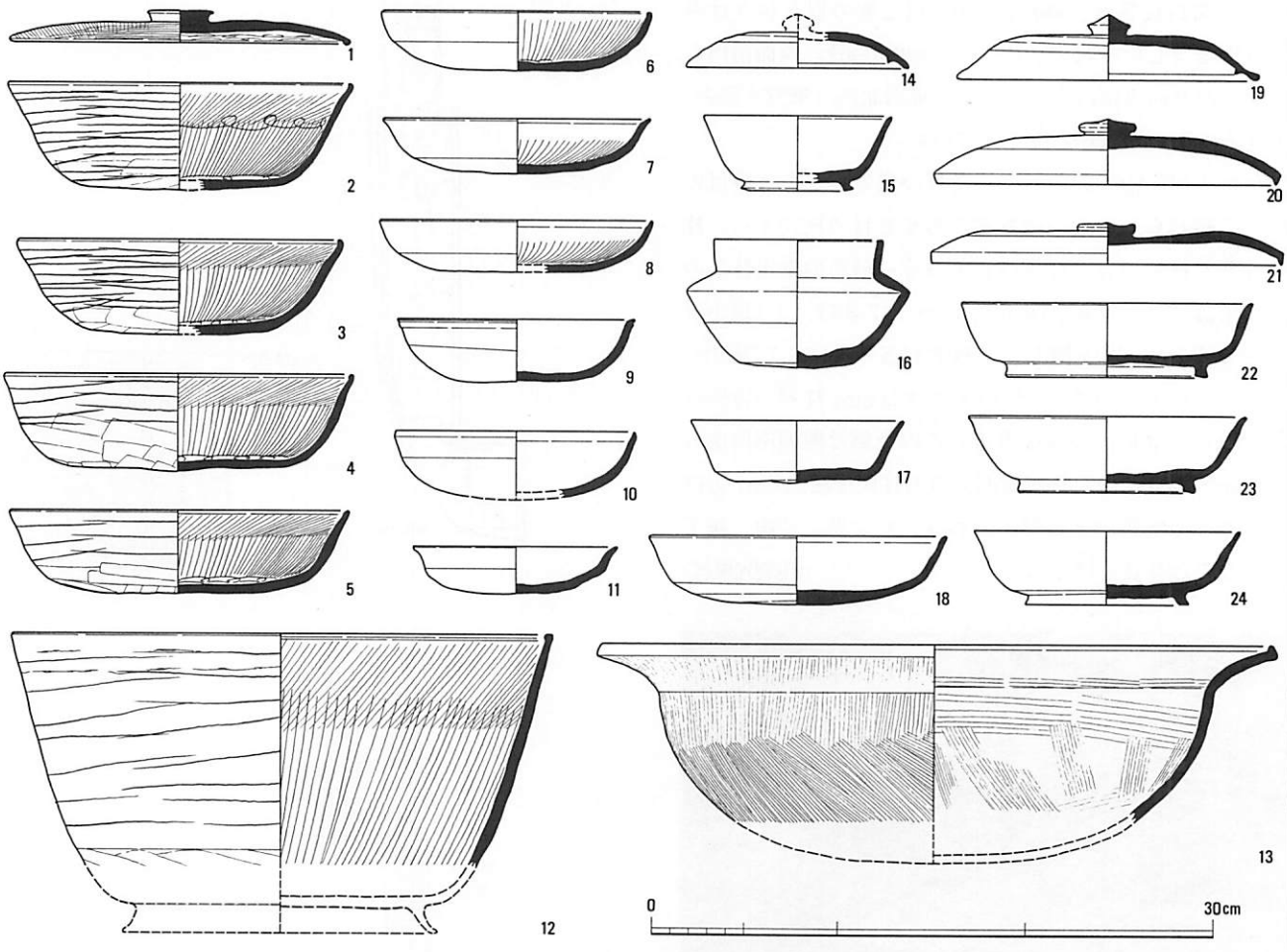


図11　藤原京右京七条一坊西南坪SD384・SX385出土土器　1：4

II 藤原京の調査

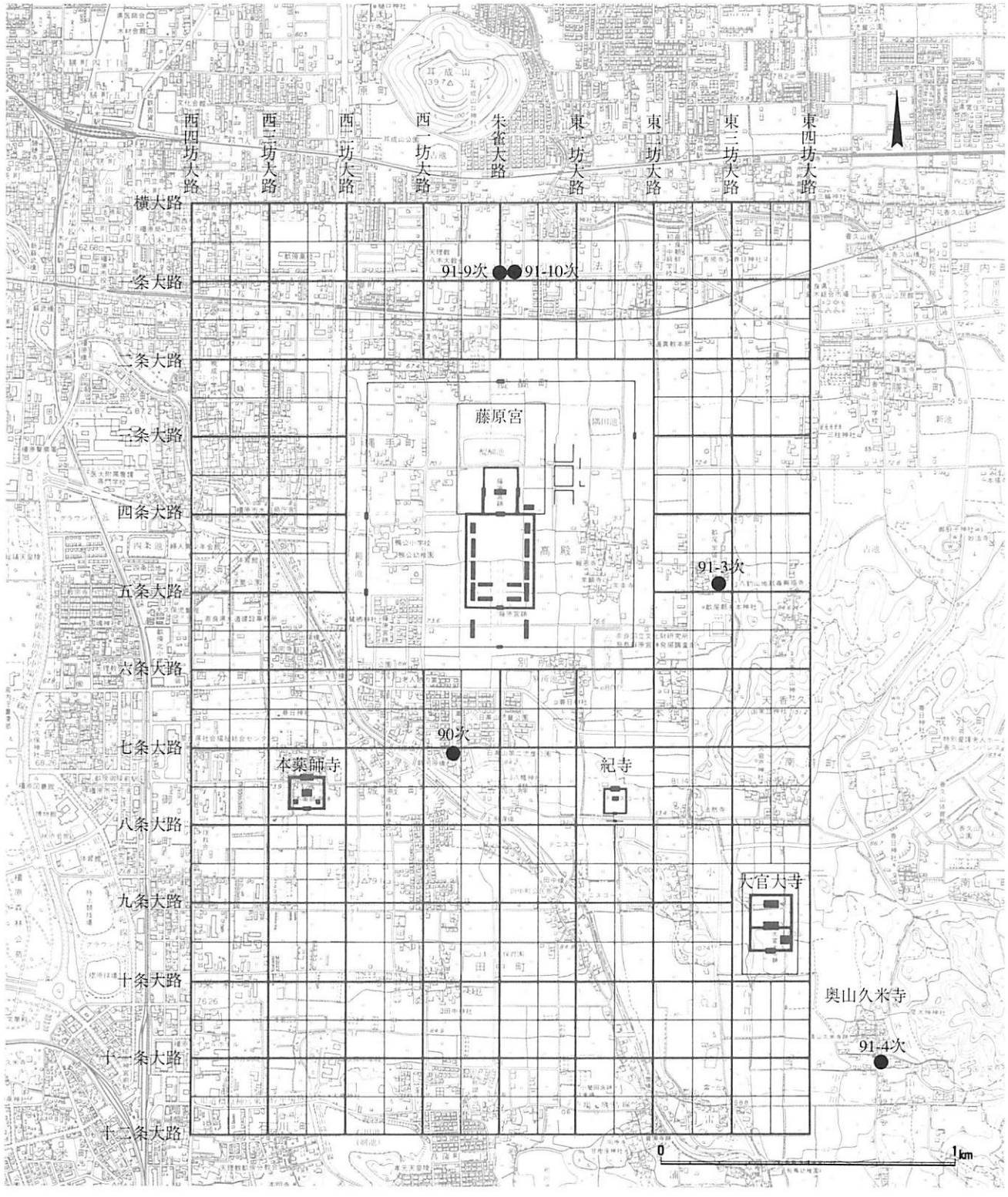


図12　藤原京の調査位置図　1：20000

◆藤原京右京八条一坊の調査―第90次

1　はじめに

本調査は、市営住宅の宅地造成に伴う事前調査として実施したものである。調査地は、藤原京右京八条一坊東北・西北坪にあたる。

周辺の調査では北隣の右京七条一坊西南坪（第19次調査『概報７』、第49次調査『概報17』・『藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告』1987年）で、坪の中軸線上に南門、中門、正殿、後殿、後後殿と、東西に脇殿などを整然と配した一町規模の宅地を確認し、同坪西南隅（第78-2次調査『概報26』）や七条大路と西一坊大路の交差点位置（第54-24次調査『概報19』）では、飛鳥川の氾濫を受け、藤原京期の遺構は削平されていることが確認されている。また東隣の右京八条一坊東北坪（第54-19次調査『概報19』）では、東側で日高山丘陵の制約を受けながらも、坪の北から1/4の位置に塀、1/3の位置には坪の東西の中軸線からやや西よりを中軸とした建物など、坪内を整然と割り付けた形で２時期にわたって建物や塀が存在したことが判明している。

今回の調査では、このように藤原京域でも調査が比較的稠密に実施されている地域において、西北坪を斜めに貫流する飛鳥川がその土地利用に与えた影響の具体像と坪内の建物群の配列の実態の解明が期待された。なお調査は東半（４月７日～５月28日）と西半（６月11日～７月30日）に分けて行った。

2　遺　構

調査区の基本層序は、上から淡褐色砂（現代盛土）、暗緑灰色土、礫混褐色土、礫混褐色砂・褐色砂（飛鳥川氾濫土）、黄白色粘質土（地山）で、礫混褐色砂上面、褐色砂上面が遺構検出面であった。

検出した主な遺構は、藤原京期に属するものと、中世に属するものの２期に分かれる。

藤原京期の遺構

西一坊坊間路の両側溝、建物６棟、東西塀５条、南北塀４条、土坑１基を検出した。

調査区東側で西一坊坊間路SF1732を検出した。東西に側溝をそなえ、路面幅6.2m、側溝心々間6.8mである。東側溝SD415は、調査区の北から14m分と南端から2.2m分、西側溝SD420は、北から７m分を確認した。ともに現状で幅0.7m、深さ0.1m、埋土は黄色粘土である。なお、SD415の北側には、西に1.2m続く溝SD447があり、この埋土も黄色粘土であることから、鍵手状に折れ曲がる可能性もある。

右京八条一坊東北坪の遺構は、東側溝の東4.2mに南北塀SA414がある。柱間は３間（1.8m等間）である。

西北坪については、西一坊坊間路西側溝の西２mにある南北塀SA421（柱間2.1m等間）が、坪の東側を画する塀で、調査区の南北全長にわたって13間分を確認した。柱掘形は比較的大型で一辺1.2～1.5mの方形を呈する。調査区を拡張して、この北端部で東西塀SA445（柱間2.8m等間）が西に鍵手状に取り付くのを確かめた。これは坪の北側を画する塀である。東西塀SA422（柱間2.2～2.7m）は、SA445がSA421に取り付く柱穴から南、柱間３間分の位置にある。ただし東端部はSA421に接続せず、5mほど離れる。西に７間分を確認したが、その先は伸びない。調査区西側でSA421・445と柱穴の規模がほぼ同じである南北塀SA441（柱間2.1m等間）を検出した。その東3.9mに、SA441と柱間のほぼ等しい南北塀SA440がある。坪東端のSA421からの距離はSA441まで57.7m、SA440まで53.8mである。

坪内の建物遺構は、中央に２棟の東西棟建物、坪東寄りと坪西寄りにそれぞれ２棟の南北棟建物を検出している。中央の東西棟建物SB430とSB431は南北に並ぶ。SB430は桁行６間（2.55m等間）、梁間２間（2.1m等間）で、棟通りの東から２間目と５間目に柱穴がある。

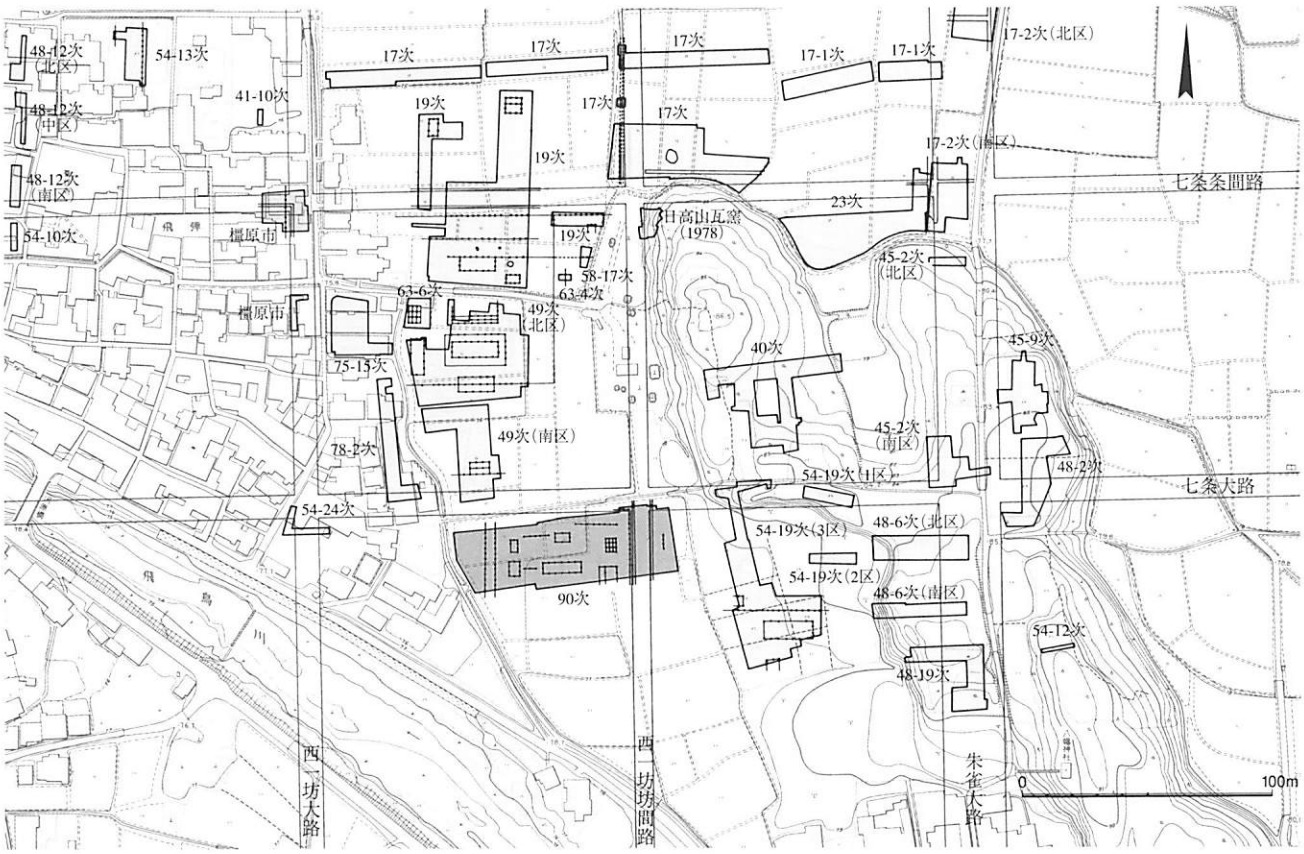


図13　第90次調査位置図　1：3000

SB431は桁行２間（2.9m等間）、梁間２間（1.6m等間）である。これらの建物の東西方向の中軸線は、SA421とSA440の間の二等分線に近い。

坪東寄りでは南に西庇付の南北棟建物SB428がある。身舎の桁行２間以上（2.3m等間）、梁間２間（2.2m等間）である。この北にはSB428の身舎側柱に柱筋を揃えて南北棟総柱建物SB425がある。桁行３間（1.8m等間）、梁間３間（1.4m等間）である。SB425とSA422の間にある東西塀SA423は、柱穴が小さく直径0.3mほどである。柱間は２間（柱間は東が２mで西が３m）である。

坪西寄りでは、南に南北棟建物SB437があり桁行３間（1.8m等間）、梁間２間（2.1m等間）である。この北の南北棟建物SB436は桁行３間（1.7m等間）、梁間２間（1.3m等間）である。SB430とSB437の間には東西塀SA438がある。柱間２間（2.5m等間）で、SB430とSB437の間を南北に仕切る。SB431とSB436の北側柱にそろう形で東西塀SA446がある。柱穴の規模はSA423とほぼ同じである。柱間は５間（柱間1.8～2.2m）である。

土坑SK435は、東西６m、南北３m以上、深さ0.2mで埋土に藤原京期の土器を含む。調査区の中央北端にあり、東西塀SA422の西延長上にあたる。

中世の遺構

斜行溝１条、東西溝１条、南北溝１条、土坑２基、井戸５基などを検出した。

斜行溝SD444は、調査区の西隅を南東から北西へ流れる12世紀頃の飛鳥川の一部である。幅４m以上、深さ1.6m以上を確認した。東西溝SD418は調査区の東南隅を東から西へ流れる。深さ0.2m。時期は、11世紀末から12世紀後半である。南北溝SD424は調査区の中央を南から北へ流れる。深さ0.2m。時期は12世紀後半である。

土坑SK427・429は、ともに深さ0.3mほど。時期は14世紀から15世紀頃である。

井戸は、調査区の東から順にSE413・419・432・433・442がある。いずれも12世紀頃のものである。SE442は直径1.5m、深さ１mの円形掘形に、高さ0.2～0.3m、直径0.3mの曲物を掘形の北寄りに４段積み重ねる（図16）。なお、井戸を埋め戻す際に、４段目の最上面まで埋め戻した後、瓦器椀を４個と３個ずつ入れ子状に置き（図17）、さらに、そのまわりを20cm程の石で囲い、口縁部を下にした羽釜で蓋をしている（図18）。ただし羽釜の底部は後世に削平されているため、本来、底部が完形であったかは不明である。

3　出土遺物

出土遺物は、溝や井戸、柱穴などから出土した土師器・須恵器・瓦器などの土器と、ごく少量の瓦である。ここでは中世井戸SE442の資料を図示する（図15）。

図14　第90次調査遺構図　1：400

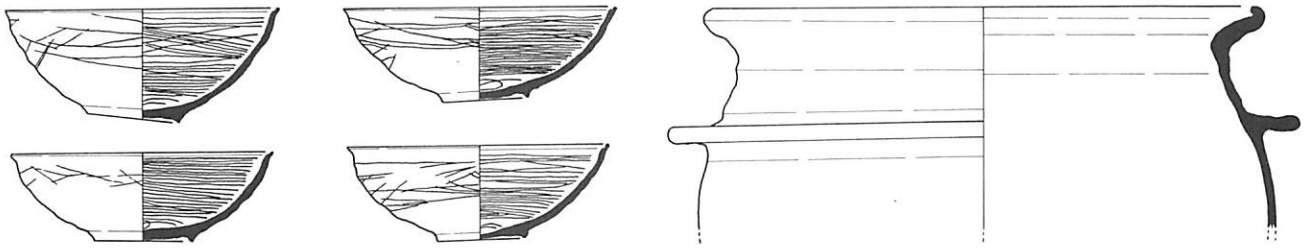


図15　井戸SE442出土土器　1：4

4　まとめ

藤原京期と中世の遺構がみつかった。特に藤原京期の条坊遺構と土地利用に関して大きな成果があがったので、その成果を、ここにまとめておきたい。

西一坊坊間路　東西両側溝を確認した。西側溝SD420や南北塀SA421は、右京七条一坊西北坪で確認（第17次調査『概報６』）した、西側溝と坪の東を画する南北塀の南延長線上に位置する。また七条一坊西北坪では東側溝は検出できなかったが、今回確認した両側溝の溝心々距離6.8mは既知の坊間路の規模とほぼ合致し、SD415を東側溝とみなせよう。

七条大路　道路側溝は確認できなかったが、今回みつかった西北坪の北を画する東西塀SA445と右京七条一坊西南坪（第49次調査）で確認した南を画する東西塀の間15mにあったと考えられる。

西北坪の土地利用　北は七条大路に沿って東西塀SA445、東は西一坊坊間路に沿って南北塀SA421がめぐる。西には、外側に南北塀SA441、内側に南北塀SA440がある。この内、内側のSA440と東のSA421との塀間距離53.8mの２等分位置を中軸線にして、整然とした建物配置を見ることができた。したがって外側のSA441については、柱間寸法が同じなのを根拠に、SA440と一連とする他に、SA440の西に追加したか、あるいは建て直しの可能性もあろう。さらにSA440は坪中心線より東8.9mに、SA441は坪中心線より東5.0mにあって、どちらも坪中心線の東にある理由については右京七条一坊西南坪にある宅地の南門から南に延びる道路をSA440やSA441の西側に想定してはどうか。すなわち南北塀の位置を、北側の宅地利用を考慮した結果であると推定するのである。なお、今調査区は当坪の北から1/4までで南を画する塀は確認していない。が、SA440やSA441の南延長上で現飛鳥川の右岸堤防に交差する位置が、ほぼ当坪の南北２等分線上にあたることは注目される。

以上のように、今回の調査では調査区全面に藤原京期の遺構が良好に残存していたので、藤原京の条坊とその利用法の実態について特に重要な資料を提供することとなった。今後の周辺での調査の進展を期待したい。

（伊藤敬太郎・深澤芳樹）

図16　井戸SE442

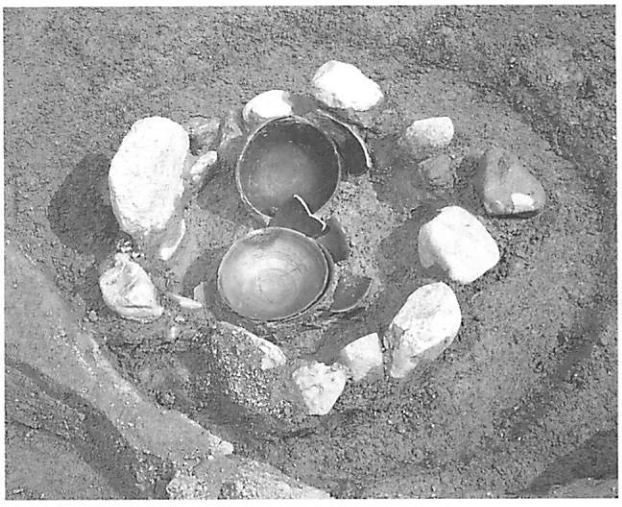


図17　井戸SE442　瓦器を埋納した状況

図18　井戸SE442　羽釜で蓋をした状況

コラム：あ す か ふ じ わ ら ③

◆土師質の当具について

飛鳥池遺跡（飛鳥藤原第93次調査）からは、土師質当具２点（42頁、図48）が出土している。ここでは他遺跡の出土例も含め、当具とそれを使用して作られた土器について考えてみたい。

まず土師質当具について説明しよう。飛鳥池遺跡で出土した当具１は土師質。胎土は砂粒を含み粗く、明橙色を呈す。当部中央付近に黒斑がある。全形は茸形で当部が直径7.0cmのほぼ円形、握部は一辺2.5cm、長さ1.5cmの直方体状をなす。当部はやや外膨らみのカーブを描き、無紋。外側に数箇所の傷がある。表面の調整はナデ。当部と握部の接する部分は指押さえによるくぼみがある。当具２も土師質。胎土は密で、淡黄色を呈す。当部中央付近と握部に黒斑がみられる。全形は茸形で、当部が直径4.4cmのほぼ円形、握部は長さ1.0cm、断面1.8×1.4cmの楕円形を呈す。当部はわずかに外膨らみのカーブを描き、無紋。表面の磨滅が著しいため調整は不明である。

平城宮第18次調査出土の当具（図19-1）は土師質。胎土はやや粗で、黄褐色を呈す。当部上面から側面にかけて黒斑の付く箇所がある。全形は截頭円錐形。当部は直径7.8cmのほぼ円形で、握部は長さ8.0cm、断面は上端部で直径3.9cmのほぼ円形をなし、当部に近づくにつれて太くなる。当部はやや外膨らみのカーブを描き、無紋。調整はナデで、握部にはてづくねで成形した際、握り出した指の痕跡が明瞭に残る。

飛鳥池遺跡の当具は共に上層の工房作業面から出土しており、他の出土遺物からみて７世紀後半のものである可能性が高い。平城宮出土の当具は、８世紀以降の包含層から出土している。

上記の当具に共通するのは①土師質、②有黒斑（野焼きである）、③当部が無紋、の３点である。①・②から、当具は土師器と同じ焼成法によっており、これらの当具は土師器を作るための道具であった可能性が高い。それでは７世紀から８世紀にかけてつくられた土師器に、③無紋の当具を使用してつくられた痕跡はあるのだろうか。

７・８世紀の土師器甕のなかには、内面底部から体部にかけて円形状の凹面がみられるものがある。また外面に内面の凹面に対応して平坦面も観察できる場合がある。これは成形の際内面に当具を当てがい、外面を叩いたためと考えらる。ここで今一度土師器甕内面の当具痕を詳しく観察してみると、さまざまなタイプのものがあることがわかる（図20-3～6）。3・4には浅く丸く凹んだ痕跡がある。凹面のなかには微少な凸部がついており、それがそれぞれ同一の形状を有し、かつ、同じ位置関係を保っている。したがってこの凹面は無紋当具の当たった面で、凸部は当具本体の傷もしくは亀裂が、甕の器面にスタンプされたものと推定される。実際飛鳥池遺跡の当具１には当部上面外側に数カ所の傷があり、この部分を当てがった場合、4のようなスタンプ痕がついたであろう。5・6は共に同心円紋がついているが、5は当具に同心円の刻みを入れたもの、6は無紋の木製当具の木目部分が浮き出たものと考えられる。

以上の事実から、７・８世紀の土師器甕には叩きの技法で作られているものがあり、甕内面に残る当具痕から当具は、土製や木製、有紋か無紋かなど多様であったことがわかる。民族例では当具に円石を使用したり、手を当てる例も報告されている。実際、土師器甕内面に小さな窪みがみられる場合もあり、断定はできないがこれらの方法で製作していた可能性も残る。ともあれ今回紹介した３点の当具は、土師器甕を製作するに際し、その技法の一つとして、土師質無紋当具を使用していたことを裏づける資料といえよう。

（渡邉淳子）

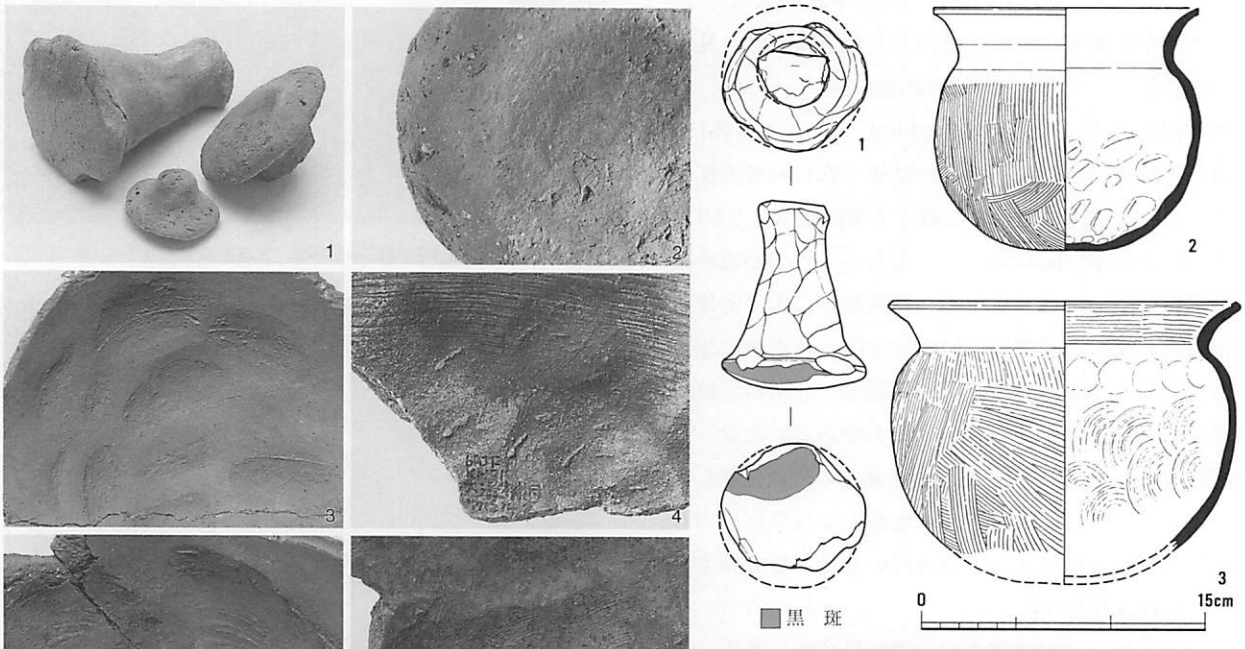


図19　当具・土師器甕実測図　1：4
1．平城宮第18次調査出土　2．藤原宮第16次調査出土（図20-3）
3．藤原宮第36次調査出土（図20-6）

図20　当具と使用痕
1．当具　2．当具についた傷　3～6．土師器甕内面当具痕

III 飛鳥地域等の調査

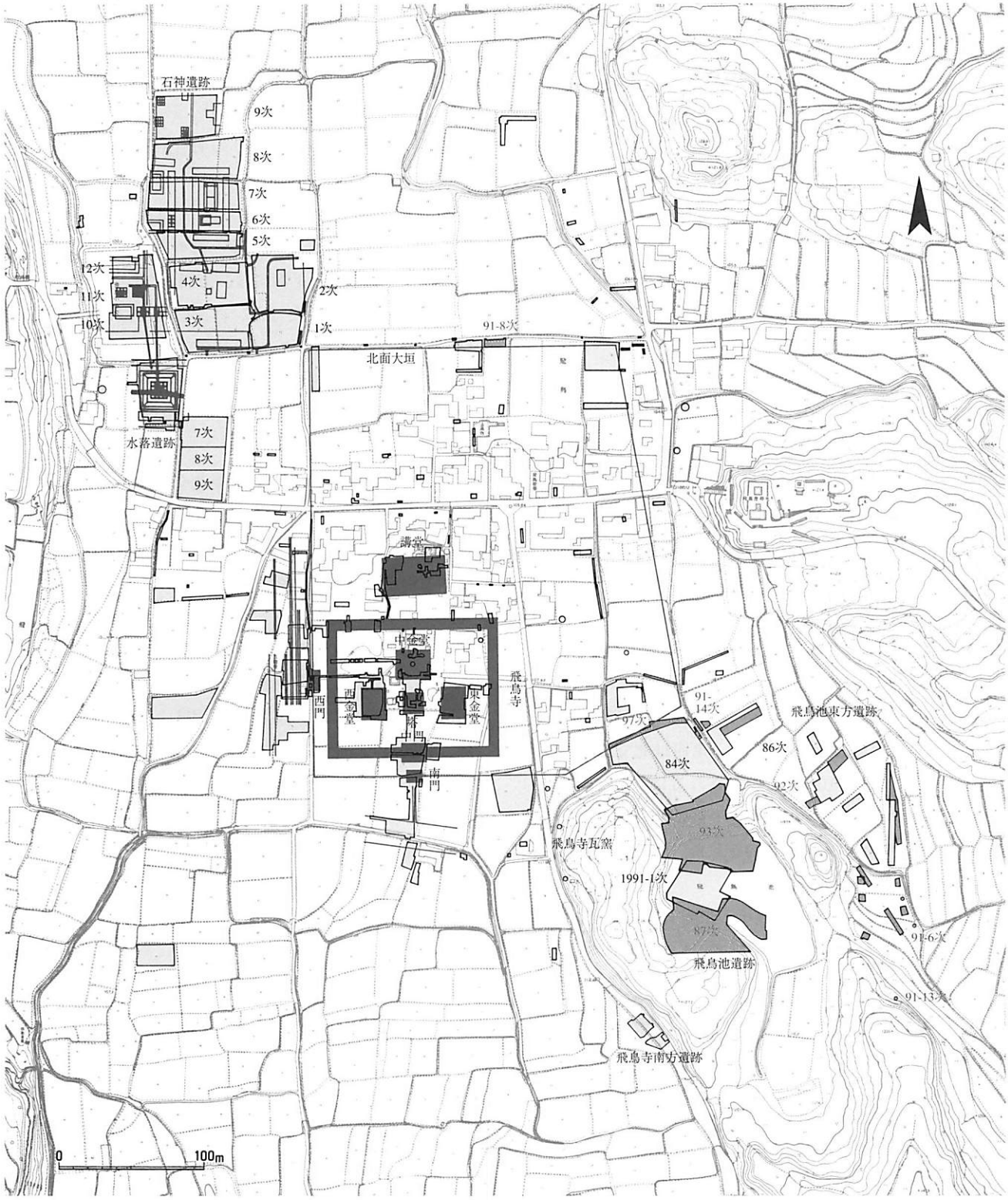


図21　飛鳥地域の調査位置図　1：4000

◆飛鳥寺の調査 ―第91-8次、第97次

1　第91-8次調査

はじめに

飛鳥寺の北面大垣は、『飛鳥寺発掘調査報告』（奈文研学報第５冊、1958）の段階では、中金堂の北約100m、大字飛鳥集落の中央を東西に通る、現在のバス通りと推測された。

だが、1977年にそれよりさらに北100mの地点を調査したところ、掘立柱東西塀（SA500）がみつかった。その北側の堀（SD501）からは多量の飛鳥寺所用瓦が出土したので、この塀が飛鳥寺の北面大垣と考えられた（『藤原概報８』52・53頁）。

1982年には、1977年調査区から80m東方で調査が行われ、北面大垣SA500の東延長部と大垣東北隅を確認した。東面大垣SA600は北面大垣と直交せず、鈍角に開いて北で西に８度振れた方位をとる（『藤原概報13』22～27頁）。

これらの調査の結果、飛鳥寺の寺地は南北に長い台形をしており、大垣間で南北293m、東西は北で215m、南で約260m、面積約70,000㎡と推定されるに至った。

今回の調査地は、1977年調査地の東に隣接する水田で、北面大垣と北外堀の確認を目的とした。調査面積は70㎡。

遺　構

調査の結果、当初の予想通り、北面大垣SA500と北外堀SD501を確認した（図22）。SA500は、柱掘形が一辺１～1.3m、深さは１m前後あり、そのほぼ中央には淡褐灰色砂質土が詰まった直径約0.3mの柱痕跡がある。柱穴は、山土混りの黒褐色ないし茶褐色砂質土で埋められ、埋土には少量の瓦片を含む。柱筋は国土方眼方位に対して、東で北に約１度振れている。

SA500の柱穴は、深さ0.2mほどの浅い溝状の地業SX990を行った上から掘り込まれている。地業の北辺は柱心から２mの位置にあるが、南は調査区外にあるため確認できなかった。山土混りの明黄灰色ないし明灰色の砂質土を埋土とする。

外堀SD501は、上幅2.6m、深さ1.1mあり、北面大垣SA500とは溝心で3mを隔てる。溝の埋土は、大きく３層にわかれる。中層と下層には、南側から流れ込むように、大量の瓦が入っていたほか、南岸の近くには人頭大の川原石が多くみつかった。1977年調査の概要報告では、SD501に石組護岸を想定したが、護岸とするには量が少ない。大垣SA500に基壇があり、その基壇化粧に使用された石だろう。

そのほか、大小の土坑や素掘溝を検出した。いずれも瓦器を含む鎌倉時代の遺構。

出土遺物

外堀SD501から大量の瓦が出土した。丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・塼があり、丸瓦は、2461点・339.2kg、平瓦は、7866点・805.5kgが出土した。

軒瓦は49点出土した（図23）。軒丸瓦45点に対して軒平瓦は４点と少ない。型式別の内訳は、Ⅰ型式36点（ａ10点、ｂ26点）、Ⅲ型式ａ３点、XIV型式３点、XV型式ａ１点、不明２点。軒平瓦は、Ⅱ型式（四重弧紋）１点、Ⅳ型式Ｂ種１点、Ⅵ型式２点。

軒丸瓦の８割は飛鳥寺創建の素弁十弁蓮華紋Ⅰ型式だが、その2/3は中房周囲と中心蓮子を彫り直したｂ。この出土傾向は、西隣の1977年調査区や、1982年の寺域東北隅調査区と共通する。

複弁蓮華紋軒丸瓦は、天武朝の造作に使われたと推定されるXIV型式と、平城京元興寺の創建軒丸瓦XV型式ａ（6201型式Aa種）がある。両者とも素紋の斜縁をもつ点でよく似るが、XV型式のほうが大型。また、中房蓮子の数が違い、XIV型式は１＋４＋８に対し、XV型式は１＋８＋８。

軒平瓦のⅣ型式Ｂ種（6661型式Ｂ種）は大官大寺所用、平安時代のⅥ型式は平城京元興寺と同笵。Ⅳ型式Ｂ種は

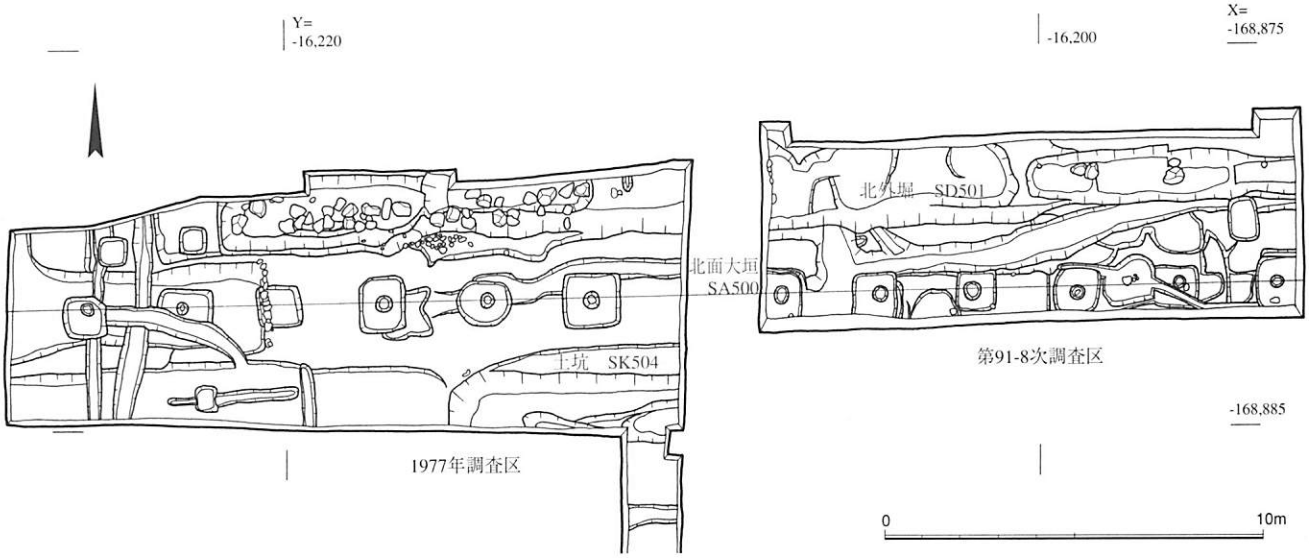


図22　第91-8次調査遺構図　1：200

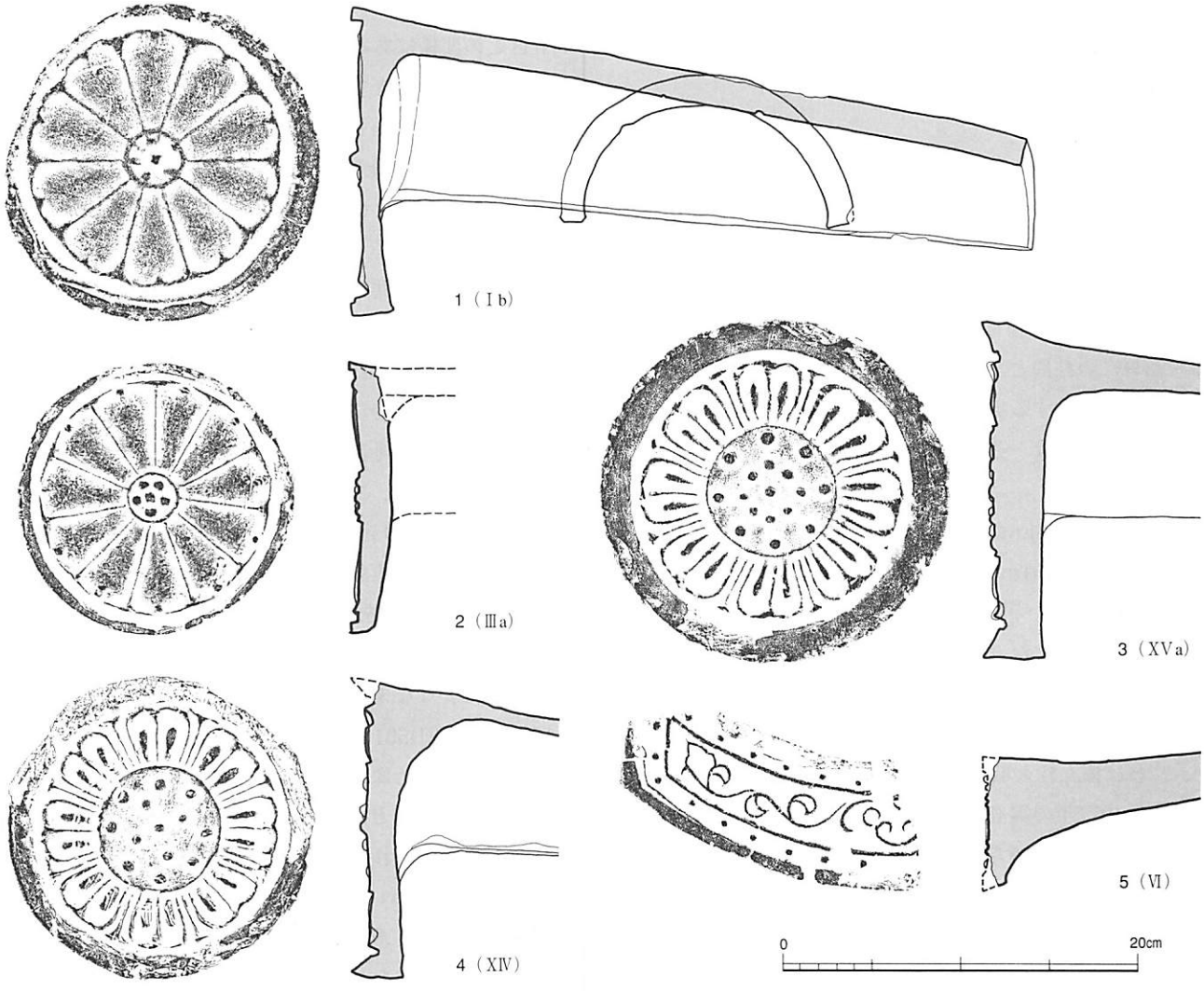


図23　第91-8次調査出土軒瓦　1：4

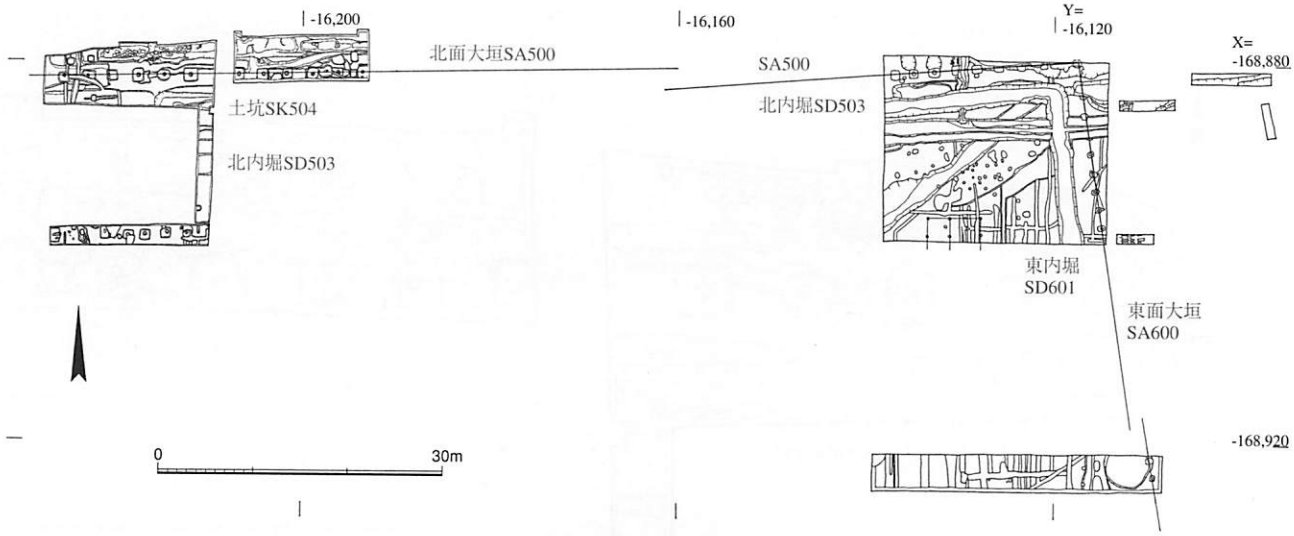


図24　飛鳥寺北面大垣と寺域東北隅の状況　1：800

左側辺を焼成後に削り、またⅥ型式の1点も左側辺を打ち欠いたような痕跡をとどめる。あるいは隅軒平瓦か。

ほかに、土器と鉄釘が出土した。

まとめ

北面大垣SA500を新たに5間分検出し、1977年調査区を含めると12間分を確認できた。二つの調査区両端の柱間距離は31.6mあり、柱間2.63mと計算できる。

この柱間は、西面大垣SA700（『藤原概報16』、『年報1997-Ⅱ』）および南面東方の掘立柱大垣SA100（本年報23～25頁）の柱間と全く一致する。西面大垣とは、柱筋の方眼方位に対する振れもほとんどかわらないので、北面と西面の大垣は一連の造作にかかるものとみてよかろう。

また、柱間2.63mは、小尺1尺0.293mとして9尺、高麗尺だと1尺0.351mとして7.5尺にあたる。小尺1尺を0.293mとすると、寺域の南北規模は1000小尺に復元できることとなり、また、高麗尺1尺0.351mは、中門や南門の柱間から復元できる数値にきわめて近い。現段階では、小尺と高麗尺のいずれを使用尺とすべきか判断が難しいが、これは掘立柱大垣の設定時期にも関連する。

さて、1977年の調査では北外堀SD501に石組護岸を想定したが、今回は護岸の抜取痕跡を確認できなかった。外堀SD501に転落した石は、北面大垣SA500に低い基壇を想定して、その化粧石と考えるべきだろう。第97次調査では、南面大垣SA100に縁石をもつ基壇を確認した。北面大垣も同じ意匠とみてよかろう。

北面大垣に関しての問題点は、今調査区東方の1982年調査区との関係にある（図24）。

第一に、この調査でみつかった北面大垣は掘形一辺0.8～1mで柱間も2.2mしかなく、柱筋も東で北へ4度と振れ角が大きい。図上でみると、今回と1977年調査区のSA500延長推定線とは交わらない。東面大垣SA600の場合、柱穴がさらに小さく柱間は2mと一層狭い。北面大垣と西面大垣との共通性を考えると、推定寺域東北隅での大垣は今回検出したものと一連の造作とは思えない。

第二に、内堀SD503は、1977年調査区では北面大垣の南9.6mに位置するのに対し、1982年調査区ではその距離が3mしかない。両者を単純に結ぶと、北面大垣と方位があわない。ただ、これに関しては、西面大垣の内堀が大垣の東（内側）3mにあることを考慮すると、むしろ1977年調査区での距離が大きすぎる。大垣の南3mにある溝状の土坑SK504をそれにあてるべきだろうか。

今回の調査は、一応1977年の調査成果を追認したが、上に述べたような未解決の問題もある。蛇足を加えるならば、北外堀SD501から出土した大量の瓦からみて、北面大垣SA500が瓦葺だったことは疑えないが、出土した軒平瓦に隅軒平瓦と思われる個体があることは不審で、これが大垣に葺かれていたとすれば、近くに大垣の曲がり角を想定しなければならない。

以上のように、飛鳥寺寺域東北部の大垣については、途中での寺域拡大などを考慮に入れつつ、今後さらに検討する必要がある。

（花谷　浩）

2　第97次調査

はじめに

本調査は、万葉ミュージアム（仮称）建設予定地の北端において、民有の水田との境に擁壁を築く工事に伴い実施した。すぐ南は1997年度の第84次調査区で、調査区の北壁西端には、飛鳥寺東南禅院の南限に関わる塀の基壇か雨落溝になると思われる石列がのぞき、北端の水田との境になる畦には注意を向けていたところである。遺憾にも擁壁工事が先行し、後述するように南面大垣に関わる重要な遺構は東半と西端でかなりの破壊を受けた。

調査区は、第84次調査と一部重複させて南北５～８m、東西約56mとした。調査面積は380㎡、調査期間は1999年３月15日から５月８日であった。

基本層序

調査地は、田の畦であり、上から30～40cmで中世の遺物を含む灰褐色土に至る。厚さ20～30cm。以下は、上層瓦層、東西溝SD103Aや石敷SX105、茶灰色土（茶灰色土Ⅱ）、東西溝SD103Bの順である。上層瓦層は、後述する飛鳥寺東南禅院南面大垣SA100の屋根瓦を廃棄したもので、基壇以南や石敷上に比較的密に認められた。東西溝SD103AはSA100の南縁石に沿う雨落溝で、石敷を一部破壊する。石敷SX105は雨落溝SD103Bの上にあり、茶灰色土は石敷以西にあって下層瓦層を覆う土である。

SA100やSD103Bなど上層遺構のベースは、下層の遺構があり、一様でない。南北大溝SD106以東は、古い時期の堆積で、上から厚さがそれぞれ20～30cmの暗褐色砂質土など４層があり、青灰色砂質土に至る。SD106以西は、部分的に細砂層を挟む淡褐色砂質土（厚さ10～30cm）や花崗岩風化土を含む黄褐色土（厚さ20～40cm）の整地土で、この下で東西溝SD52や南北大溝SD106の底の石列を検出した。これらの石列の下は、厚さが10～20cmの有機質（スクモ）層で、青灰色砂質土に至る。なお、東西大溝SD51は、南北大溝SD106以西では淡褐色砂質土、SD106以東では暗褐色砂質土がベースである。

検出遺構

上層遺構　飛鳥寺東南禅院の南面大垣と推定する掘立柱東西塀SA100、南雨落溝SD103A・B、石敷施設SX105、道路SF50などがある。

SA100　調査区西半で６間分を検出した。方位は東で北に約32度ほど振れる。柱根は３本残るが、他の４本は抜き取られていた。柱間は、柱根で測ると、約2.6mと約2.7m。ばらつきがあるが、抜取穴を加えて平均すると、柱間2.68m前後（９尺）になる。石敷SX105の北東で検出した１個の柱穴もSA100の続きである可能性が高い。

柱掘形は、南北2.5m前後、東西2.0～2.2m、深さは1.2～1.3mである。柱根は径約27cmで、長さ70～80cm残っていた。取り上げた１本はコウヤマキで、辺材部は残っておらず、年輪で知られる伐採年代は586年＋αである。柱抜取穴からは飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器、東南禅院所用の７世紀第４四半期頃の丸・平瓦のほか、人頭大の川原石や天理・石上産の砂岩切石片が出土した。

基壇は柱掘形の上に土を積み、南側に人頭大の川原石（１箇所だけ凝灰岩切石）を据えて縁石としていた。積土は部分的に厚さ10～15cmほど残っていたが、積み固めたものではない。この上面では柱抜取穴は見えるが、柱掘形が見えないため、柱を立てた後に基壇を積んだことがわかる。南側の縁石は底石が一段程度残っていた（高さ30～50cm）。北側の縁石は残っていなかった。柱筋から南側の縁石前面までの距離は約1.2m。飛鳥寺南門の東で検出している大垣の石積み基壇幅約2.5mに近い。

SD103A・B　SA100の南にある素掘りの雨落溝。Aは石敷SX105を一部破壊して東流する。幅30～70cm、深さ10～30cm。BはSX105下を東流する。幅約70cm、深さ20～30cm。Bの堆積土の上には、SX105から西約11mまでと、東は少なくとも５mまでの範囲にわたって瓦の小片を敷きつめていた（下層瓦層）。石敷が沈まないための工夫であろう。飛鳥寺創建時の瓦がほとんどで、他所から運び込まれた可能性がある。他に東南禅院所用の軒平瓦ⅠB、飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器を含む。雨落溝SD103Bからも飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器が出土。下層瓦層上の茶灰色土からは奈良時代の土器や東南禅院所用の瓦が出土した。

SX105　南面大垣の南にある石敷施設。北はSD103Aが破壊する。北東部は擁壁工事で破壊されているが、東南隅の一石は残る。南北は南面大垣心から約3.0mになる。東西は約8.1mで、両端は南面大垣の柱心に揃えているようである。大垣の南門があり、それに伴う施設と考える。

SX101・102　SA100より古い柱穴列。SA100の柱穴で消失したものもあり、不明な点が多い。SX101は３間以上、SX102は４間以上で、両者とも柱間1.8m等間。

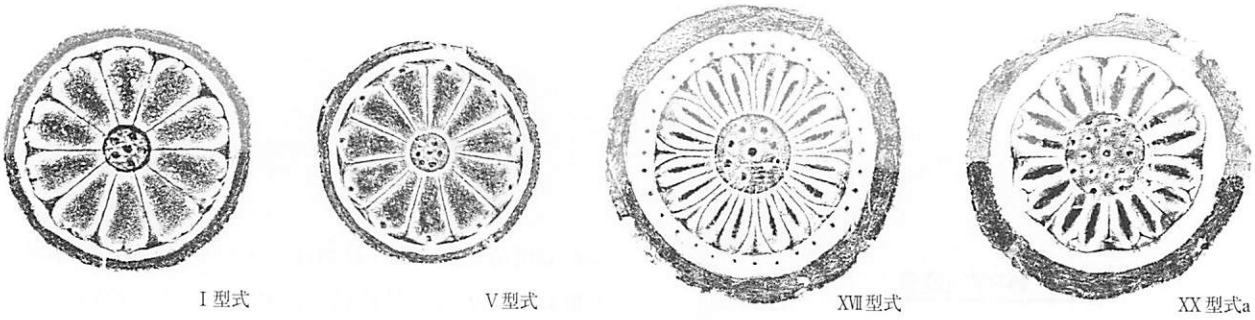


図25　第97次調査出土軒瓦　1：5

柱掘形はともに南北約1.0m、東西約0.8m、深さは約1.2mある。SX101とSX102の間は3.5～3.6mあり、中間にSA100の柱穴がある。SX101とSX102が一連の塀であった可能性もあるが、柱間が1.8mと短い点問題も残る。柱穴から飛鳥寺創建時の瓦小片が数点出土した。

下層遺構　第84次調査区から続く東西大溝SD51と、これより古い石組東西溝SD52、南北大溝SD106がある。

SD51　上幅2.0～2.3m、深さ約0.5mの素掘りの溝で、北東に流れる。振れは、上層のSA100やSD47より大きい。遺物は土器と瓦の小片が少量出土。第84次調査では藤原宮期直前の土器が出土している。

SD52・106　SD52は北岸に人頭大の石を積むが、底石が残る程度である。深さ0.2～0.4m。南岸は、第84次調査区で西端から10mまでは素掘りであること（幅約１m）を確認したが、以東では不明であった。今回の調査では、SD52は南北大溝SD106で終ること、南岸はSD106近くでは南へ離れ、北岸から３mの範囲にはないことを確認した。SD106は、飛鳥池遺跡から南に広がる谷の東縁に沿って掘られた素掘りの南北大溝（幅約２m、深さ約１m）で、谷に堆積した有機質（スクモ）層を切っている。この溝が40cmほど埋まったのち、東岸にはSD52の底とほぼ同じレベルで人頭大から拳大の石を積んだようであるが、ほとんど崩れていた。SD52とSD106とが接続する部分では、両者とも石積みが片側だけであり、池状になっていたと推測できる。底から飛鳥Ⅰの土器が少量出土したが、瓦はなかった。

出土遺物

南西大垣に関わる瓦が多量に出土しており、これについては後で触れる。土器は小片が多い。遺構の年代に関わるものは前節で取り上げた。南面大垣の石敷付近の上層瓦層などから平安時代前期の緑釉皿や灰釉椀・壺片、茶灰色土などから円面硯片２点が出土。谷のスクモ層からは５世紀後半の須恵器蓋が出土。他に、下層瓦層からは、天理・石上産の砂岩切石や銅滓・鉄釘若干と、弥生時代の扁平片刃石斧１点も出土した。

瓦塼類　軒丸瓦84点、軒平瓦24点、熨斗瓦36点、面戸瓦11点、塼28点（12.5kg）、丸瓦5,649点（607.5kg）、平瓦25,683点（2,462.5kg）が出土した。軒丸瓦の内訳は、Ⅰ型式49点、Ⅲ型式８点、Ⅴ型式１点、Ⅵ型式１点、Ⅶ型式１点、ⅩⅣ型式２点、ⅩⅦ型式12点、ⅩⅧ型式３点、XX型式a３点、型式不明４点。Ⅰ～Ⅶ型式が飛鳥寺創建期の瓦、ⅩⅦ～XX型式が東南禅院の創建に伴う瓦である。軒平瓦は、藤原宮式の6641Ｅ１点を除く23点すべてが三重弧紋（Ⅰ型式）で、中でもＩＢが20点と圧倒的に多く、軒丸瓦ⅩⅦ～XX型式と組み合う。

南面大垣の瓦は、格子または平行叩きののちナデ調整を施す飛鳥寺創建期の瓦に加えて、タテの縄叩きをおこなう東南禅院の創建瓦をかなり含む。一方、石敷SX105基底部の下層瓦層の瓦は、ほとんどが飛鳥寺創建期に限られ、橙褐色を呈する「花組」の瓦が大半を占める。

まとめ

今回の調査では、飛鳥寺南面大垣SA100とこの関連遺構を検出したのが最大の成果で、以下、要点を列記する。

①　SA100は掘立柱塀で、柱間は約2.68m（９尺）と判明した。この知見は、飛鳥寺の西面大垣（飛鳥寺1996-1・3次）、北門東の北面大垣（飛鳥寺1977、第91-8次）と同じである。北東隅（飛鳥寺1982）で柱間が2.0～2.3mであるのは、別個のものである可能性が強い。

②　SA100は基壇に縁石があった。伽藍中軸の南門東西の大垣（飛鳥寺第２次、1979）では、基壇に縁石があり、築地塀を想定している。だが、今回の調査では、基壇下に柱穴があり、築地塀でない可能性が高くなった。

③　SA100は、柱抜取穴や上層瓦層の瓦が、この北方の調査（飛鳥寺1992-1次）で出土した推定東南禅院仏堂の瓦と同じで、７世紀第４四半期に比定できる。SX101・102の時期や性格の究明が課題となる。石敷SX105の北に東南禅院の南門が推定されるが、この調査も今後の課題である。

④　SA100と方位が近似し、出土遺物からも共存するのはSD47である。両者の間が飛鳥寺東南禅院と飛鳥池遺跡とを画す東西道路SF50で、SA100の縁石からSD47の北肩までは約9.5mと判明した。　（毛利光俊彦）

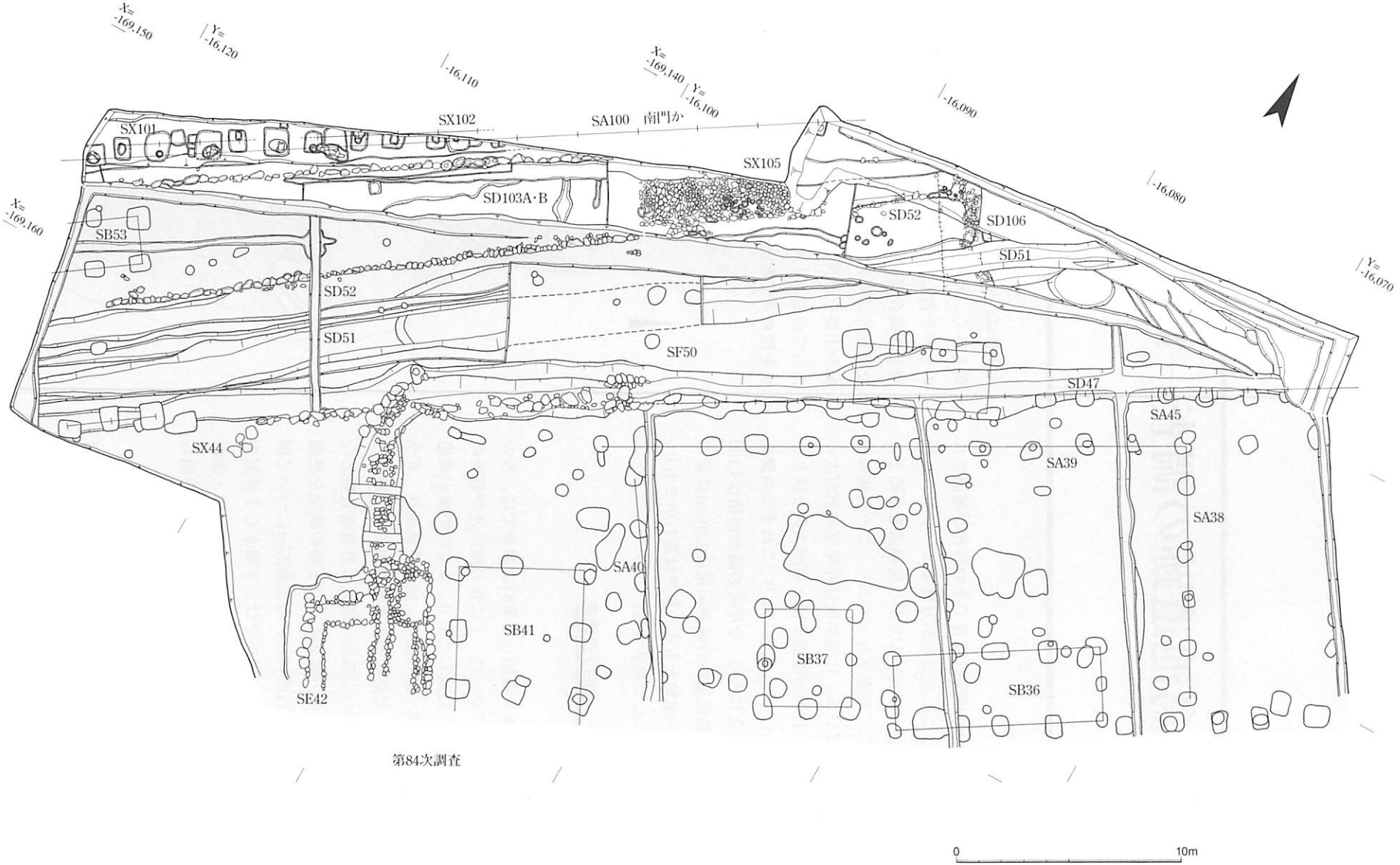


図26　第97次調査遺構図　1：250

◆飛鳥池遺跡の調査—第87次、第93次

はじめに

飛鳥池遺跡は、1991年度の調査でその存在が確認されていた。その後、ここに奈良県が万葉ミュージアム（仮称）の建設を計画し、1997年1月から発掘調査が始まった。今年度も継続して調査を行っており、この遺跡の重要性は日々高まっている。1998年度は昨年度の第87次の継続調査（下層）と、1991年度調査区と第84次調査区とをつなぐ第93次調査を行った。これにより、これまでの調査区が全て連続したことになる。今年度の調査面積は4,100㎡で、これまでの飛鳥池遺跡の調査面積は8,300㎡に及ぶこととなった。遺構・遺物ともその整理は進行中であり、ここではその概略について報告する。

1　第87次調査

調査の目的

1997年12月から調査を開始した第87次調査では、西の谷の工房跡が明らかになった。主に谷の西岸及び谷奥の東岸に工房の作業場を造成しており、多くの炉跡が検出された。ここでは、鉄・銅の他に、金・銀製品や、ガラス・メノウ・コハク・水晶などの玉類の加工・生産が行われており、この時期の宝飾品の研究に貴重な資料となった。1998年度は炉跡群の精査の後、下層の状況を把握するため、西の谷で東西約15m、南北約27mについて掘り下げを行った。1991年度調査では、下層から7世紀中頃に遡る土器とともに少量の金属器・フイゴ羽口・漆壺が出土しており、今回は、この谷の工房の始まりを明らかにすることが大きな目的である。

土層の堆積状況

工房跡部分の整地土（厚さ約20～50cm）、谷中央の炭層の下には、古墳時代から7世紀の土器を含む厚さ1～1.5mの堆積土がある。この堆積土は、大きく4層に分けられるが、南北方向には谷の傾斜にそった堆積を示し、各層の上面が生活面として使用された状況ではない。出土土器は、古墳時代（5世紀後半～6世紀初頭）のものが最も多く、次いで7世紀中頃で、少量ながら7世紀後半のものを含む。また、遺物の出土のあり方は、上層と下層との接合関係が多くみられ、各層の堆積について大きな時期差は考えにくい。このような状況から、この7世紀の土器を包含する堆積土は、この谷に工房を築くにあたっての造成土（整地土）と考えられる。すなわち、谷中央を埋め立てるとともに、両岸に工房テラスを造成する。

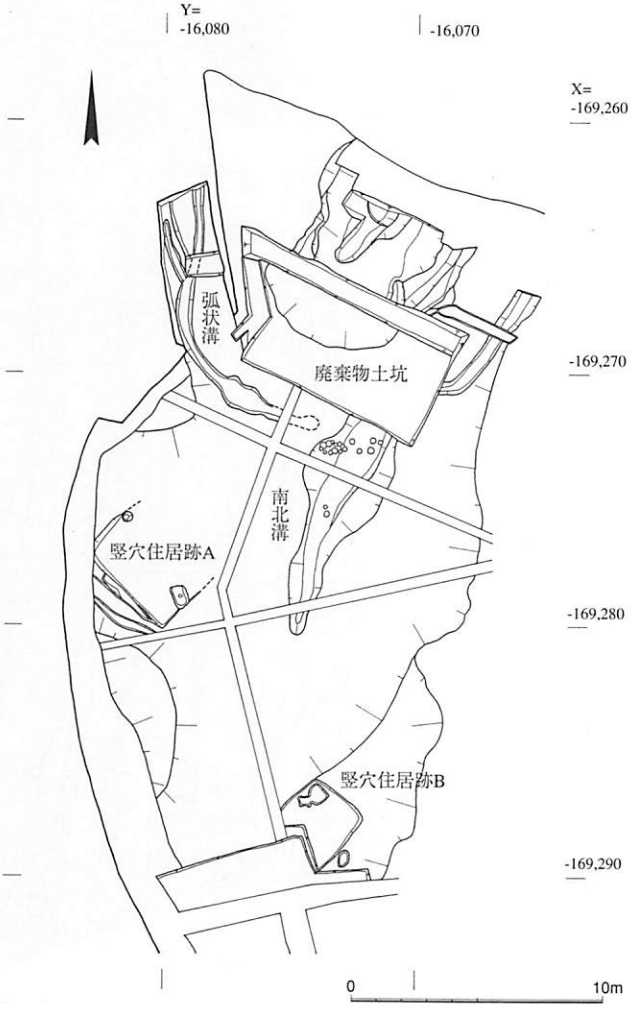


図27　第87次調査遺構図　1：300

図28　竪穴住居跡A　北から

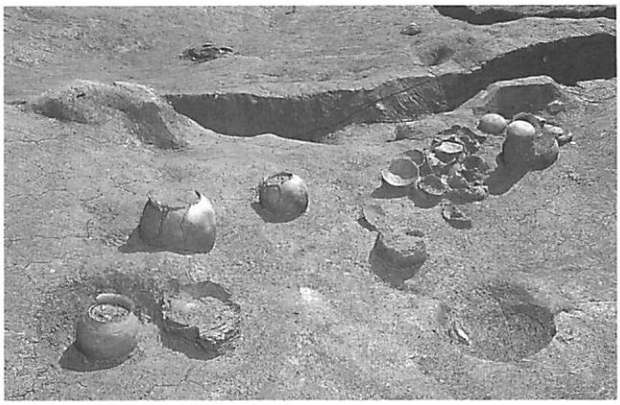


図29　南北溝　北から

この造成作業は、最終的には幅約15m以上の谷に、厚さ1～1.5mの土を入れるが、中央部は幅約5～6m、深さ50～70cmの溝とし、ここを廃棄物投棄場とする。東岸は明瞭だが、西岸については緩傾斜で、工房作業面に到る。また、調査区北端付近から下流は、谷中央を造成土上から深く掘り込んで水溜を作り、廃棄物の投棄場としている。後述のように、造成土の中層にあたる茶褐色土上面でも、西岸で方形の大型炉を検出しており、造成が進む途中の段階で、工房が営まれていたことは確実である。造成土中に含まれる7世紀の土器は中頃の時期が主で、これにフイゴ羽口などが含まれることは、この時期の工房の存在を予想させる。これは1991年度調査の所見と一致する。7世紀の造成土の下は古墳時代の土器包含層となっているが、この上面で主に5世紀後半から6世紀初頭にかけての遺構・遺物を検出した。この時期の谷は、南側でやや西に振れながら、袋状となっていくと思われ、今回の調査区の南東部分は一段と高くなっている。

検出した遺構

7世紀後半～8世紀と古墳時代のものがある。

7世紀後半～8世紀の遺構には、方形炉跡・廃棄物土坑がある。

方形炉跡　調査区中央西岸の茶褐色土上面で検出。東西74cm、南北98cmの方形で、残存高は約30cm。上部の構造は不明である。壁面は、厚さ約3cmが、赤褐色に焼けている。底面には、厚さ約3cmほど炭が堆積していた。形態上類似した炉跡が第93次でも検出されている。検出面の茶褐色土上には、造成土がさらに50cmは堆積しており、上部の構造を考慮しても炉跡群より古い。

廃棄物土坑（水溜）　調査区北端で、1991年度調査区からのびる廃棄物土坑の南辺部分が検出されていた。今回、下層の掘り下げの結果、西の谷では人工の水溜がここからはじまっていることを確認した。東西幅約6.5mで、7世紀の造成土から2m以上も掘り下げていることがわかった。下流に向かって円形状の水溜が連続して掘り込まれているのであろう。

古墳時代の遺構には、竪穴住居跡2、弧状溝、南北溝がある。

竪穴住居跡A　調査区中央の西側にある方形住居跡である。東西長4.45m、南北長は不明である。谷にそった方位をもつ。検出面からの掘り込みは、南辺・西辺で約30cmで、厚さ約5cmの白石混茶褐色土で床面をつくる。住居跡に伴う柱穴は検出されなかった。東辺やや南寄りと思われる位置に、カマドがつくられている。土師器高杯を逆さにして支脚としている。カマド周辺から、土師器甑・甕片、須恵器甕片が出土した。

竪穴住居跡B　調査区南側で谷の東の高い位置にある。Aと同様、谷にそった方位である。方形で、南北2.88m。検出面からの掘り込みは、東・南辺で約20cmである。明確な柱穴は検出されなかった。竪穴内の床面東北隅には、不整形の土坑があり、内部には炭がかたまってみられた。壁面近くを中心として焼土がひろがっており、南辺中央には小さい河原石とその周囲に焼土がみられた。また、竪穴内からは、砥石が1点出土した。こうした状況から、鍛冶作業場の建物とも考えられる。

弧状溝　竪穴住居跡Aの北側にあり、西側の斜面に沿って弧状を呈し、東は谷中央まで延びる。谷中央の東西方向部分には、土器が集中する場所があり、幅が広くなり、土坑状になっている。ここから土師器・須恵器・製塩土器が出土した。特に製塩土器は、約35cm四方の範囲に集中していた。土師器には、カマド・甑・羽釜が含まれる。溝の北側に、この溝と関連する遺構は検出されなかった。

南北溝　古墳時代包含層上面で、谷が最も深くなる部分にある浅い南北方向の溝である。調査区中央付近から始まり、最も幅広い部分で約3mある。内部には土器が多量に入り、一部に集中がみられる。これは、土師器甕を中心に高杯・杯、須恵器杯など、約20個体から成り、その多くが直立した状態であった。さらに一帯から滑石製臼玉が多数出土し、土器6個体の内部からもみつかった。臼玉は計2,000点以上にのぼる。滑石製品は臼玉の他に、有孔円板・勾玉・鏃がある。また、コハク片も出土した。

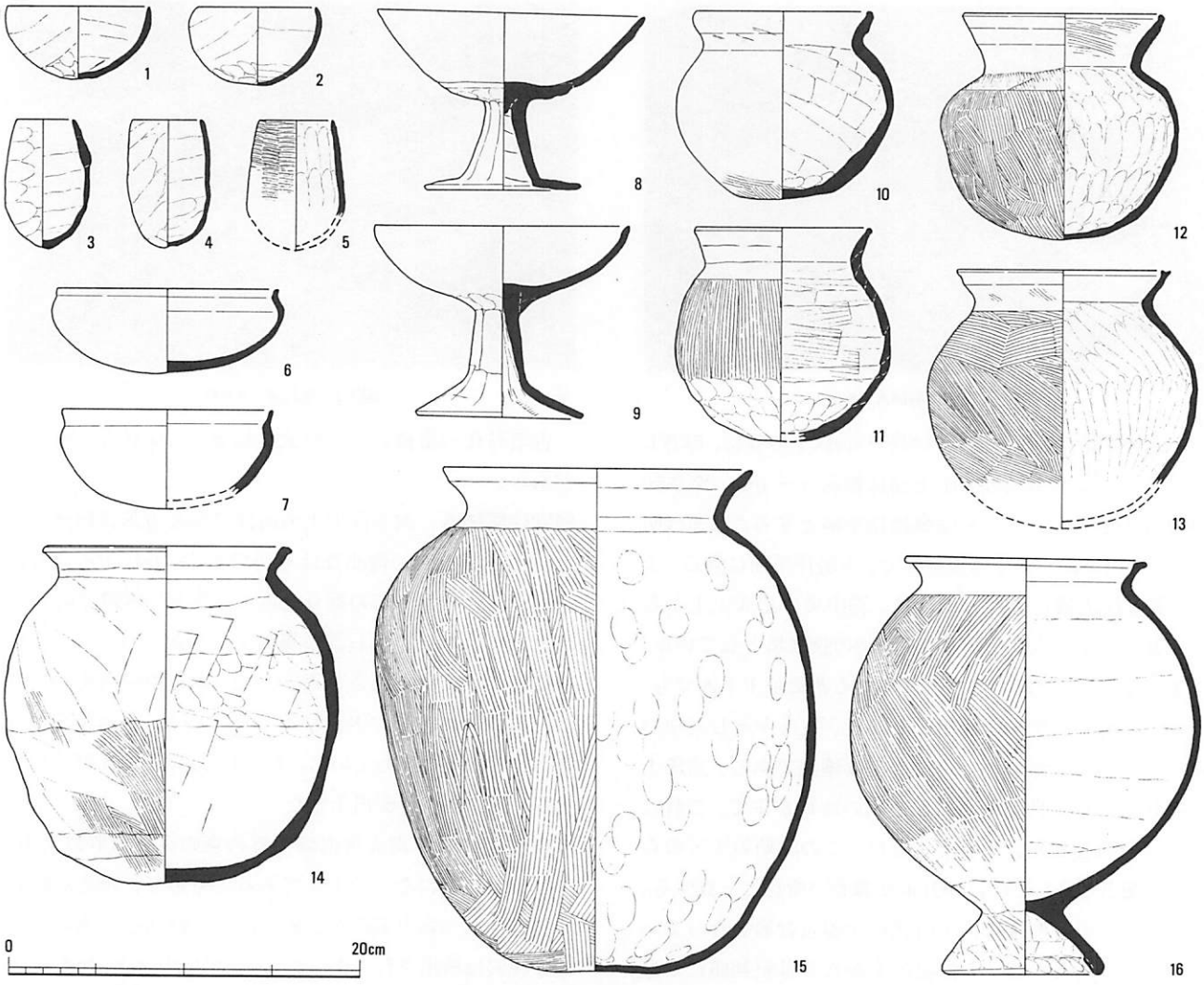


図30　第87次調査出土土器1　1：4

出土遺物

瓦・土器・金属製品・石製品がある。瓦類は、7世紀の造成土から丸瓦・平瓦・塼が出土している。金属製品には、古墳時代の鉄鏃がある。石製品には、縄文時代草創期の有舌尖頭器（『年報1999-Ⅰ』参照）・縄文時代の石鏃、古墳時代の滑石製の臼玉・有孔円板・勾玉・鏃、コハク片、砥石がある（図33）。土器には、古墳時代から平安時代のものがある。ここでは、その主体を占める古墳時代の土器を報告する（図30～32）。竪穴住居跡や溝など遺構からまとまって出土したものの他に、造成土からも出土した。

（安田龍太郎）

土師器には、製塩土器（1～5）、椀（6・7）、高杯（8・9）、甕（10～15）、台付甕（16）、鍋（17）、甑（18）、羽釜（19）、およびカマド（20）などがある。

製塩土器（1～5）は、直口で体部が浅い椀状のものと縦長のものがある。内外面ともナデ調整のものがほとんどであるが、外面に平行叩き目のある例（5）も出土している。椀（6）は口縁部以外は器表面が剥落しており、調整はわからない。椀（7）は内外面ともにナデている。高杯には、杯部の形状で、基部が稜をなして鋭く曲折する大型のもの、基部が僅かに段をなし屈曲するもの（8）、椀状を呈するもの（9）、また口縁部縁辺が曲折するものなどがある。なお、杯部外面下半部の調整は、ナデかハケメを施しており、ヘラケズリは行っていない。甕には、体部が球形のもの（10～13）、やや縦長のもの（14）、長胴状のもの（15）がある。いずれも口縁部は丁寧なヨコナデを施している。体部外面は縦ハケメを行うものが多く、内面の調整にはケズリ（10）とハケメかナデ（11～15）とがある。11・12・14には粘土紐の接合痕が残っている。台付甕（16）の口縁部には、強いヨコナデによる段がある。体部外面のハケメは、太く粗い（5条／cm）。台部外面にも、粗いハケメが残っている。内面はナデ。体部外面には煤がついており、内面には環状コゲツキ痕がある。鍋（17）は、口縁端面がやや凹面をなす。体部外面は、縦ハケメ→横ハケメ→篦描沈線→把手接合→部分的な縦ハケメを行っている。内面は部分的にハケメが残っているものの、ほぼ全面にわたってナデている。この鍋にはタタキメは残らないが、把手位置に篦描沈線をめぐらし、把手下面に篦状工具で刺突するなど、韓式系土器の特徴ももつ点が注目される。甑（18）は、下すぼまりの体部中

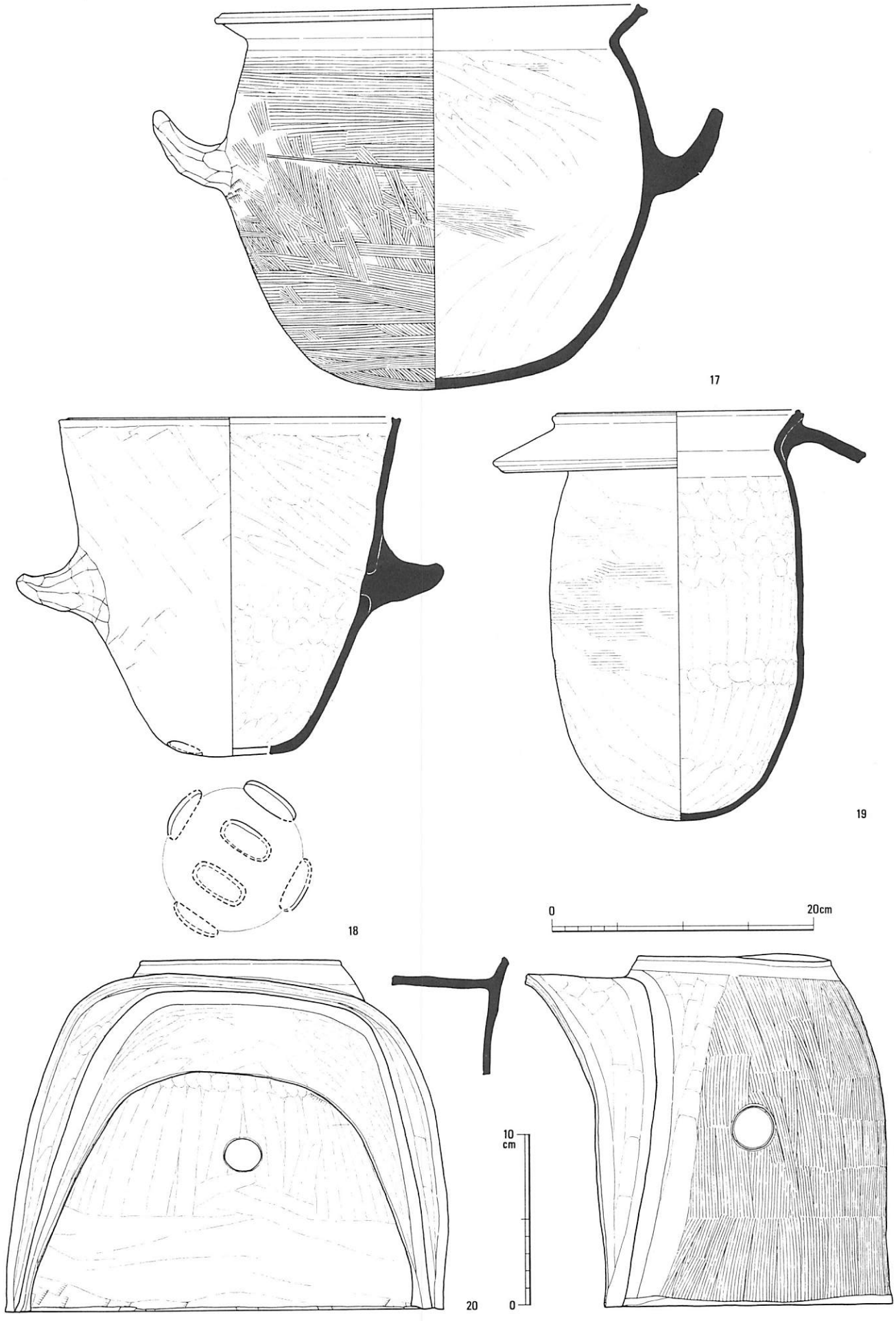


図31　第87次調査出土土器2　1：4

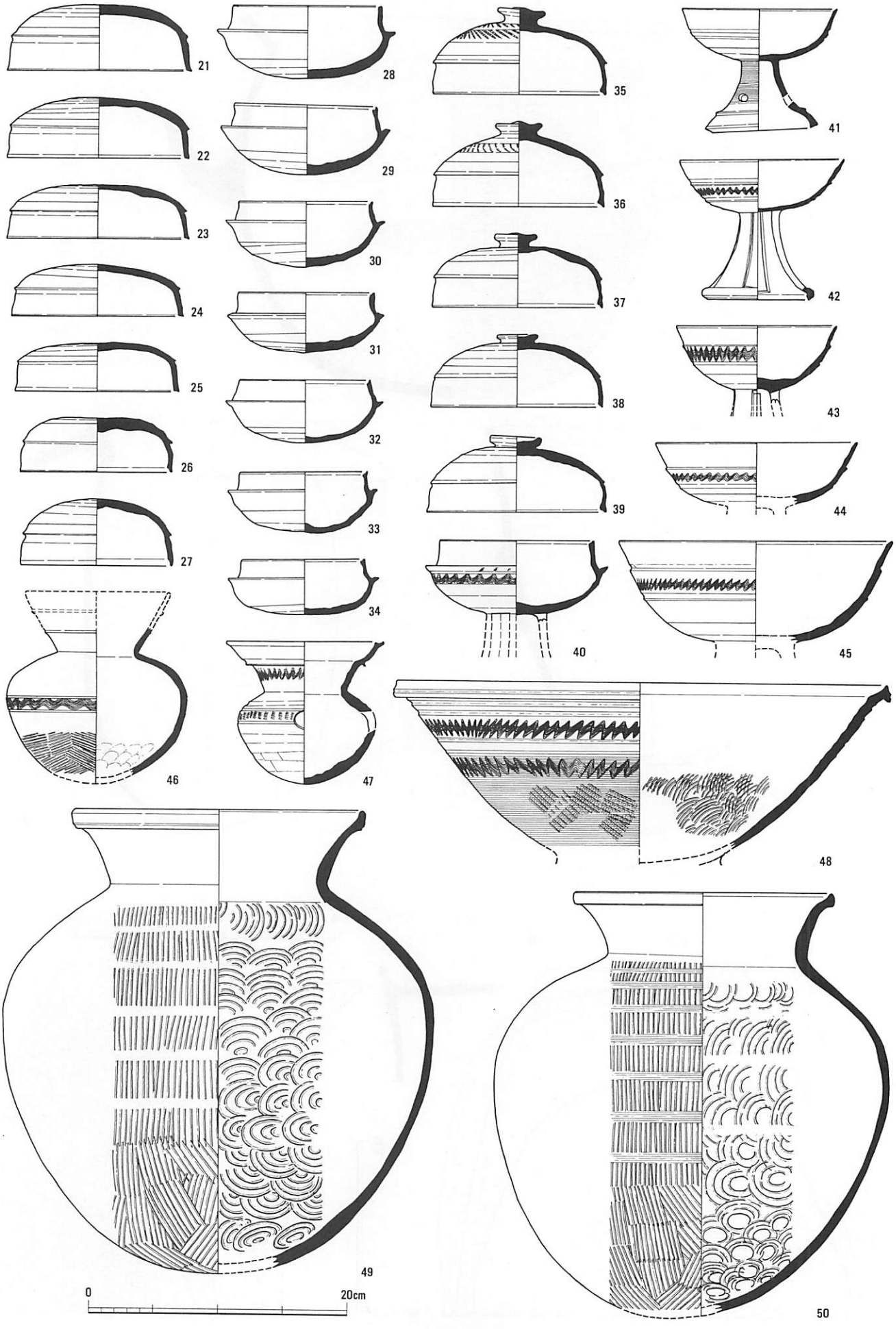


図32　第87次調査出土土器3　1：4

央に円孔をあけて把手を挿入している。口縁端面はやや凹面をなす。体部は内外面とも最終的にナデて調整している。蒸気孔は楕円形を呈し、中央に二孔、周囲四方に一孔ずつ開けている。羽釜（19）は、長胴甕の口縁上部に鍔を付けた形状である。口縁端面・鍔端面はともに、やや凹面をなしている。鍔の接合に際して、口縁部外面に篦状工具で×状の刻目を施している。体部外面はハケメ→ナデ、内面はナデている。なお、煤は付着していない。カマド（20）は、下底部が隅丸長方形を呈し、受口はほぼ円形である。焚口はかまぼこ形をなす。庇上部は、ほぼ水平である。端面はいずれもやや凹面を呈している。体部外面は、縦ハケメ→ナデ、内面はナデを行っている。内面に約3cmの間隔で水平の粘土の接ぎ目が残っている。また体部の左右に一孔ずつと奥に一孔、合計三孔の円孔が開く。煤は付着していない。なお、ここに掲げた鍋・甑・羽釜・カマドは、端部がやや凹面をなすという特徴を共有している。

須恵器には、杯身蓋（21～34）、有蓋高杯（35～40）、無蓋高杯（41～45）、壺（46）、瓶（47）、器台（48）、甕（49・50）などがある。杯蓋（21～27）の口縁端部は、面をなすものと段をなすものがある。天井部はいずれも回転ヘラケズリを行っている。ヘラケズリの範囲は、口径の85%前後である。杯身（28～34）の口縁端部にも、面をなすものと段をなすものがある。回転ヘラケズリの範囲は80%前後である。有蓋高杯蓋（35～39）には、回転ヘラケズリ後、直径3.5cm前後のツマミを付けている。35・36は列点紋で飾る。有蓋高杯（40）には、三方透しの脚部が付く。受部下には波状紋を描く。無蓋高杯（41～45）の杯部には、波状紋の有無で二種ある。また脚部の透し孔には、円形と長方形の二種があり、後者は一段透かしである。杯や高杯の杯身部や蓋においてヨコナデの方向や回転ヘラケズリの方向をみると、回転台は上からみて右方向より左方向に回転させたものが多かった。壺（46）の体部には、波状紋と凹線紋を飾っている。瓶（47）の頸部と体部にも、波状紋を描いている。器台（48）は、外面に波状紋と凹線紋とを飾っている。甕（49・50）の口縁部は無紋であるが、波状紋と凹線紋とを描いた有紋の個体もある。体部には、タタキ後カキメやナデを施している。以上のように、当地点で出土した須恵器は、陶邑編年TK23に属すものがその主体を占めている。

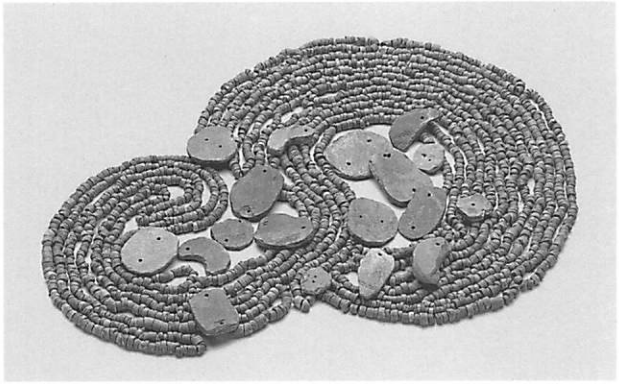


図33　第87次調査出土の滑石製品

この他に、僅かではあるが、外面に格子叩きを施した韓式系の赤色軟質土器の甕が出土している。

当地点から出土した古墳時代土器は、基本的に藤原宮第82次SD3100第2層出土土器に後続する様相をもつと位置づけうる。（深澤芳樹）

まとめ

今回の調査で以下のことが明らかとなった。

①　西の谷の堆積状況が明らかとなった。7世紀後半からの工房を築くにあたり、大規模な造成工事が行われていた。谷を埋め立て、中央を溝状の投棄場とし、その外側を工房としている。傾斜面を削った土を利用したと思われ、斜面の上段にも工房の平坦面をつくったと推定される。造成土中には、7世紀中頃の土器と金属生産関連の遺物であるフイゴ羽口なども出土しており、おそらくその時期の工房が近辺に存在していたのであろう。

②　西の谷の廃棄物処理のために人工的につくった水溜の始まりが確認された。東の谷との合流点からは約30m上流である。これより上流は、先述のように溝となる。

③　5世紀後半～6世紀初頭ごろのこの谷の利用状況が明らかとなった。7世紀の造成土の下は、古墳時代包含層で、この面で古墳時代の遺構を検出した。この中で注目されるのは、土器が立った状態で集中していた南北溝である。この周辺及び土器内から、臼玉を中心とした滑石製品・コハクが出土していることから、この遺構は祭祀に関連する可能性がある。同様な遺構は大字陀町拾生遺跡群で報告されている。また、造成土中の古墳時代の土器の量からみて、近辺にこの時代の遺構がかなり存在していたことが予想される。

④　古墳時代の遺構や造成土中から出土した土器類は、5世紀後半～6世紀初頭のものが中心であり、飛鳥地域での古墳時代土器研究の重要な資料となると思われる。

⑤　調査区南半では、安山岩製有舌尖頭器・石鏃・剥片などが出土しており、縄文時代草創期からこの谷周辺が利用され始めていることがわかった。

（安田龍太郎・土器：深澤）

図34　鋳造時に飛び散った金の滴　顕微鏡写真

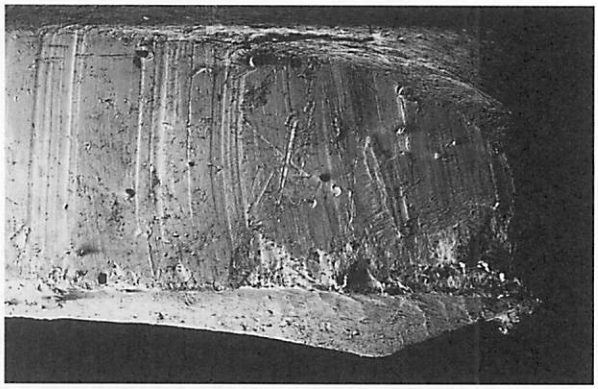


図35　金の切削片の切断面　電子顕微鏡65倍

2　第87次調査出土の金・銀の材質とルツボ

飛鳥池遺跡の第87次調査によって出土した金や銀の小片は、金製18点、銀製26点である。それぞれ形態は不定で、何らかの製品を製作する際にでた切削片や、地金熔解時に生じたとみられる金や銀の粒状滴などが認められる。いずれも完成した製品の体を示すものではなく、製作工程において捨てられたものと判断できるため、この飛鳥池遺跡において、金・銀の製品が製作されていたことを裏付ける証左として注目される。

資料の分析は、非破壊的手法による蛍光X線分析法でおこなった。定量用標準資料を用いた半定量分析である。金の含有率にはそれぞればらつきがあり、69.6～99.8%を示す。因みにこれは17～24K（金100%は24K）に相当する。金以外の含有元素は主に銀であり、銅はほとんど含まれない。この特徴はこれまでに確認してきた古代の金製品一般に認められる材質的特徴とよく符合している。

図34は、鋳造時に飛び散ったと思われる金の滴の一例である。重さ0.09ｇの小塊である。図35は、金の切削片に残る加工痕を、走査型電子顕微鏡で観察したものである。これは鋏で切った痕跡と考えられ、当時の金属加工技術の一端を垣間見る思いがある。また、蛍光X線分析により、ルツボ片一点の内壁から金を検出することができた。形状からみてこのルツボは小振りなものと思われるが、これが直ちに金の熔解に用いたルツボと断定するには至らなかった。今後の詳細な検討が必要である。

銀製の小片26点も、金と同様の手法で分析を行い、銀の純度が90～99%とかなり高いことがわかった。他に銅と若干の金が含まれる。なお、中には腐食のためブロムが検出され、ブロム銀として析出しているものもあり注意を要する。

銀に対してはルツボを特定することができた。ルツボの内壁に取り付くスポット状の銀状物質（図36）が、純度の高い銀であることを分析によって確認した。また、このスポット状の銀以外にも、同じルツボ片には、銀が残留していることを、X線ラジオグラフィーによって確認することができた（図37）。すなわち、飛鳥池遺跡では銀についても、熔解作業から行われていたことがわかった。

また、金銀の小片が出土した区域には、火を受けた碗状の窪みが多数確認できる。これは、金属を熔解した炉の上部構造が壊され、堅く焼きしまった底の部分だけが残ったものとみられる。これらの炉跡から採取した土を分析すると、いくつかの炉跡から、金や銀を微量ながら検出することができた。おそらくこれらの炉で金や銀を熔解したものと考えてよいと思うが、残念ながら炉の上部構造が残っていないため作業の詳細などは不明である。今後の検討課題である。

（村上　隆）

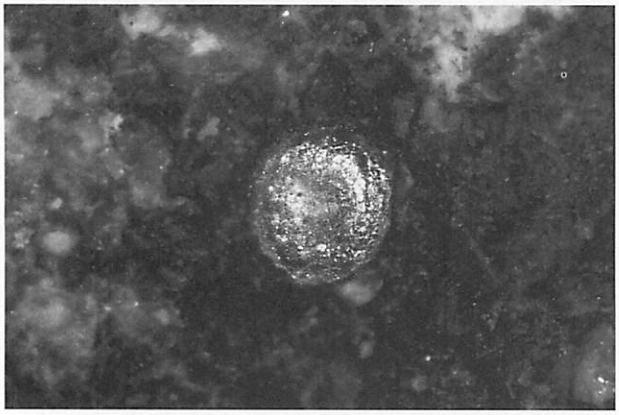


図36　ルツボに付着した銀　顕微鏡写真

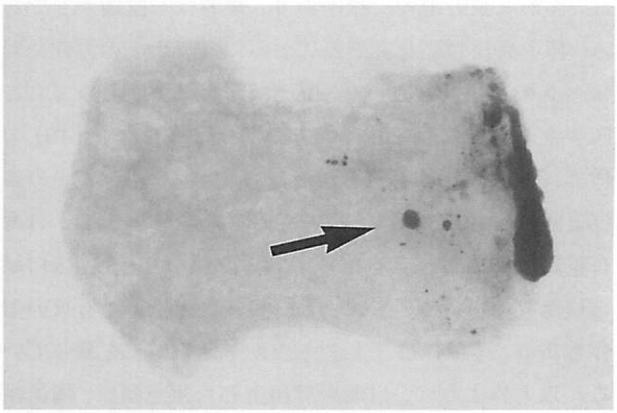


図37　付着した銀（矢印）と周辺に染み込んだ銀　X線ラジオグラフ

3　第93次調査

当初、ミュージアム展示棟予定範囲を中心に、第84次調査区南辺および1991年度調査区北辺の一部を重複させる形で、面積約1,800㎡の調査区を設定し掘削を開始した。調査の進展とともに西北部に石敷井戸が見つかり、調査区外に延びることが判明。また東岸には残りの良い工房廃棄物層が厚く堆積し、その東斜面に工房の存在が予想されたので、それぞれ拡張区を設けた。その後、東斜面では、極めて保存状態の良好な工房跡が検出され、更に南・北に拡がることが判明し、再度拡張を重ねることになり、結局の所、調査面積は2,200㎡となった。調査期間は1998年７月６日～1999年２月21日の８箇月にわたった。

今次の調査は、従前の調査で検出した工房跡の広がり、各種工房の配置及び変遷、管理施設あるいは東南禅院の別院、ないしは鍛冶以外の工房とも推測されている北側第84次調査区の遺構群との関係を明らかにすることを目的とした。

基本層序

調査区全体が旧飛鳥池の跡地で、埋立山土の下には、建築廃材などの産廃層約１m、その下には、深い所では２m以上ものヘドロ層が堆積する。これを除くと北に向って流れる本来の谷が現れる。調査区は、東南及び西南方向からの２本の支流の合流部に当たる。谷は東・西から丘陵が迫り出す北寄り部分が最も狭く、旧飛鳥池もこの地勢を生かし、この部分に築堤されていた。

基本層序は、丘陵斜面部では、旧畑耕作土、平安時代の遺物を含む暗灰青色粘質土、７世紀末の工房造成土、７世紀中頃の河川堆積、旧河川の埋立土である暗灰色粘土の順で地山に至る。一方、谷筋にあたる部分では、平安時代の埋立土（炭混り灰褐色粘質土＝炭層１）の下が、両斜面から投棄された炭を主体とする廃棄物層（炭層２・３）、灰色粘質土（工房操業当初の整地）、旧河川埋立土の暗灰色粘質土、草木有機物層の順で地山に至る。尚、谷中央部分には洪水時の所産と見られる微砂と粘土の互層堆積が炭層２を切る形で所々に見られる。

飛鳥池工房以前の遺構

旧河川　遺跡は、幅30m以上の旧河川を埋めて営まれている。旧谷底は７世紀後半の工房時の地表面から、約３m下に確認した。谷底には倒木や伐採木を含む有機物層が堆積し、５世紀後葉の須恵器が少量出土した。この谷堆積を均一な暗灰色粘土で整地しているが、遺物を含まず時代は不明である。しかし、この上に後述の７世紀中頃の溝SD73が流れ、また谷全体を覆う大規模な整地であることから、飛鳥寺造営時に行われた工事である可能性もある。

南北溝SD73　東西両斜面部において７世紀後半の整地層下で検出した流路堆積である。西岸の遺構のない部分を選び掘り下げたが、飛鳥Ⅰ（７世紀中頃）の土器、瓦、木製品、漆器、木簡、フイゴの羽口等が出土した。

飛鳥池工房期の遺構

調査区のほぼ中央には、東西方向に平行する３条の塀（SA56・57・58）があり、これを境に炭層は北に広がらず、また検出した遺構の状況にも違いがある。そこで、以下の記述も塀から北と南とを分けて行う。

北半部の遺構

掘立柱東西塀SA56・57・58　調査区のほぼ中央に、一辺１mをこえる大型の柱穴掘形をもつ塀が３条ある。東西両側からこの遺跡を抱くよう延びる丘陵が、最もその距離を狭めた所に位置する。３条が同時に建っていたのではなく、SA58→SA56→SA57の順に建て替えられた。いずれも東西両端はのちの削平を受け、塀SA56が５間分、塀SA57が７間分、塀SA58は６間分しか残っていない。柱間は2.4～３mと一定せず、SA57は西の２間が4.8mと広い。西から２間目には、間に柱穴があって柱間2.4mにみえるが、この柱穴は次に述べる南北溝SD01Aの埋没以前に掘られており、SA57より古い。３条の塀の中では一番古いSA58に関連する柱穴だろうか。SA56には２本、SA57に１本、それぞれ直径30cmの柱が残る。SA56の柱は柱穴の底から40cmも沈み込んでいた。工房を区画するだけでなく、谷の水を堰き止める機能を持っていたと推測する。

南北溝SD01　調査区北部のほぼ中央を南北に走り、谷の水を北に流す排水溝。広いところでは、上幅３m、深さ１mある。溝の南半は、当初、掘立柱東西塀SA58の北側で西に斜めに曲がっていたが（SD01A）、のちにまっすぐになる（SD01B）。SD01Aの屈曲部、およびSD01Bが掘立柱東西塀SA57と重なる部分には、川原石を使った護岸が設けてある。掘立柱東西塀SA57の柱掘形と石組溝

図38　第93次調査遺構図　1：350

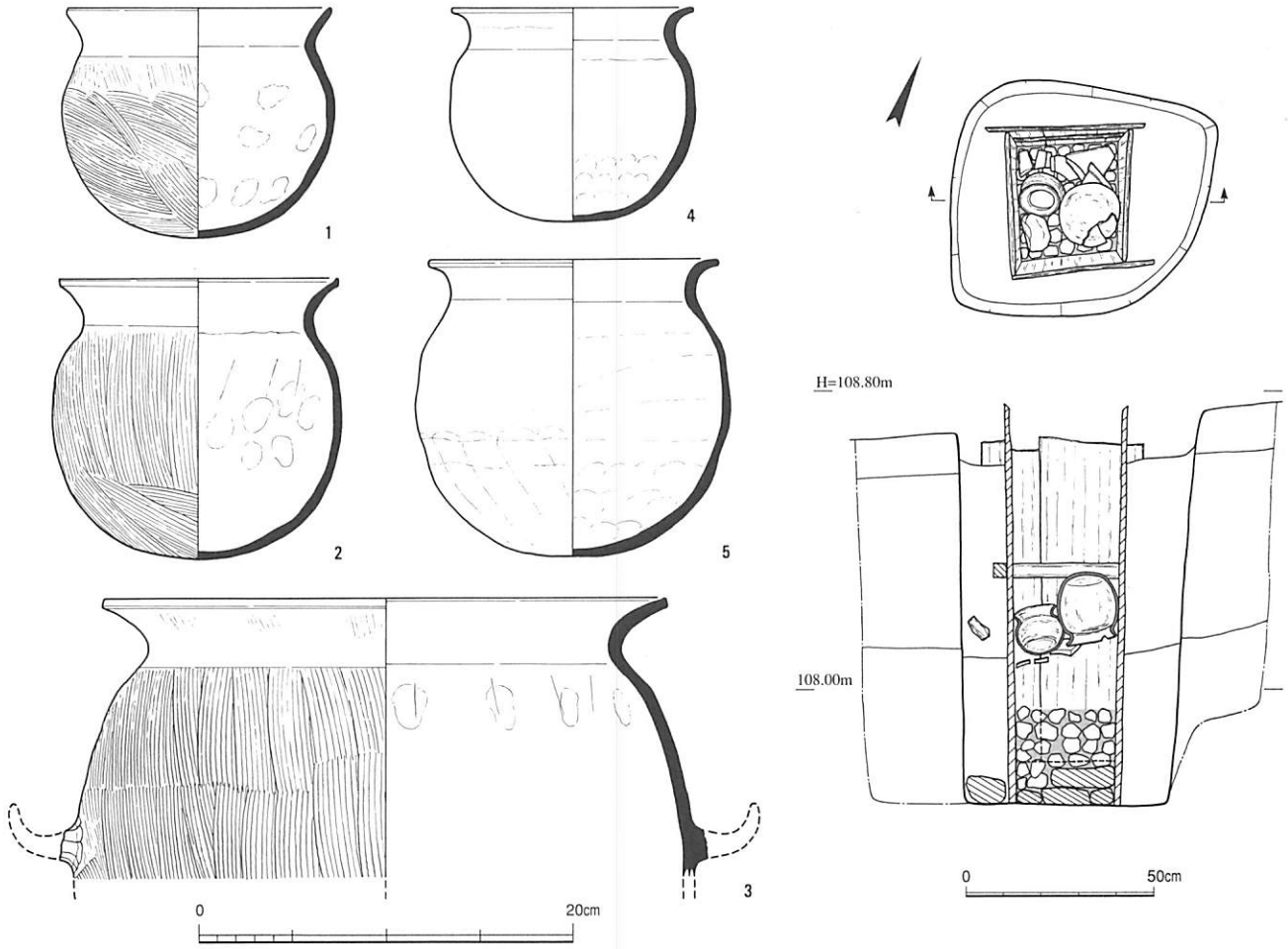


図39　井戸SE59平・断面図　1：40　と　出土土器　1：4

SD61は溝SD01Aの埋土の上から作られる。飛鳥Ⅳ・Ⅴの土器や瓦、銅人形、鉄器、木器、木簡が出土したが、木簡の量は少ない。

木樋暗渠SX03　南北溝SD01の西にある、鍵の手に曲がった暗渠。コ字形断面の底板に平板をかぶせる構造をもつ。南北部分の全長は6.5mあり、北は東に折れて南北溝SD01に出水口がひらく。この部分は掘立柱南北塀SA02の柱に接している。南は西に折れるが、材が腐っていたため、本来の長さは不明。

石敷井戸SE60　3条の塀に接した西側丘陵の裾にある。井戸枠は抜き取られ、数本の材が残っていただけだが、第84次調査区の石敷井戸SE42と同じように断面台形の材を円形に立て並べる構造だったらしいことは判明する。井戸まわりの台形をした石敷と四周の石積の壁がほぼ姿をとどめる。石敷の規模は、南北4m、南辺6m、北辺8m。四周に長方形の排水溝をめぐらせ、北西隅には平面形が三角形の階段がつく。石敷井戸SE42より石敷の規模は小さいが、敷かれた石はやや大きく、西北隅と東南隅に凝灰岩質砂岩の切石を配置する。周囲の石積は、北で高さ0.3m、南は最高で1.1mある。石敷の南東隅には、幅0.5m、長さ5mの石組溝SD61がつながり、掘立柱東西塀SA57をくぐって、水を南にある水溜SX55に流す仕組になっている。井戸枠抜取穴から、飛鳥Ⅴと平城Ⅱの土器や瓦が出土した。

井戸SE59　石敷井戸SE60とは谷の反対側、3条の塀の北東にある縦板横桟組の小型の井戸。掘形の一辺1.35m、井戸枠の一辺は0.7m。深さは1.6mある。井戸底から飛鳥Ⅳの土師器甕5個体が出土した（図39）。

掘立柱南北塀SA02　南北溝SD01の西側に平行する塀。今回の調査区では、柱間1.8m等間。南北溝SD01Aの屈曲部から南には延びない。第84次調査区では、柱を立てたのちに粘質土を積み上げて細長い土手状の高まりを作った状況が観察されたが、今調査区では南北大溝SD05を整地するときに一緒に埋めたようだ。施工手順の差、あるいは木樋暗渠SX03の設置と関係するだろう。

掘立柱東西塀SA64　掘立柱南北塀SA02の南端に接続する塀。2間分を検出した。SA02とは鈍角に接続し、柱間は1.5mとやや狭い。

掘立柱東西塀SA66　石敷井戸SE60の北にあり、井戸の西辺とほぼ直交する。柱間3.2m。東に延長すると掘立柱南北塀SA02の柱位置にあたるので、これに接続した可能性がある。

南北大溝SD05　南北溝SD73を整地する段階では、調査区北半部は幅の広い谷状の地形を残していた。これを埋

図40　炉跡群　航空写真　1：150

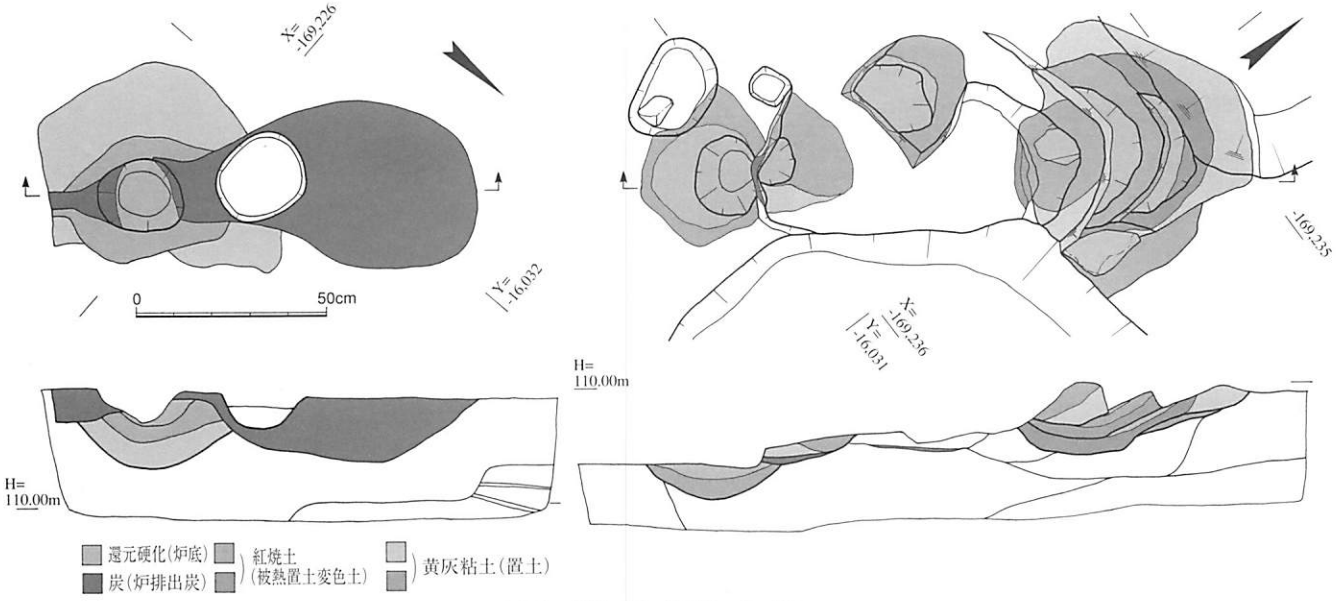


図41　炉跡　平・断面図　1：20

め立てて、その過程で掘立柱南北塀SA02や木樋暗渠SX03、更に南北溝SD01などが作られる。土器、瓦、木簡、木製品、鉄や銅の金属製品などが出土した。南の工房地区成立後、程なくして整地されたのだろう。

南半部の遺構

西岸谷裾には上方の工房から投棄された工房廃棄物層が堆積し、銅・ガラス生産関連物が大量に出土したが、工房作業面は旧飛鳥池造成時に大きく削平され、今回は、土坑SK70１基のみを検出したにすぎない。

土坑SK70　今次の調査では最も高所にあるゴミ捨て穴で、上面径約3.6mの不整円形で下に向って逓減し、深さ2.2mの底部は径1.2mの円形状を呈す。フイゴの羽口・銅滓・焼土・炭等の鍛冶関係遺物、漆壺をはじめとする土器類・瓦等が、西側上方から数次に亘って投棄された状況を確認した。この土坑の存在によって、西岸の未発掘地のより高所にも工房が広がっていることが分かる。

東岸の工房跡　東岸拡張区では、大きく３時期に亘る工房作業面を確認した。最も古い時期の工房作業面は、岸側と山裾側を素掘溝で区画し、東西約９m、南北20m以上の規模をもつ。区画溝の内側に沿って小柱穴列が並び、簡単な屋根架けがなされていたようである。上層では35基、中層では89基、下層では73基の炉跡を検出した。上層・中層の工房作業面は、先の操業時に生じた炭を主体とする廃棄物を均して整地している関係で、炉は、穴を掘り新たに山土を入れた後に穿って築いている。

上層では、炉跡の近くに石を据えたものが多い。金床として用いたらしく、周辺から鍛造鉄片を多量に検出した。また炉数基単位に土坑１基を配す。この土坑は長楕円形、もしくは円形を呈し、底面が一方に傾斜し、最も低い位置に更に円形の小穴を穿つ形態である。底部近くに薄く粘土と砂の層が残り、水溜あるいは井戸の機能をもつ土坑と考えられる。同様の土坑は小山廃寺（紀寺）東方の工房跡でも確認されている（『藤原概報18』）。

一方、下層の工房面は、当初の整地面に営まれていて、炉も直接整地面に穿っている。炉跡の多くに、銅小片や銅滴の残存が確認され、また鉄の饅頭滓はほとんど見られず、下層の工房は銅製品の生産が主体と考えてよい。この工房の廃棄物層から富本銭が出土した。

炉跡　平面形が径20～30cm程の円形で椀状にくぼむ炉が一般的であるが、他に径40cmを超える大型円形炉、楕円形状の炉、方形炉もある。方形炉は、炉跡集中部から離れた山裾に単独で存在し、一辺1.5m、深さ0.5m。壁は暗茶褐色を呈し、さほどの高温を被熱した痕跡がなく、底には消し炭様の炭層が薄く堆積し、熔解炉ではなく炭焼窯の可能性もある。各層の炉跡は、熔材を確かめるため、すべてサンプルを採取し、現在分析中である。

粘土採掘坑　工房の東にある地山面に掘られた不整形な凹み。地山は、この部分だけ均質な粘土層で、羽口や炉構築用の粘土を採掘した跡とみられる。

陸橋SX54・水溜SX53・55　陸橋SX54は、調査区南辺に設けられた貯水・浄化用水溜（SX53･55）の堤防で、東西両工房をつなぐ通路の機能も合わせ持つ。上面幅２～2.5m。数次の改修があり、図示したのは当初のもので、各時期とも余水を流す小溝を切る。陸橋は粘土をある程度積み上げた後、木枝葉・薄い板切を敷き詰め、更に粘土を積むという工程を繰り返して築かれた。

水溜SX55は、陸橋SX54と東西塀SA56で堰き止められた大きな溜池で、この余水は南北溝SD01に流す。

瓦窯SY50（飛鳥池瓦窯）　調査区の東側ほぼ中央、丘陵の西斜面に位置する。窖窯だが、焚口部の一部と燃焼部が残っていただけで、焼成部から上はすでに削平消滅していた。燃焼部の規模は、長さ2.3m、幅2.2m。

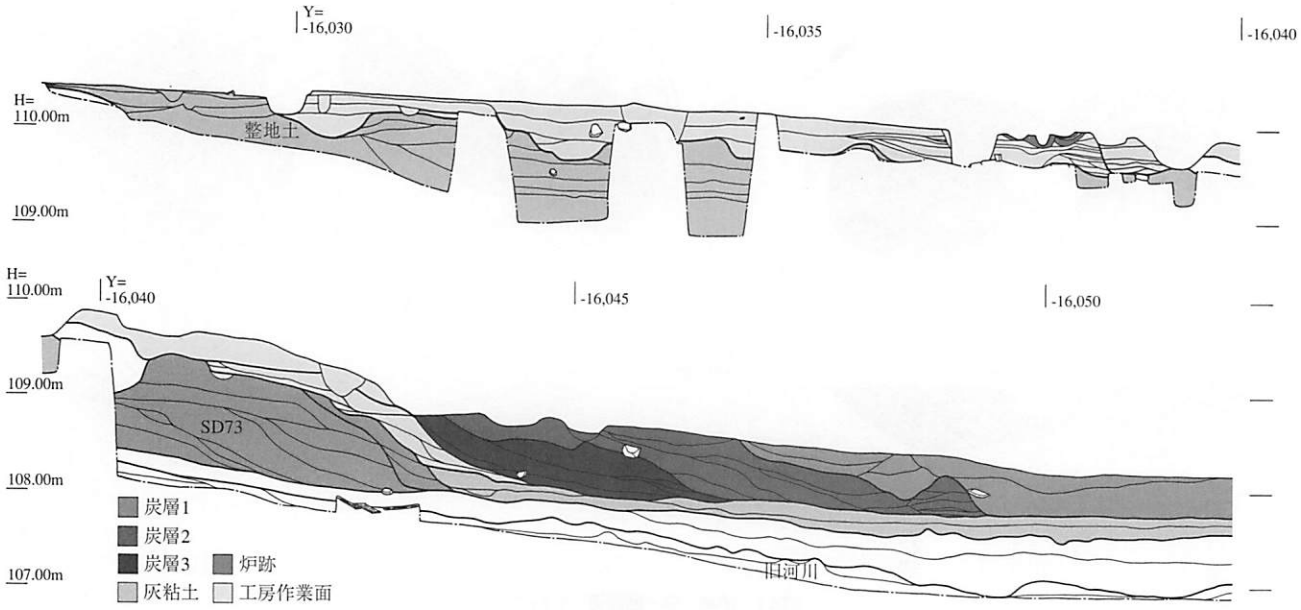


図42　炭層土層図　1：80

燃焼部の床面は、上下２面ある。上面（最終床面）は焚口に向かって10度の傾斜をもったほぼ平らな面。下面の上に、焼けたスサ入り粘土の壁材断片や瓦の破片を交えた土を入れ、高いところで約20cmかさ上げする。下面（当初床面）は、上面のように平面的ではなく中央部が浅くくぼんだ形をとる。下面の燃焼部床面奥には段があり、その段差は約0.2m。下面の南側袖部には粘土を貼り足した痕跡があって、下面での操業段階で側壁の補修を行ったことがわかる。

燃焼部の側壁は、高さ0.2～0.3mが残るにすぎない。南側の壁には軒平瓦と厚手の平瓦、北側には平瓦と川原石を積み上げて補強する。南壁の瓦積みは、２段分が残り、凹凸面を互い違いに並べて積む。瓦積みの下には川原石を並べてあった。これらの補強材は、南壁では奥から0.8m、北壁では0.3mまでのところで終わり、奥までは積まれていない。瓦や石の表面、および南壁では瓦の隙間にも小口から10cmほどの範囲に粘土が塗られていた。南壁の瓦積みは下面から積み上げており、上面形成時以前の仕事とみられる。

燃焼部の奥壁は、高さ0.4mほどの段差となって焼成部に続く。この段のほぼ中央には風化した石１個が埋め込んである。また、燃焼部奥壁の中央には直径10cmほどの穴があり、完全に炭化した柱材片が出土した。燃焼部床面の下層には、これ以外に２箇所に柱痕跡を確認したが、こちらは下面床面上からも柱痕跡がみえない。これらは燃焼部の天井を作るための支えとして立てた柱の痕跡だろう。

燃焼部の前面に0.5mほどの袖をもうけて焚口とする。焚口の床面は燃焼部ほど堅くは焼けていない。

出土瓦は、軒平瓦19点、軒丸瓦丸瓦部１点、丸瓦約100点・21.5kg、平瓦約700点・200kgのほか、熨斗瓦と塼がある。また、少量の土器も出土した。なかに、スサを交えた粘土の付着した須恵器杯Ｂ蓋がある。東海産と推定されるかえりのない蓋である。

石列SX51　瓦窯SY50の焚口南側には窯の主軸と直角に石列SX51が並び、石こそかなりまばらにはなっていたが、瓦窯の南側にも続く。瓦窯を構築する際、周辺を盛土整地しており、それが流失するのを防ぐのが目的だろう。盛土の下層には炭の堆積があり、南にある工房が、瓦窯構築以前には、更に北に延びていて、それを埋め立てて瓦窯が構築されたことを示す。

土坑SK52　焚口の南脇で石列SX51に接して掘られた、直径1.5m、深さ１mの土坑。窯から掻き出された灰や瓦片を処理するために利用したようだ。

＜瓦窯と工房面との関係＞

前述の飛鳥寺東南禅院の所用瓦を焼成した瓦窯SY50は工房の北側に位置する。瓦窯の焚口から焼成部は、山土の造成土の上に築かれているが、この整地造成は、下層の工房面を埋める形で行われており、瓦窯は確実に下層工房より新しく、中層の工房面とは共存する。上層の工房整地層には、焼け歪んだ瓦片を含むことから、上層工房時期には瓦窯は廃絶していたものと考えられる。

＜工房面と廃棄物層の関係と富本銭出土層位＞

谷裾の堆積は工房から投棄されたものであり、現段階では、上層工房面－炭層２、中層工房面及び瓦窯－炭層３、下層工房面－炭層３下炭層という対応関係を考えている。問題の富本銭は、炭層１・炭層２・上層工房整地土・中層工房整地土から出土している。中層工房整地層は本来、下層工房期の廃棄物であり、従って富本銭の鋳造は瓦窯以前、下層工房期に開始された可能性が高い。

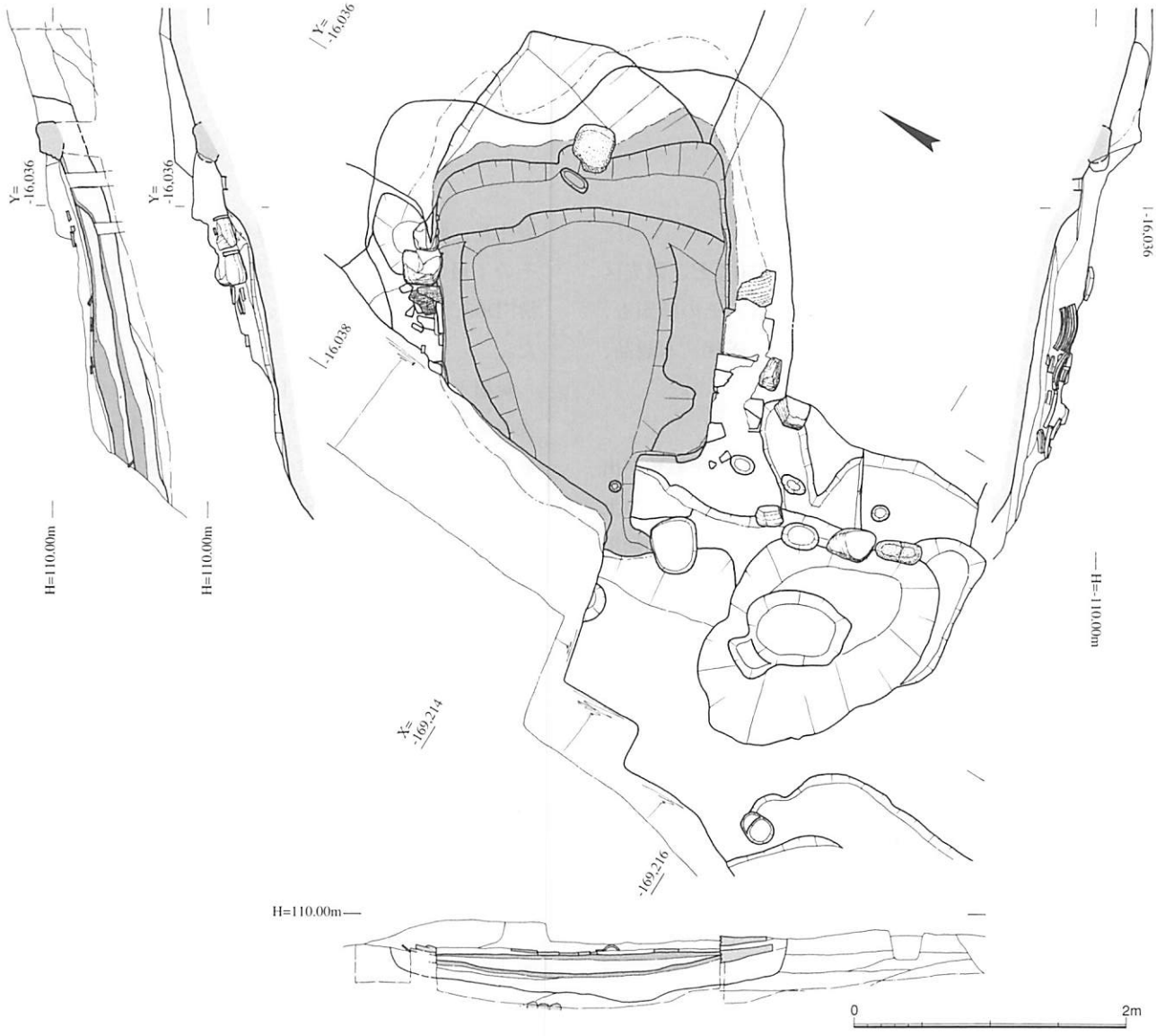


図43　瓦窯SY50　平・断面図　1：50

飛鳥池工房期以降の遺構

中世の耕作溝が調査区のほぼ全域でみつかったほか、平安時代の建物や旧飛鳥池の樋門の遺構などがある。

掘立柱建物SB62・65　調査区北部のほぼ中央に、南北溝SD01埋没後に建てられた掘立柱建物が2棟ある。東西棟建物SB62は、梁間2間（3.6m）、桁行3間（6m）で、西に2間の塀SA63がある。南北棟建物SB65はこれとほぼ直交し、梁間総長4.8m、桁行総長約11mある。軟弱な地盤に建つため、底に石の礎盤をおく柱穴が多い。平安時代の建物だろう。

樋門SX68・SX71など　SX68・SX71は、旧飛鳥池の樋門で、東側樋門SX68が古く、それぞれ水路SD69、SD72で南に排水する。SD72には素焼きの土管が設置してあった。

（花谷　浩・巽淳一郎）

図44　瓦窯SY50（飛鳥池瓦窯）

図45　側壁の瓦積

出土遺物

包含層、炭層、南北溝SD01、瓦窯SY50など、調査区全域から出土した遺物の量は膨大である。その種類も、土器・土製品、銅・鉄などの金属製品、銭貨、木製品、石製品、瓦塼類、木簡など多岐にわたる。

土器・土製品

土器　7世紀中頃から10世紀にいたる時代の土器類が出土したが、飛鳥池工房期（藤原宮期直前期・宮期）の土器類が主体である。工房期の土器類には、ルツボに転用されたものや、漆器生産に関わる漆パレット、各地からもたらされた漆運搬用壺、漆貯蔵具が大量に含まれる。土師器・須恵器が主体であるが、他に線刻鋸歯文と貼付文で飾る朝鮮半島系の鉛釉陶器の壺、印花文を施す統一新羅産の盒蓋等も出土している。

土器類は現在整理中であり、ここでは整理の済んだ西岸の土坑SK70と井戸SE59出土土器を提示しておく。

土坑SK70出土の土師器には、杯類（A・C・H）、鍋、甕等があるが、いずれも遺存状態が悪く、特に珍しい托（29）のみを図示した。須恵器には、杯A（13～16）、杯B（6～11）、杯B蓋（1～4、20・21）、杯X（22）、皿（17～19）、皿蓋（5）、椀A（12）、壺、平瓶（24～26）、甕（27・28）、圏足円面硯（23）がある。時期的には、飛鳥Ⅳ・Ⅴ期に属す。杯A（15）はトリベとして、杯B（8）は、漆のパレットとして使用。平瓶（24・25）は、漆壺。杯B（7・11）は、口縁部外面下半に二条の沈線をめぐらす鋺形器形、皿A（18・19）は、土師器の皿Aに通ずる形態で、19は手持ヘラケズリ調整を施す。いずれも尾張地方産とみられる（図46）。

井戸SE59の埋土からは、飛鳥Ⅳの土師器の甕ばかり5個体が出土した。大型品を除きいずれも完形で使用痕をとどめる（図39）。

土製品　土製品には、炭層出土の土師質当具（図48）2点、陶硯、奈良時代の土馬等がある。当具については、別項で詳述する（18頁）。

墨書土器　第84次調査区に比べると少量ではあるが、「自刀児」（人名－土師器鍋体部外面）、「□瓮玉入」（土師器深鍋体部外面）、「道□師鉢」（僧名－須恵器鉢A体部外面）、「寺」（須恵器片）等が出土している。　（巽淳一郎）

瓦塼

瓦塼類は、丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、蓮華紋鬼板、鴟尾瓦、面戸瓦、隅切瓦、塼などがあり、包含層、炭層、その下層の灰色粘土層、あるいは南北溝SD01や南北大溝SD05、南北溝SD73など、調査区内の各所から出土した。

炭層とその下層から出土した瓦については、大まかに次のように述べることができる。瓦窯SY50は明確な灰原をもたないが、谷東岸の炭層3には焼け歪んだ瓦片が多量に含まれ、これが灰原に相当する。そして、炭層には東南禅院所用瓦が含まれるのに対し、その下層の灰色粘土層には川原寺所用瓦以前のものしかない。また、整地土下層の南北溝SD73の瓦は飛鳥寺創建期のものに限られる。

軒瓦は、総計135点出土した。型式別の点数は、表3に示した。軒丸瓦は、飛鳥寺創建期のⅠ・Ⅲ・Ⅷ型式が1/3あり、7世紀後半のものが2/3を占める。その内、川原寺所用のXⅡ型式2点以外は東南禅院の所用瓦。軒平瓦は、Ⅳ型式B種（6661B）1点以外は、すべて重弧紋。三重弧紋Ⅰ型式が東南禅院の瓦。良好資料が出土した軒丸瓦6点（図47）と、型式分類を改めた三重弧紋軒平瓦（Ⅰ型式）を図示した（図49・50）。

軒丸瓦XⅧ型式は、蓮子および弁の彫り直しと蓮子数の違いにより、a（蓮子1＋4＋11）とb（1＋4＋9）に細分する（図47-3・4）。XX型式は、外区素紋のaと蓮弁風の紋様を彫り加えたbにわける（図47-5・6）。

軒平瓦Ⅰ型式は、これまでA～E種に分けていたが（『藤原概報23』）、更にF～H・J・M種を追加し、いくつかは細分した。A種は、先端が平らな篦状の道具で施紋する大型品。直線顎のA1と段顎のA2に細分した。C・D種はA種に竹管施紋したもの。B種は型挽施紋する小型品。E種はそれに竹管施紋したもの。F種はユビナデ施紋する大型品で、顎の形態と長さによりF1～F3に細分した。H種はそれに竹管施紋したもの。施紋位置でH1とH2に細分した。G種はヘラで沈線を刻む。J種はB種に似るが、弧線が丸いもの。K種は型挽施紋で弧線が角張るもの。M種はユビナデ施紋で瓦当の薄いものである。

瓦窯SY50からは、軒丸瓦瓦当部は出土しなかったが、丸瓦部が1点出土した。接合手法や胎土からXⅦ型式（図47-2）と判断できる。軒平瓦は、Ⅰ型式の6種が出土した（図50）。南壁の補強材は、瓦当厚が大きいA1・

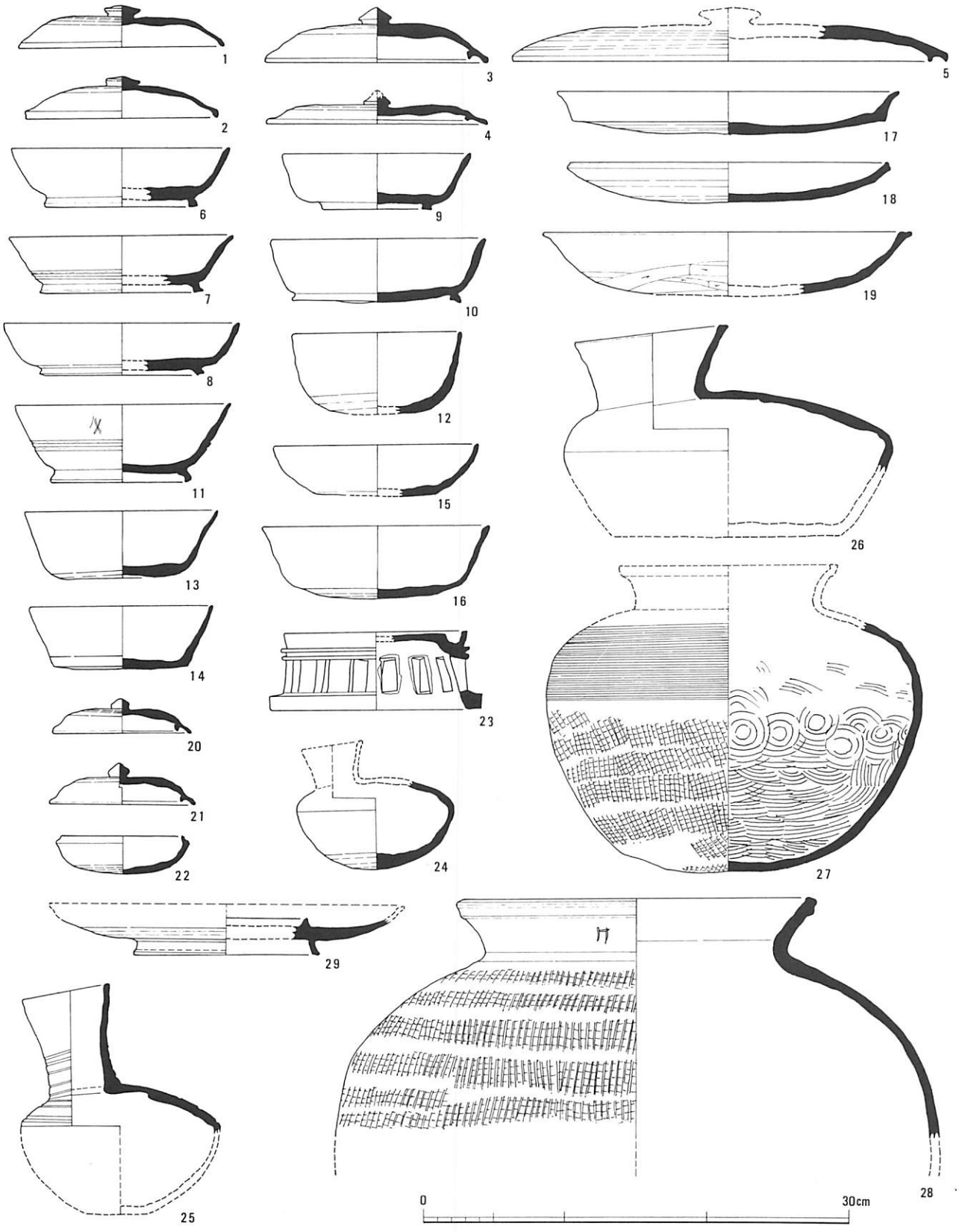


図46　土坑SK70出土土器　1：4

C・D・F2（図50-1～4）とやや厚手の平瓦。窯体に落ち込んだ状態で出土した軒平瓦にも補強材だったと判断できるものがある。これらは、A1・CまたはD・F2（図50-5）・F3の各種で、やはりいずれも瓦当厚が大きい。B種（図50-6）にはそのような痕跡が認められないので、最終操業段階で焼かれていた軒平瓦はB種と考えてよいだろう。丸瓦は竹状模骨丸瓦、平瓦はタテ縄叩きの粘土板桶巻き平瓦が出土した。平瓦は、凹凸面の調整手法に3種ある。

丸瓦は6380点・1277.6kg、平瓦は15349点・2336.6kg出土した。

（花谷　浩）

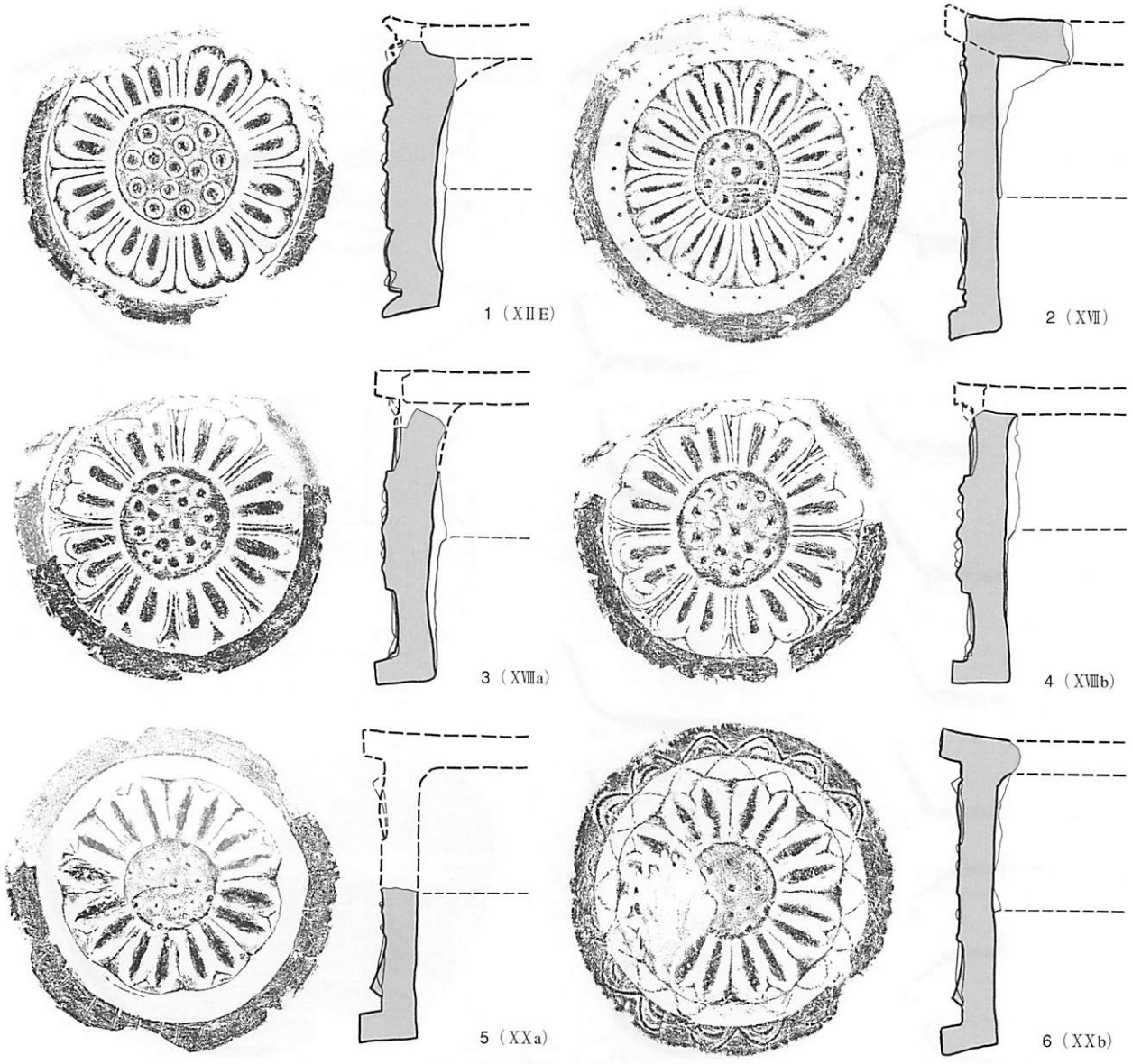


図47　第93次調査出土軒丸瓦　1：4

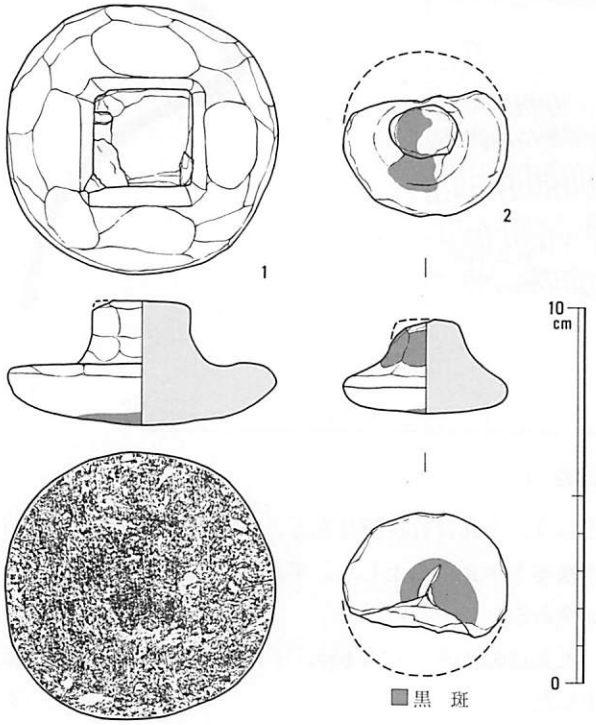


図48　第93次調査出土土師質当具　1：2

表3　第93次調査出土瓦集計表

軒丸瓦 型式	点数		軒平瓦 型式	点数		その他 種別	点数
Ⅰa	15	16（17）	ⅠA	23	69（80）	塼	69
Ⅰb	1		ⅠB	19		鬚斗瓦	20
Ⅲa	1	2	ⅠC	4		面戸瓦	6
Ⅲb	1		ⅠD	4		隅切瓦	18
XⅡC	1	2	ⅠF	14		土管	6
XⅡE	1		ⅠH	1		瓦製円盤	2
XⅢ	6		ⅠJ	3		蓮華紋鬼板	1
XⅦ	12		ⅠK	1			
XⅧa	2	4	ⅡA	1	3		
XⅧb	2		ⅡB	1			
XXa	1	2	ⅡE	1			
XXb	1		ⅣB	1			
新型式	1						
不明	5						
計	51			84			

※（ ）内は種不明を含めた点数

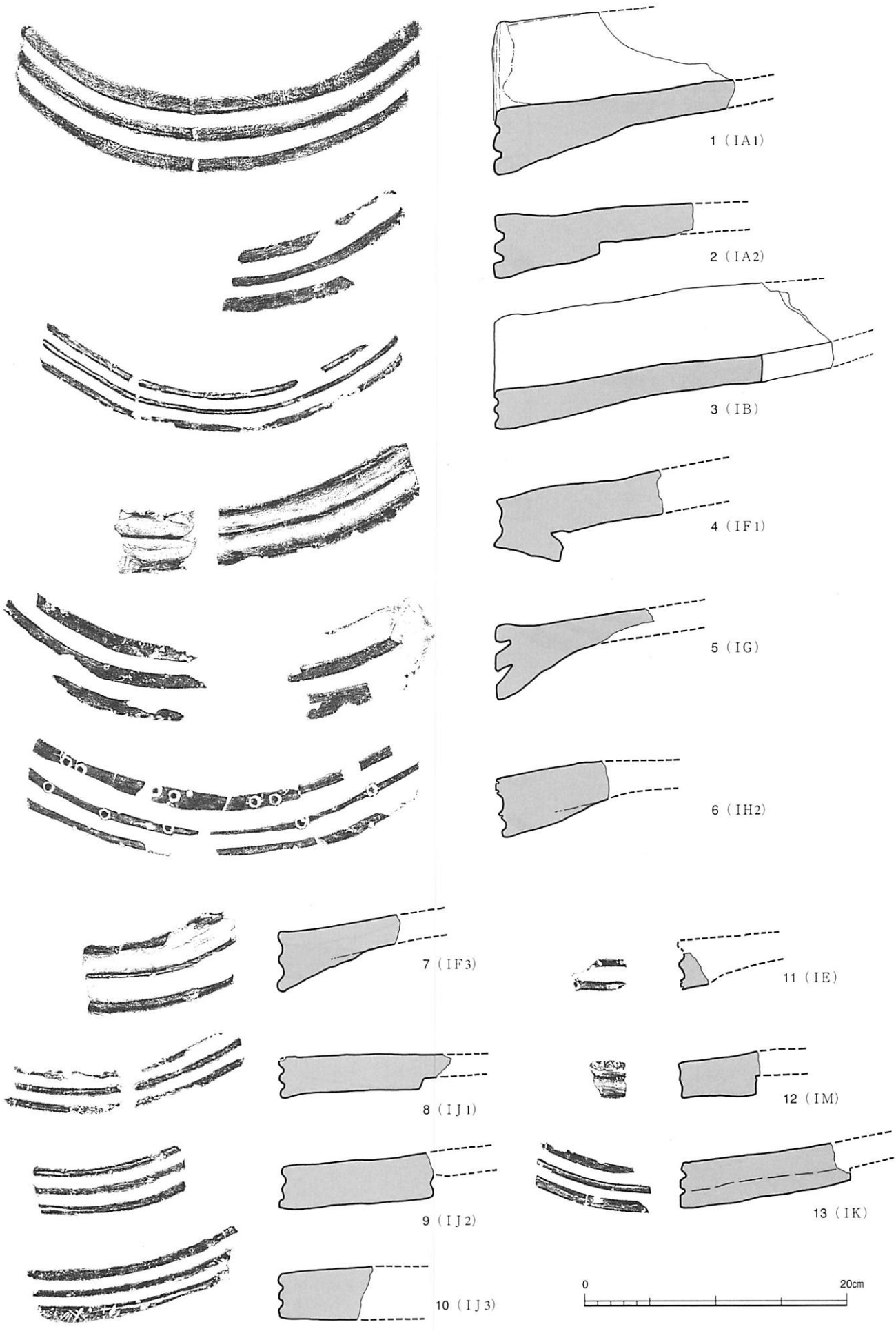


図49　飛鳥池遺跡の三重弧紋軒平瓦　1：4

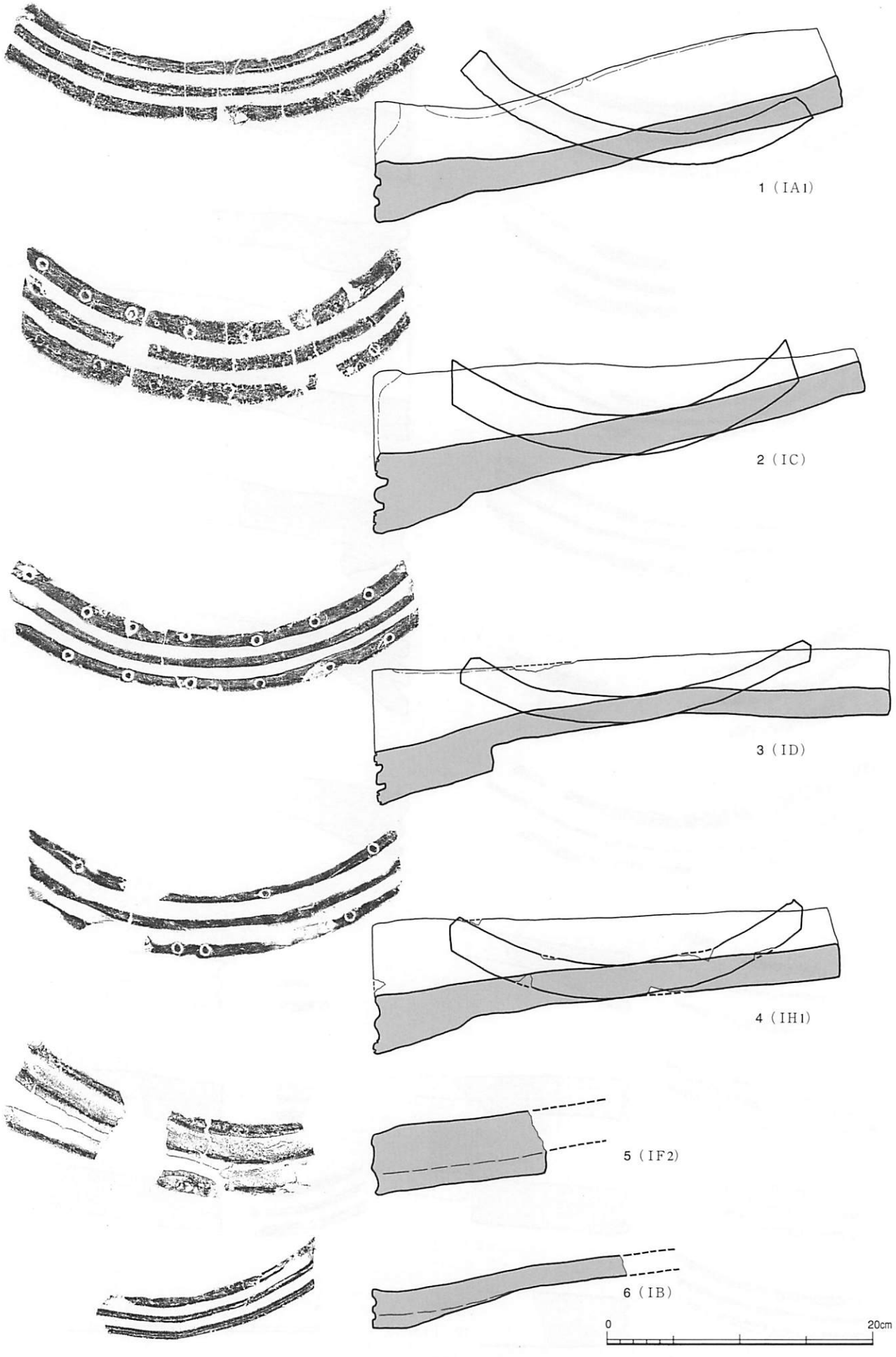


図50　瓦窯SY50（飛鳥池瓦窯）出土三重弧紋軒平瓦　1：4

木製品・土製品・金属製品など

第93次調査では、土器や瓦とともに木製品、土製品、金属製品、石製品、ガラス製品、鉱滓などが主に炭層から多数出土している。このうち銅及び鉄製品の一部を図51に示した。

炭層から出土した木製品には工具や金具類の様、漆塗りの刷毛、曲物などの容器類、部材があり、このほかに南北大溝SD05出土の櫛等や石敷井戸SE60の枠材、木樋天板などがある。

土製品には鋳銅の坩堝ないし取瓶、鋳型、鞴羽口などがあり、完形に近い羽口は1000点を超える。

銅製品ないし未製品には、図示したものとして、人形（1）、細い銅板の表裏に鏨によって樋状の窪みをつけ、その左右に列点を打ち円形浮文を表現した製品（2）、鏃子（3）、撚り合わせた銅線（5）、壺金具未製品（6）、蝶番未製品（7）、銅管（8）、座金（9・10）、鉈尾（11）、刺金（12）、釘隠（13）、鎖ないし針金（14・15）、釘ないし鋲の未製品および製品（16～27）、鏨痕跡の残る薄板（4）があるほかに、瓔珞、佐波理鋺、針、素材と考えられる棒状品・塊状品・線状品などがあり、種類が多岐にわたり点数も多い。また、切り屑なども多数出土している。人形は1以外に長さ3㎝前後の小型品が2点、同じく約7㎝のものが1点出土している。出土遺構・層位は、1がSD01、2がSB62柱穴掘形、22が水溜SX55、他は全て炭層である。1以外の人形は、それぞれSD01、灰茶色土層、炭層から出土した。

鉄製品のうち最も出土点数が多いのは釘で、ほかに鎹（35）、海老錠（28）、鐶座（30）、刀子（29）、鑿（34）、鏨（31・32）、斧、鍬あるいは鋤先（33）、鉄鉗、鉄鏃、素材と考えられる角棒状製品などがある。また、器種不明の鉄器片が多数出土している。出土遺構・層位は29・32が灰色粘土層、34・35がSD01、他は炭層である。

石製品には砥石や、鍛冶に使用した金床石がある。

ガラス製品には緑色・青色・褐色ガラス片があり、原料の石英や鉛の出土もある。また水晶や瑪瑙片、琥珀の丸玉も出土している。

他に、銅滓や鉄滓が多量に出土し、鋳造の際に生じた銅滴、熔銅もかなりの量に上る。

なお、富本銭以外の銅銭では、隆平永寶1点が後世の溝から出土している。（小池伸彦・鈴木恵介）

富本銭

富本銭は炭層1をはじめ、谷に堆積する廃棄物層と東岸の工房整地土から計70点が出土した。その内訳は炭層1：23点、炭層2：34点、炭層3：1点、東岸上層工房整地土：8点、中層整地土：1点、その他：3点であり、整理作業の進捗によりさらに点数の増加が予想される。いずれも枝銭から切断したままの鋳放し銭で、輪の周囲に鋳バリや堰の切断痕が残る。鋳損じた銭の破片が大半を占めるが、完形に近いものが6点、半分程度が残るものが4点ある。湯まわりが悪く完全な形状にならなかったもの、鋳造途中で笵が割れて笵傷が生じたもの、表面に巣が入ったものなどがあり、不良品として廃棄されたことがわかる。銭の直径は各部所で微妙に異なるが、平均寸法は24.4㎝、厚さ1.5㎜前後で、中央に約6㎜の方孔があく。完形に近いもの3点の平均重量は4.59ｇである。

第84次調査SD29出土の鋳棹は、堰の断面形状が銭に残る痕跡と一致し、成分分析の結果も富本銭と同一組成であることが判明したため、富本銭の鋳造用鋳棹と判断した。上下を折損するが、現長10.3㎝、湯道の幅1.1㎝、厚さ3㎜前後で、湯道から明瞭な堰が直角にのび、左右段違いに8箇所の堰（1箇所は痕跡）が残存する。堰の上下の間隔は心々で2.6㎝である。一方、富本銭に残る堰の切断痕は、七曜文の左右いずれかの対称位置にあり、種銭の上下を意識して規則正しく銭笵に配置した状況を示す。また堰が2箇所に残る銭があり、湯道をはさんで左右2列ずつ、全体で縦4列に種銭を配したことがわかる。以上のことから、富本銭は一つの銭笵で少なくとも16枚以上を同時鋳造したものと推測でき、和同開珎と同様、量産化をめざした鋳銭技術の存在を想定できる。

富本銭の字義　銭文の「富本」は、後漢の光武帝が「富国之本、在於食貨」という馬援の上申によって、建武16年（40）に五銖銭を復活した故事（『晋書』食貨志）に由来するものと考えられる。五銖銭は前漢の武帝元狩5年（前118）に発行され、唐の高祖武徳4年（621）に開元通寶が発行されるまで、約700年の長きにわたって流通した。前漢の五銖銭は、王莽の複雑な貨幣改革によって一時廃止されたが、再発行の契機となった馬援上申は、漢貨復活の著名な故事であったと推測できる。同一故事は『芸文類聚』にも掲載され、ここでは馬援が「富民之本、

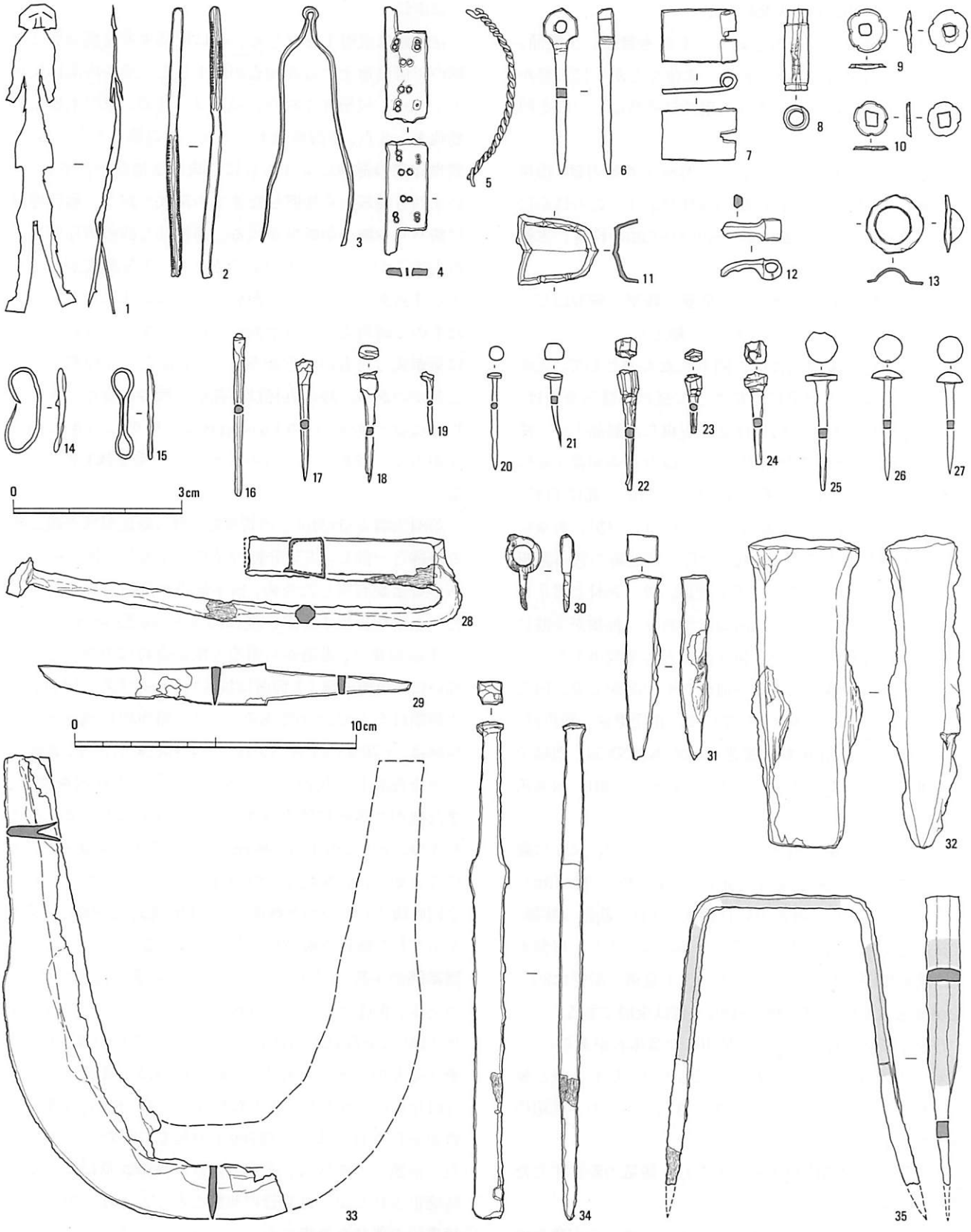


図51　第93次調査出土銅製品（1～27）・鉄製品（28～35）
1～4・6～13・22～35は1：2、　5・14～21は1：1

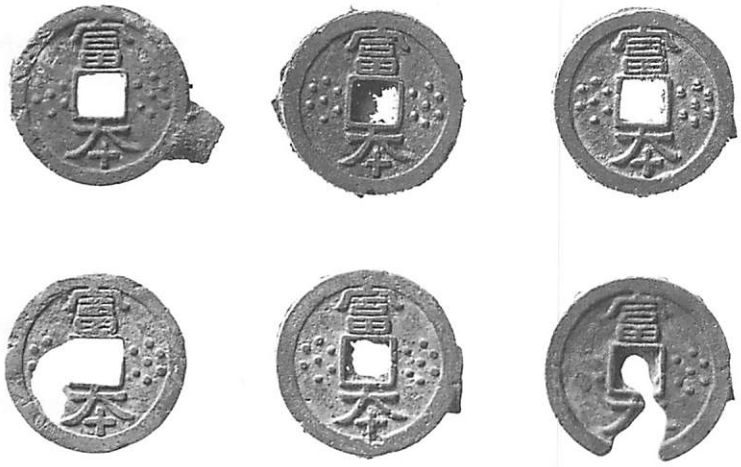


図52　第93次調査出土富本銭　1：1

在於食貨」と五銖銭の復活を上書したと記している。両者に「富国」「富民」の語句の差はあるものの、それらの基本が食貨にあるという点では共通する。『漢書』食貨志は、その冒頭に「洪範八政、一曰食、二曰貨、（中略）、二者、生民之本」と『書経』の一文を引用する。『書経』は、国家統治の根幹の第一が食、第二が貨であり、食物が充足して、貨幣を使用した交易によって物資が流通すると、国力が充実して民が裕福になり、民の教化が成し遂げられるとする。ここでは富国と富民は同意であり、食と貨を重視した経済政策が国家統治の基本と位置付ける。馬援上申の文言は、こうした富国安民の儒教思想に依拠したものであろう。

「富本」の文字は、五銖銭復興に至った故事を参考に、「富国、富民のもとが貨幣である」という意味で銭文に採用された可能性が高い。

一方、左右に並ぶ七星は、陰陽五行思想の陽（日）と陰（月）、木火土金水の五行を総称した七曜文とみられる。中国では、円形方孔銭の形状が天円地方を象り、天地・陰陽の調和がとれた状態を保持すると考えられている（『晋書』穏逸伝「魯褒」銭神論）。富本銭の七曜文は、陰陽二気の間を五行が順序正しく循環する状態を図象化したもので、易象図の「乾坤成列」「七始之図」などに類似した図柄が認められる。

以上のように、富本七曜銭の銭文は、貨幣の本来的機能が富国・富民の本であり、円形方孔の銭貨の形状が陰陽五行の調和のとれた姿を示す、という中国の伝統的思想に由来した啓蒙的な銭文であったと考えられる。このことは、富本銭が中国貨幣の単なる形態上の模倣にとどまらず、貨幣の本質や、貨幣に関わる思想の体系的な理解の上に立って、銭文が考案されたことを物語るものといえよう。

富本銭発見の意義　富本銭はこれまでに平城京右京八条一坊十四坪、同左京一条三坊東三坊大路東側溝、藤原京右京一条二坊西二坊坊間路東側溝、同左京北三条六坊北三条大路北側溝、大阪市細工谷遺跡、長野県高森町武陵地古墳、飯田市座光寺古墳群で出土している。

富本銭は古泉界において、長らく江戸時代の絵銭として扱われてきた銭貨である。昭和60年に、平城京右京八条一坊十四坪の井戸SE1555から富本銭が出土したのを契機に、古泉界に伝存する富本銭の比較検討を行った結果、型式を異にする二種類の富本銭が存在することが明らかになった。古代の富本銭が、出土品もしくは伝世品として後世に伝わり、稀少銭の収集熱が高揚した江戸時代に絵銭として模作されたと判断し、平成元年には富本銭を奈良時代の厭勝銭として報告した。しかしその後、藤原京から相次いで2枚の富本銭が出土し、富本銭が7世紀に遡る銭貨である可能性が生じていた。今回の飛鳥池遺跡の調査によって、富本銭が700年以前に鋳造された銅銭であることを確認することができた。

『日本書紀』には、天武12年（683）に「今より以後、必ず銅銭を用いよ。銀銭を用いることなかれ」という詔がみえ、持統8年（694）や文武3年（699）にも鋳銭司設置記事がみえる。これらの銅銭・鋳銭司関係記事については、従来実態が不明とされ、様々な解釈がなされてきたが、今回の発見によって、富本銭がこれらの記事と関係する可能性が高まった。鋳造銅貨の発行としては和同開珎に先行する可能性が高く、先の銅銭使用記事や、鋳銭司設置記事、大宝律の私鋳銭条をめぐって展開されてきた論争に新たな資料を提供するものとして注目される。

（松村恵司）

飛鳥池遺跡出土の木簡

第93次調査から出土した木簡は、合計97点である。ただし、同木簡は現在も整理・検討中であるため、点数などのデータは今後も変動する。

遺跡を二分する塀より北地区（5BAS区）では、第84次調査でも検出した南北溝SD01から8点、その南に接続する斜行溝SD01Aから21点、南北大溝SD05から6点、その他の遺構から8点が出土した。

南地区（5AKA区）では、工房から廃棄された大量の炭を含む層（炭層）から48点、炭層の下の整地土（灰色粘質土）から5点、その他から1点である。

年紀をもつのは1と6のみで、1「丁丑年」は天武6年（677）、6「丁亥年」は持統元年（687）にあたる。1は第84次調査で同じSD01から出土した「丁丑年十二月」の「三野国」の「次米」（昨年度報告）との関連も考えられるが断片のため、確かではない。

6は炭層の年代を考える際に手がかりとなる。谷筋の炭層が1～3に大別されることは、既述のとおりであるが、木簡は炭層2に集中し、炭層1・3からは少ない。後掲木簡では8が炭層1から出土した以外は全て炭層2からの出土である。

木簡の記述から見ると、炭層2は、6以外にも、7・9・10がいずれも「評」で7世紀を示し、9・10が「里」とあって「五十戸」でない点も併せ考えると、同層は、一応、持統朝頃という年代を与えることが可能であろう。

第93次調査の木簡は、全体として見ると荷札と付札が多く、昨年度報告の第84次調査に濃厚に窺えた寺院との関連を示す木簡を見出すことが出来ない。このことは、主として南区の工房跡から廃棄されたと見れば当然のことである。荷札では後の備中国賀夜郡にあたる地からのものが3点（7・9・10）とまとまっている点が注目される。

11は、炭層の下層の整地土（灰色粘質土）から出土した木簡で、年紀はないものの、書風からみて、天武朝ないしそれ以前に遡る可能性もある。文意が判然としないが、「官の大夫の前に白す」と書き出し、以下人名を列挙している。「官大夫」という表現は3にも見えるが、特定の官職というよりは、一般名詞と考えるべきであろう。人名では「野西乃首麻呂」のように姓と名の間にくる「の」を漢字で表記しており、あまり類例がない。列挙された姓もこれまで知られていないものが多く、木簡の年代推定とともに、検討すべき点が残る。（寺崎保広）

南北溝SD01

1・丁丑年十
・□□□　(47).(10).4　081　NE32

SD01A

2　鮑耳酢一斗　179.17.3　051　NC32

3・官大夫
・□　□　(91).(14).2　081　NB32

南北大溝SD05

4　五十戸調　125.19.5　033　NC33

炭層

[支ヵ]
5　散□宮　□　(179).12.4　081　HO28

[部ヵ]
6　丁亥年若佐小丹評　木津□五十戸
秦人小□□□
[益二斗ヵ]
197.30.3　031　HL29

[夜評ヵ]
7・加□□□　□
・□□□佐□俵□
[波　閇　二ヵ]　138.(26).4　081　HM30

8　伊支須二斗　120.25.5　032　HQ29

9・賀賜評塞課部里
・人蝮王部斯非俵　195.34.5　031　HL30

[加夜]　[蕝里]
10・□□評阿□□人
[曳ヵ]
・羅□連□□
□□□　□□□　廿三□　166.32.4　031　HL30

炭層下整地土

11・官大夫前白　田々連奴加　加須波□鳥麻呂
久田□　小山乃□乃
・□波田乃麻呂　安目　汗乃古
野西乃首麻呂　大人　□□ツ麻□□□□黒□
(257).28.3　019　HK28

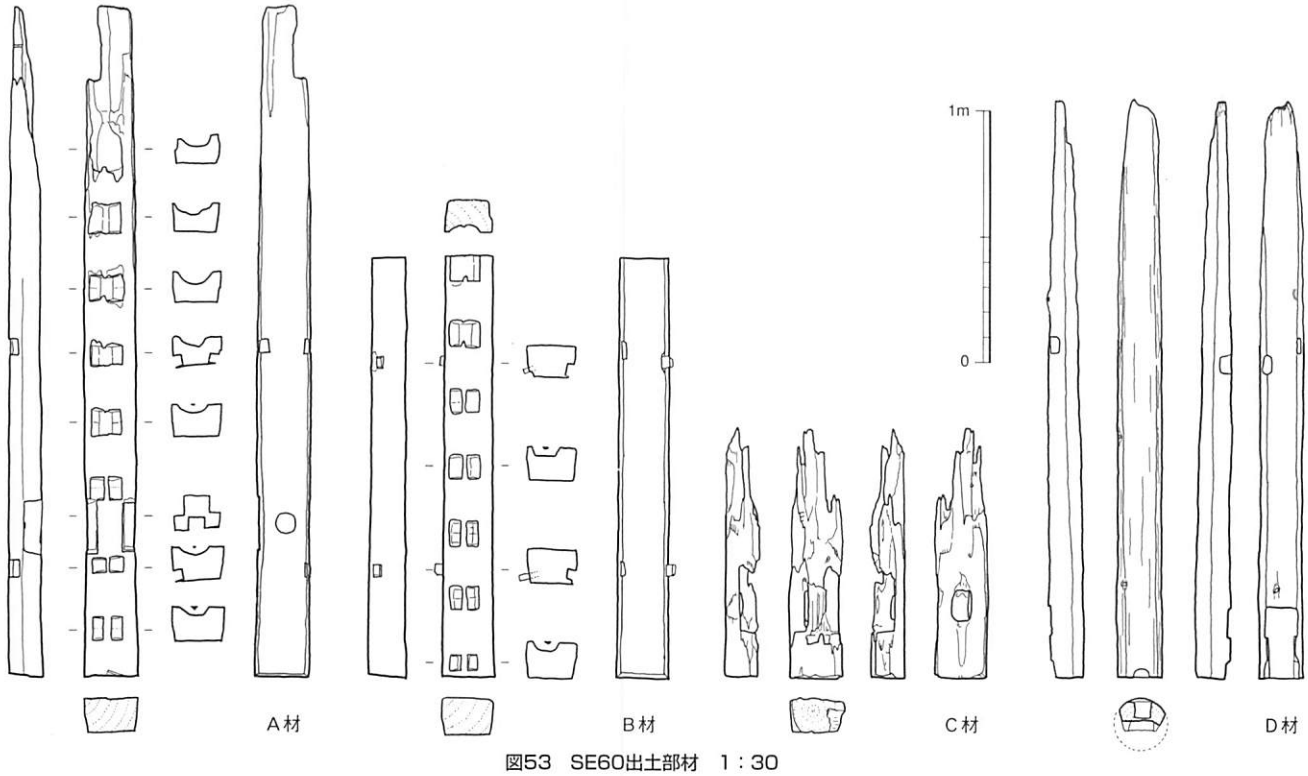


図53　SE60出土部材　1：30

石敷井戸SE60に転用された建築部材

調査区北西の石敷井戸SE60から、井戸枠に転用された建築部材が出土した。いったん抜き取った井戸枠材の一部を投棄し、埋め戻したものと考えられる。断片化した材もあるが、ここでは遺存状態の良い4点の概要を記す。

A材　長さ264cm、断面はほぼ台形で幅は21cmあり、厚さ14cmの半ばで20cm、さらに18cmまで2段階で斜めに削る。材の片端は原形を遺すが、逆は80cmほどが腐朽する。遺存端を下にして、立て並べた井戸枠と考えられ、第84次調査の石敷井戸SE42の下部枠と同構造となる。井戸枠転用時のダボ穴は、下端から40cmの片側、130cmの両側にある。当初の加工痕として渡り顎下木仕口、丸ダボ穴、垂木エツリ穴を確認し、建物の軒桁の転用と推定した。

渡り顎仕口は、井戸転用時の外面側、下端から約60cmにあり、材長方向に21cmを両側から4cm、深さ7cm欠き込む。上木＝梁材の圧痕は認められない。この裏側に、径8cm、深さ6cmの丸ダボ穴がある。柱径を示す圧痕は見えない。エツリ穴は材長方向10cm、幅12cmで、中央に幅3cmを残して、底を貫通させる。断面形は逆台形～浅いU字形～V字形と不定である。材側面からの距離は3cm・6cmと片寄る。ほぼ27cmの等間隔で9箇所ある。

エツリ穴の間隔からこれを用いて緊結される垂木は、9寸間隔に復原される。柱に対して手挟みに配すが、渡り顎の両脇で、エツリ穴の長さを9cm・6cmと狭めて、梁との干渉を避ける。柱間は、腐朽端までダボ穴がなく、7尺以上となり、垂木割から9尺と推定する。当初断面は幅7寸、セイは転用時の加工が不明であるが、当初加工痕からみて5寸とすると、長方形断面を寝かせた平使いの軒桁となる。長さは柱間2間分以上であったろう。

B材　長さ167cm、下端での断面は厚15cm、幅21cmを18cmまで斜めに削る。井戸のダボ穴は、下端から42cmと125cm付近の両側面にあり、幅5×厚2cm、長7cmほどのダボ2個が残る。材表面の遺りが良く、A材同様のエツリ穴が7箇所確認できる。エツリ穴の底にノミ跡があり、幅4.5cm程のノミを用いて加工している。材寸、エツリ穴の間隔・加工寸法ともA材と等しく、同一建物からの転用と考える。なお下端のエツリ穴は長さ6cmと小さく、A材同様、渡り顎仕口に近接していたらしい。

C材　長さ99cmで、材表面がひどく腐朽するが、井戸枠下端部分である。厚は13cmが遺り、幅21cmを2段階で18cmまで削る。下端から27cmに渡り顎下木仕口、その両側にエツリ穴、裏側にダボ穴がある。当初の加工寸法は不明だが、A材と同寸とみなせ、同一建物の部材であろう。

D材　長さ230cm、断面は最大幅17cmで、井戸内側は幅12cmの平滑面とするが、外側に丸みを遺し、断面円形の部材の転用である。井戸のダボ穴は下端から1.3mほどの位置の両側にある。当初の加工痕は、丸ダボ穴と鎌継の女木仕口がある。ダボ穴は下端に丸穴の半分が遺り、径6cm、深さ7cm、周囲に圧痕はない。鎌継ぎ仕口は、大半が削り落されているが、長28cm、頭長12cm、頭幅12cm、首幅10cmである。当初断面は、曲率からみて径21cmほどであろう。ダボ穴側が下面で、上面が削り落されて確証を欠くが、棟木様の部材ではなかろうか。A～C材と同一建物からの転用か否かは不明である。　（長尾　充）

飛鳥池遺跡から出土した富本銭の材質

炭層から出土した70点の富本銭は、完形に近いものが6点あるが、鋳損じた破片状のものが主である。完形に近いものでも、鋳バリが取り付いた状態で、鋳造後に鋳棹から切り離した堰の痕跡も残っている。また、鋳型からはずしたまま仕上げをしていない、鋳放し状態の表面が観察できるものもある（図54）。銭としては最終的に研磨されるのが一般であるので、今回出土した一連の富本銭は、製作の途中段階で廃棄されたものと判断できる。

飛鳥池遺跡における富本銭の大量出土以前に、出土した富本銭の材質的特徴が、主成分を銅、副成分をアンチモンとする［銅－アンチモン］系の合金であることを報告していた（『年報1996』30～31頁）。この［銅－アンチモン］系の合金は、富本銭のほか、古い時期のものとされる和同開珎や、仿製の小型海獣葡萄鏡に認められている。

今回、新たに見つかった富本銭に対して、非破壊的手法を用いた蛍光X線分析法により分析を行った。定量用標準資料を用いた半定量分析である。その結果、主成分の銅にアンチモンを副次的に含む、［銅－アンチモン］系の合金であることが判明し、かねてから富本銭に認められていた材質的特徴を示した。因みに、アンチモンの含有量は一定せず、4～25%と大きくばらつく。しかし、例えば一般的な青銅に認められるスズや鉛がほとんど含まれていないことも、今回出土した富本銭の大きな特徴として注目される。他に、微量のビスマス、ヒ素、銀などが含まれていた。今回初めて確認された鋳棹も、同じタイプの合金であった。

銅にアンチモンを加えると、融点が下がるとともに、湯流れの向上が期待される。また、強度も上がり、耐摩耗性も向上すると考えられる。さらに、金色に近くなる鋳上がりの色あいも、考慮された可能性が高い。しかし、この合金は偏析しやすいため、扱いにくい合金であったのではなかろうか（図55）。飛鳥池遺跡1991年度調査では、アンチモンの鉱石である輝安鉱（Sb_2S_3）が出土しており、鉱石の入手経路や、製錬方法の検討も今後の課題である。さらに、アンチモンが当時どのように認識され、何と呼ばれていたのか興味は尽きない。

［銅－アンチモン］系合金という、歴史的にも珍しい合金が、7世紀後半から8世紀前半にかけてわが国に存在し、そしてほどなく消えていったことを、今回の富本銭の大量出土が語ってくれることになった。　（村上　隆）

図54　富本銭の表面　顕微鏡写真

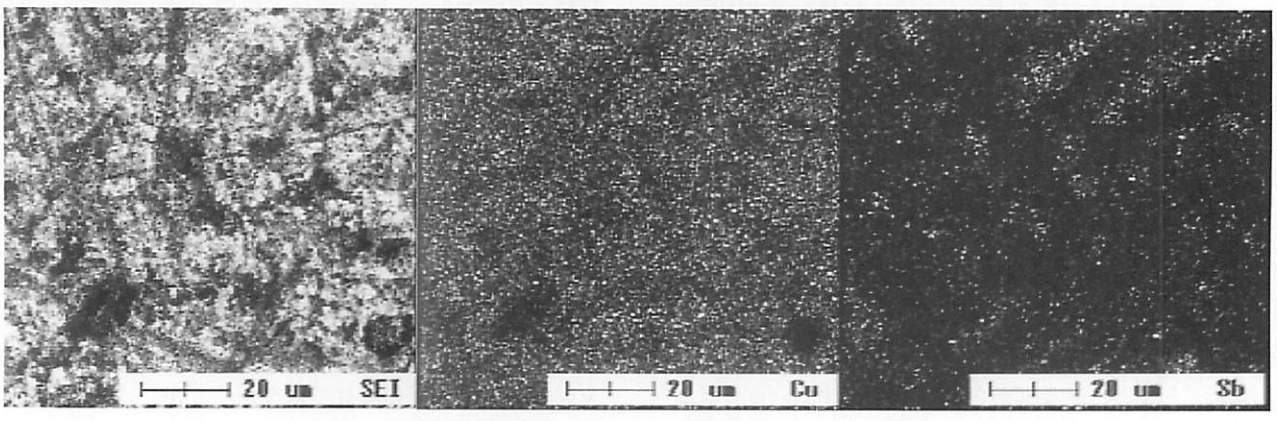


図55　電子顕微鏡による富本銭の表面X線分析　左：二次電子線像　中：銅のX線像　右：アンチモンのX線像

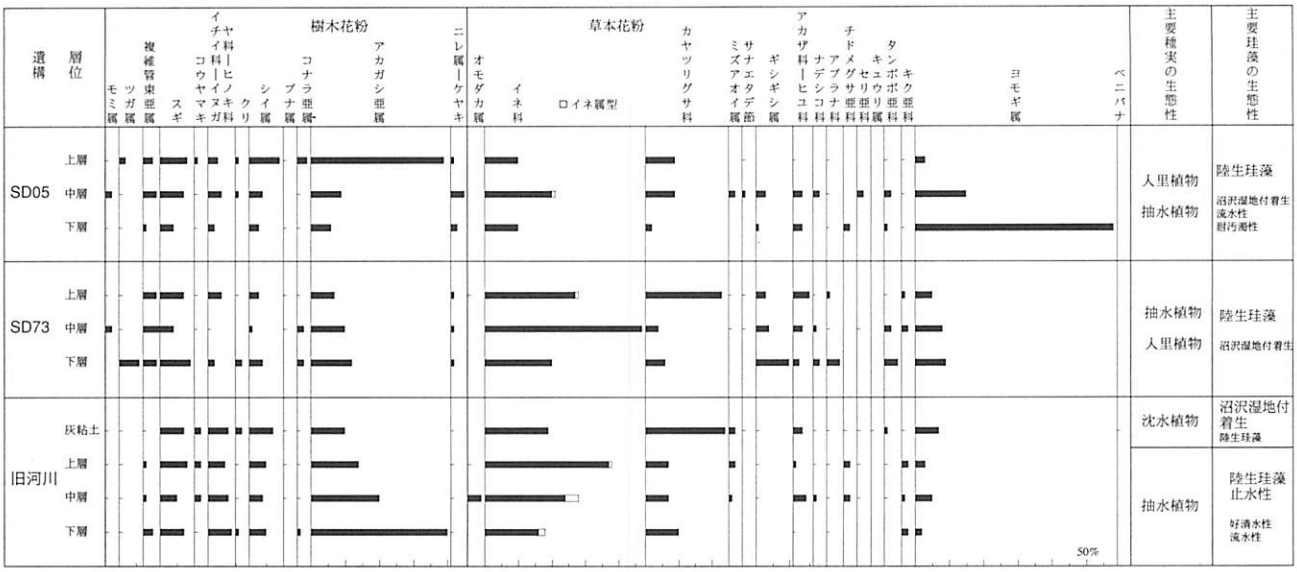


図56　第93次調査　主要花粉ダイアグラムと種実・珪藻の生態性

飛鳥池工房成立に伴う環境変化の検証

中央の東西畔部・調査区北端において、旧河川堆積・南北古溝SD73・南北大溝SD05の堆積物の10層準について、花粉分析を主に種実同定、珪藻分析を行い、工房成立前後の古環境の検討を行った。

旧河川堆積

下層では、アカガシ亜属の花粉が優占し、これを主とする照葉樹林が比較的多く分布していた。中・上層ではアカガシ亜属が減少し、イネ属型を含むイネ科が増加し、周辺地域で水田が拡大する。種実ではコナギ・オモダカ・ホタルイ属などの抽水植物を主に、イトトリゲモなどの沈水植物が多く、河川が抽水植物や沈水植物の生育する滞水した環境であったとが考えられる。珪藻ではHantzschia amphioxys、Navicula muticaの湿った土壌に生息する陸生珪藻、Melosira ambigua, italicaの止水性種や、好清水性種のFragilaria construensが出現する。河川の周囲には湿った陸域が分布し、水の淀む清水域であったと推定される。

最上層の灰粘土では、カヤツリグサ科の花粉が高率で、沈水植物であるイトトリゲモの種子が多くなる。珪藻では、沼沢湿地付着生種のEunotia pectinalis v.minorやHantzschia amphioxys、Navicula muticaの陸生珪藻の占める割合が高い。水が淀んで滞水して浅水域を呈し、沈水植物や抽水植物が生育していた。

南北古溝SD73

イネ科花粉が優占し、カヤツリグサ科やヨモギ属の草本花粉、アカガシ亜属やスギ等の樹木花粉を伴う。種実ではカヤツリグサ科、コナギの抽水植物と、ナデシコ科、カタバミ属、キク科の乾燥した人為改変地を好む人里植物が主体をなす。珪藻ではHantzschia amphioxys、Navicula mutica、Pinnularia subcapitataの陸生珪藻の占める割合が高く、沼沢湿地付着生種のNavicula elginensisが伴われる。溝の周囲で人里植物が増加し、人為度の高い環境が拡大する。溝は抽水植物が生育し、沼沢状の水域を呈していた。

南北大溝SD05

下層ではヨモギ属の花粉が極めて高率に現れる。ヨモギ属の増加は、この時期の大きな人為改変を示し、乾燥した裸地にヨモギ属が二次遷移として生育したと考えられる。中・上層では、ヨモギ属は減少し、イネ科やアカガシ亜属が増加し、周辺の植生が復元して遷移する。種実は各層ともナデシコ科等の人里植物とカヤツリグサ科、コナギの抽水植物を主とする。珪藻では、Hantzschia amphioxys、Navicula mutica、Pinnularia subcapitataの陸生珪藻、沼沢湿地付着生種のNavicula elginensis、耐汚濁性種のGomphonema pumilumが主に出現する。溝の周囲は人里植物が生育し人為環境が分布していた。溝には抽水植物が生育し、沼沢状の水域の環境であった。耐汚濁性の珪藻が生育し、汚濁し水質が悪かったと推定される。

まとめ

旧河川の時期は、当初、アカガシ亜属を主とする照葉樹林が比較的多く分布するが、上層に向かって減少し、水田が拡大する。河川は抽水植物や沈水植物が生育し、淀んだ水域を呈する。南北古溝から南北大溝の時期は、人里植物が多くなり、周囲は人為度の高い環境となる。溝は抽水植物が生育し、淀んでいた。南北大溝下層ではヨモギ属が増加し、大きな人為改変を示す。南北大溝の時期は、特に汚濁し、水質が悪くなったと推定される。

（古環境研究所　**金原正子**・天理大学附属天理参考館　**金原正明**）

まとめ

今回は、これまでに調査された遺跡北部（第84次調査区）と南部（1991年度調査区・第87次調査区）の間を調査し、飛鳥池遺跡の全体構造を解明しようとした。その目的はほぼ果たせたばかりでなく、東岸の工房跡や飛鳥池瓦窯（瓦窯SY50）の発見、更には富本銭の出土など、予想を上回る成果を上げることができた。

遺跡の構造　飛鳥池遺跡は、掘立柱東西塀SA56～58を境に、二つの地区（南地区と北地区）に分かれる。

南地区は工房地区。丘陵裾から上に工房が広がり、谷にはそこから投棄された当時の工房廃棄物層（炭層）が堆積する。この地区は南北80m以上、面積にして3000㎡を超え、炭層の総量は土嚢にして10万袋以上と推計される。今回調査した東岸の工房跡は、炉跡総数197基を数え、工房のなかでも特に規模が大きい。この工房は、上下3層にわかれ、下層段階には銅製品を、中層と上層の段階には鉄製品を生産していた。また、その北には瓦窯SY50が見つかった。

これまでの調査により、南地区の谷の西側（1991年度調査区）には銅の工房と鉄の工房があり、西の谷の奥（第87次調査区）に金銀やガラスの工房があったことが判明している。更に、南側の丘陵の北斜面には倉庫が建ち、この一郭は管理収納施設と考えられる。このように、南地区は業種ごとの配置がきちんとなされ、しかも多種多様な業種が協業体制をとって操業していた。これは飛鳥池工房の大きな特徴である。

一方、北地区の東半には、南地区から流れ込む水を処理する施設が設けられていた。3条の掘立柱東西塀を越えて炭層は北へは広がらない。おそらく堰の機能を果たしたのだろう。水溜SX53·55でいったん沈殿された工房からの排水や雨水は、溝SD01を流れて石組方形池SG30に注ぎ、再度沈殿されたのち、石組溝SD31で東側の河川（飛鳥池東方遺跡流路SD010）に排水される。

また、北地区の南西隅では石敷井戸SE60がみつかった。規模は若干違うが、同じような構造をもつ石敷井戸が北地区の北西隅にもある（第84次調査区SE42）。これら二つの石敷井戸を含め、北地区が南地区との関連で計画的に造営されたことは疑いえない。

北地区は、出土木簡からみて、飛鳥寺と深い関わりが推定できる。崇峻元年（588）創建の飛鳥寺は、天武9年（680）に官寺に準ぜられたし、天武11年（682・一説に天智元年（662））には入唐僧道昭（629～700）が東南禅院を創建した。北の地区は、この東南禅院推定地に隣接し、それにも大いに関連した地区でもあった。

富本銭の発見　出土遺物で最大の注目を浴びたのは富本銭。1999年7月末現在、出土点数は70点にのぼる。富本銭はその鋳造時期や性格に諸説あったが、炭層と東岸の工房跡の分層発掘が年代決定に大きな役割を果たした。

富本銭は炭層および工房整地土の各層から見つかったが、下層工房の廃棄物を含む中層工房整地土から出土したことが決め手となった。この層は、瓦窯SY50の灰原に対応する炭層3より下層にある。東南禅院の創建年次には、天智元年（662）説と天武11年（682）説とがあるが、おそくとも文武4年（700）道昭遷化の時点ではほぼ完成していたと考えてよい。瓦窯の操業時期をそれ以前とすれば、富本銭の鋳造年代は700年を遡るとみて間違いなく、共伴した土器や木簡の年代もこれに矛盾しない。和同開珎以前とした根拠はここにある。

飛鳥池遺跡は、7世紀後葉に上に述べたような二つの地区が整備され、南地区は「工業団地」あるいは「コンビナート」とでもいえる内容をもつにいたる。飛鳥地域ではこれほどの規模の工房群は他になく、その性格が大きな問題となる。

今回、富本銭がここで鋳造された可能性が高いことがわかり、また銅製人形の製作あるいは製品の注文主としてみえる「大伯皇子宮」や「石川宮」、新嘗祭に関連するかと推定される木簡の存在は、この遺跡が天皇や皇子宮に深く関わる「官営工房」だったことを雄弁に物語っているようにみえる。その一方で海獣葡萄鏡や板仏の鋳造、仏像の宝冠や堂内荘厳具を思わせる金銀ガラスなど多量の玉や装飾具の生産を担っていたことも事実であって、北地区は飛鳥寺あるいは東南禅院との関連が強い。

だがむしろ、宮の製品も準官寺の製品もといった未分化な状況と、更には業種の多様性と総合性こそが、飛鳥池遺跡の特徴であり、かつまた7世紀後葉のこの時期特有の操業形態だったのだろう。いずれにせよ、律令国家建設の途上にあった当時の日本を考える上でこの遺跡は計り知れない重要性をもっており、その解明に向けた調査・研究を進めたい。

（巽淳一郎・花谷　浩）

◆飛鳥池東方遺跡の調査
――第92次・第91-6次

はじめに

本調査は、奈良県が計画する万葉ミュージアム（仮称）の建設に伴う事前調査である。調査地は飛鳥寺の南東方に位置し、飛鳥池の東岸をなす丘陵と、飛鳥坐神社南の丘陵に挟まれた、北西から南東へ遡る谷筋で、岡寺の北側から下る谷を主とし、これに小原の集落から下る谷が合流している。谷川はすでに整理され、谷の西寄りにコンクリート製開渠の農業用水路として整備されている。

調査対象地は、ミュージアム建設予定地の東半にあたり、建物外構の盛土による造成と、既存用水路の付け替えが計画されている。昨年度、第86次調査として、調査対象面積約6,500㎡について、８箇所、合計1,112㎡のトレンチを設け、遺構面と谷の堆積状況を把握する目的で調査を行った。谷の西寄りを流れる流路SD010と、これに平行する５時期の掘立柱塀や、谷の中央東寄りの大規模建物等を検出している（『年報1998-Ⅱ』）。本年度は調査対象地を、南方へ拡げた約10,500㎡とし、第86次調査の成果を勘案しながら、水路付替工事に関わる部分、および旧流路の一部を対象に、第92次調査として10箇所のトレンチを設定した（図57）。発掘面積は合計604㎡、調査期間は４月７日から６月15日である。また第92次調査の後、第91-６次調査として工事立会調査を行った。各トレンチの面積と調査期間を表４に示す。

本調査については、飛鳥池遺跡の調査と併せて、万葉ミュージアム関連の報告書の刊行が予定されている。詳細報告はこれに委ねることとし、ここでは各トレンチにおける主要遺構と出土遺物の概要を述べる。

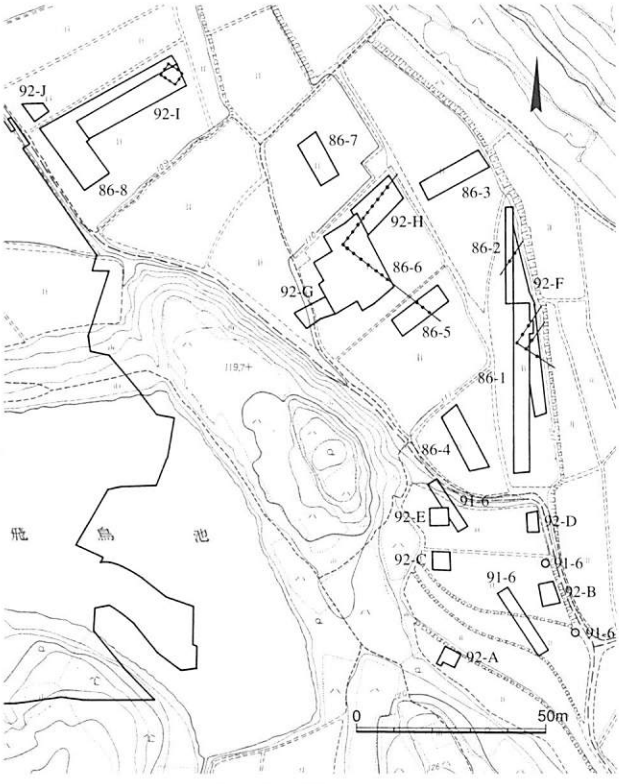


図57　第92次調査位置図　１：2000

１　第92次調査

Ａトレンチ

調査地の南端、既存用水路から南西方向に最も高い水田（H=114.6m）に設定した、北で東へ振れる南北４m、東西５mの調査区である。

基本層序は耕土、褐灰色粘質土（床土）で、トレンチ

表４　調査面積と調査期間

トレンチ	大−中地区名	面積	調査期間
92-A	5AKA-B	19㎡	4.15～4.28
92-B	5AKA-B	27㎡	4.13～4.24
92-C	5AKA-A	22㎡	4.7 ～5.27
92-D	5AKA-A	18㎡	4.13～5.28
92-E	5AKA-A	25㎡	4.7 ～4.27
92-F	5AKA-A，5AME-F	131㎡	4.13～5.29
92-G	5AME-F	45㎡	4.16～5.26
92-H	5AME-F	102㎡	4.15～5.29
92-I	5BAS-M	195㎡	4.21～6.15
92-J	5BAS-M	20㎡	5.25～6.5
91-6南	5BAS-B	60㎡	6.18～6.19
91-6北	5BAS-A	45㎡	6.26～6.29

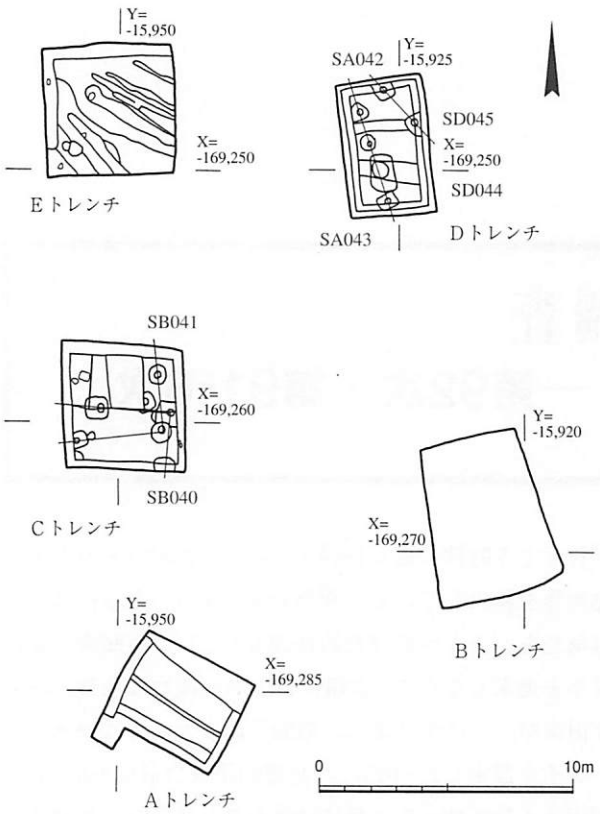


図56　第92次調査遺構図1　1：300

南辺西端から丘陵側へ延ばしたサブトレンチで、表土直下に地山の岩盤（H=113.9～114.5m）を確認したが、地山は谷に向かって急激に傾斜しており、トレンチ北端では地山に達しなかった。トレンチ南の丘陵を削平して耕地とし、丘陵崩落土を混交しながら耕作されていたことがわかる。等高線に沿う方向の耕作溝を検出したのみで、顕著な遺構はみられない。

Bトレンチ

Aトレンチの3段下の水田（H=112.4m）で既存用水路沿いに設定した、北で西に振れる南北6m、東西4.5mの調査区である。

基本層序は耕土、暗青褐色粘土（床土）で、明瞭な遺構面がなく、H=112.0m以下はトレンチ全体が流路堆積となり、淡褐色砂、暗灰色粘土等が堆積する。H=110.8m以下は粗砂層で、径20～30cmの丸石が混じる。

Cトレンチ

Bトレンチと同じ水田の、丘陵裾寄りに設定した、南北5m、東西4.5mの調査区である。

耕土、床土を除去した茶褐色土面（H=112.0m）で遺構検出を行い、北半では茶褐色土を除去して茶褐色粘質土面（H=111.6m）で下層の状況を確認した。なおH=111.5m以下は暗青灰色粘土・暗青灰色砂質土等の斜面への堆積を確認したが、地山まで達しなかった。建物2棟を検出したが、これらと組み合わない柱穴があり、少なくとも3棟が重複している。

掘立柱建物SB040　トレンチ中でL字形に柱穴3基を検出し、建物の北東隅にあたると考える。掘形は80cm角ほどで、柱間寸法は東西9尺、南北8尺で、棟方向は未確定だが、北で東へ5度の振れを測る。

掘立柱建物SB041　トレンチ中でL字形に柱穴3基を検出し、建物の南東隅にあたると考える。掘形は円形に近く、径80cmほどで、柱間寸法は東西11尺、南北7.5尺で、棟方向は未確定だが、北で西へ5度の振れを測る。

Dトレンチ

B・Cトレンチの1段下の水田（H=111.9m）の既存用水路寄りに設定した、北で西へ振れる南北5m、東西3.5mの調査区である。耕土、黄褐色粘質土・淡黄灰褐色粘質土・灰褐色粘質土（床土）を除去した灰褐色砂質土面（H=111.1m）が遺構面で、南北方向の塀2条と東西素掘溝2条を検出している。

掘立柱塀SA042　トレンチ北東寄りで柱穴2基を検出した。掘形は80cm角ほどで、柱間寸法は6尺、北で西へ43度の振れを測る。トレンチ西方に想定される流路に沿う塀であろう。

掘立柱塀SA043　トレンチ北西角から南辺中央まで柱穴4基を検出した。掘形は径80cmの円形あるいは80×60cmの方形で、柱間寸法は4尺、北で西へ20度の振れを測る。トレンチ西方の流路に沿う塀で、SA042を造り替えたか。

東西溝SD044　トレンチ南寄り、幅70～90cm、深さ35cmの素掘溝。灰褐色粘質土が堆積。SA043より新しい。

東西溝SD045　トレンチ中央、幅40～50cm、深さ30cmの素掘溝。黄灰色砂質土が堆積。SA042より新しい。

Eトレンチ

Dトレンチと同じ水田の丘陵裾寄りに設定した、南北5m、東西5mの調査区である。

基本層序は、Dトレンチと同様であるが、床土下に炭化物混りの遺物包含層があり、これを除去してトレンチ南西でH=111.7m、北東でH=111.2mまで北東下がりの緩傾斜面を検出した。この斜面上の遺構は、等高線に沿う耕作溝数条のみである。

Fトレンチ

調査地東端の水田（H=111.3m）の新設用水路施工部分に設けた調査区で、第86次調査1・2トレンチの東側に沿う。南北50m、幅3.5mで、北半で第86次トレンチと重複する。

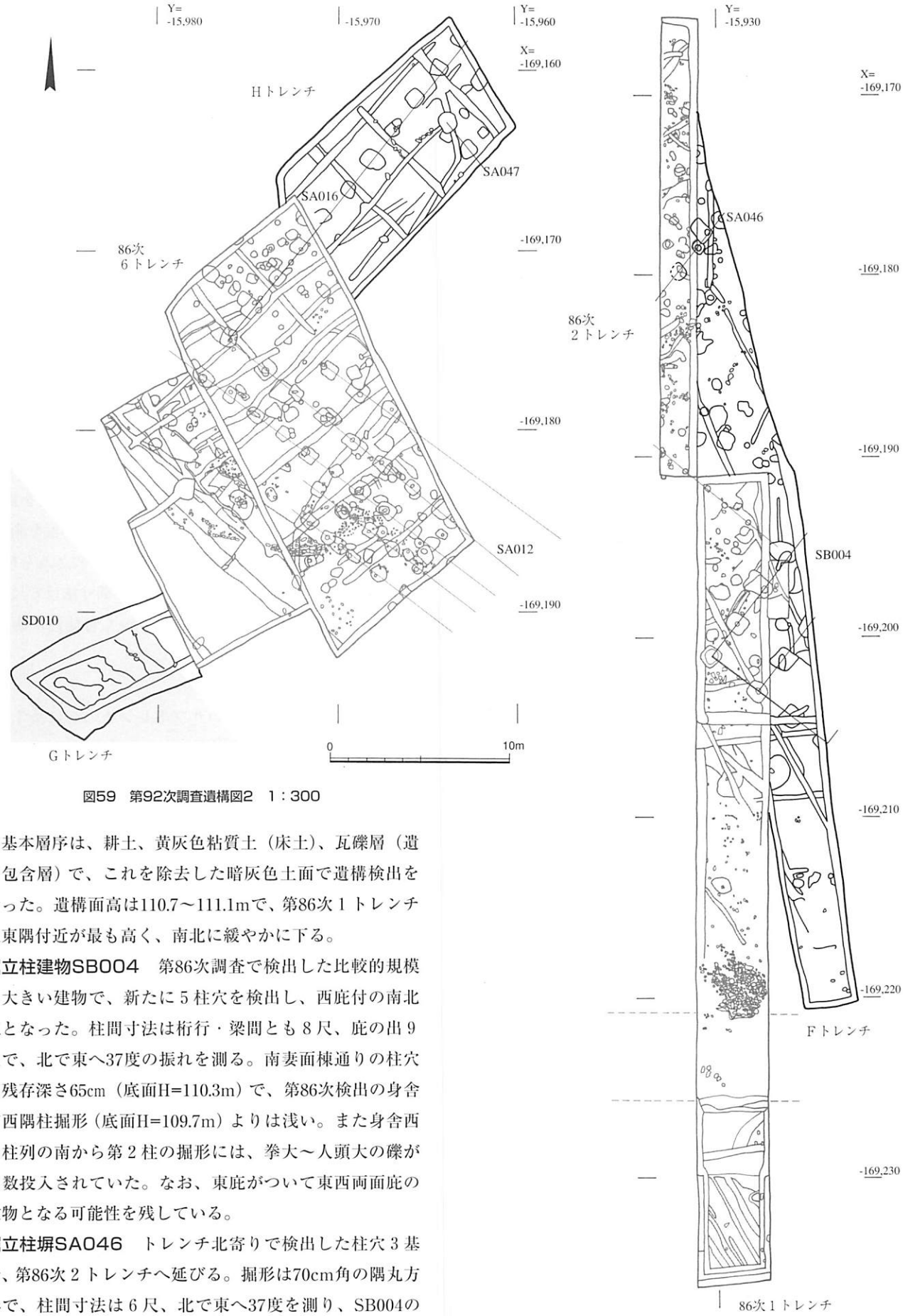


図59　第92次調査遺構図2　1：300

基本層序は、耕土、黄灰色粘質土（床土）、瓦礫層（遺物包含層）で、これを除去した暗灰色土面で遺構検出を行った。遺構面高は110.7～111.1mで、第86次1トレンチ北東隅付近が最も高く、南北に緩やかに下る。

掘立柱建物SB004　第86次調査で検出した比較的規模の大きい建物で、新たに5柱穴を検出し、西庇付の南北棟となった。柱間寸法は桁行・梁間とも8尺、庇の出9尺で、北で東へ37度の振れを測る。南妻面棟通りの柱穴は残存深さ65cm（底面H=110.3m）で、第86次検出の身舎南西隅柱掘形（底面H=109.7m）よりは浅い。また身舎西側柱列の南から第2柱の掘形には、拳大～人頭大の礫が多数投入されていた。なお、東庇がついて東西両面庇の建物となる可能性を残している。

掘立柱塀SA046　トレンチ北寄りで検出した柱穴3基で、第86次2トレンチへ延びる。掘形は70cm角の隅丸方形で、柱間寸法は6尺、北で東へ37度を測り、SB004の西庇柱列から15m離れて、平行する。SB004を含む区画の北西を限る塀であろうか。

図60　流路SD010　Gトレンチ東から

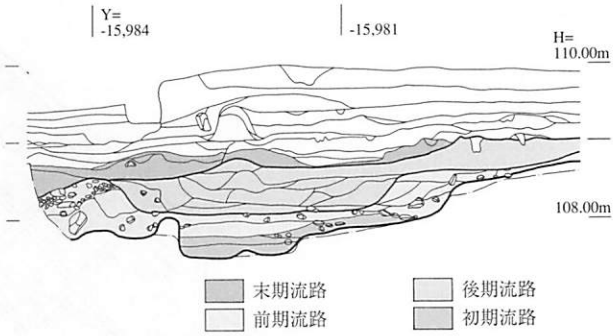


図61　流路SD010土層図　1：100　Gトレンチ部分

Gトレンチ

第86次調査の4トレンチと8トレンチで検出した流路SD010の、中間部での検出を目的とした調査区である。第86次6トレンチの西辺南寄りから既存用水路東の舗装路まで拡張し、東西9.5m、幅5mを設定した。2段の水田（H=109.8m・109.3m）にまたがる。

基本層序は耕土、褐色粘質土・明灰色細砂・黄灰色砂質土など（床土）、灰色粘質土で、これを除去するとトレンチ東寄りは礫混り灰白色砂（遺物包含層）、西寄り6mは流路堆積となる。床土中では、3時期以上の古い水田畦畔も観察される。

流路SD010　流路の堆積は大きく4時期に分けられる。最末期の東岸は、トレンチ西端に近く、礫の堆積で形成され（H=108.5m）、東にあふれている。流路中には暗灰色粘質土が堆積する。西岸はさらに西方であった。

後期流路は、東岸が暗灰色粘質土（H=108.6m）、西岸は前述の礫の堆積となる。流路底はH=108.1mで、深さは50cm程であった。流路中には灰白色砂、暗青灰色粘質土などが堆積し、奈良時代後半までの遺物を含む。

後期流路の東岸には木屑を含む暗褐色粘質土の前期流路の古い堆積が残っており、木簡1点が出土した。

初期の流路の東岸は、後期流路東岸の東約1mにあり、第86次6トレンチから続く小礫を含む灰色砂の遺構面（H=108.6m）が、急に落ち込んで青灰色粘土の平坦面（H=107.7～108.0m）が2mほどあり、さらに落ち込んで最深部（H=107.5m）となる。底は青灰色の岩盤である。最深部は幅1.5m程で、岩盤は西へ向かって再び高まっていく状況が観察された。堆積は、人頭大までの礫を含む暗灰色砂、暗灰色粗砂などである。初期流路は、北で西へ50度ほど振れており、第86次5・6トレンチで検出した5条の塀の振れ（北で西へ51～54度）を規制していたことがわかる。

Hトレンチ

第86次6トレンチの東辺北端を東へ拡張した調査区で、東で北へ振れる南北8m、東西13mを設定した。

基本層序は耕土、灰色土・黄灰色土（床土）、黄灰色粘質土で、これを除去した暗褐色土面（H=109.4m）で遺構検出を行った。検出遺構は掘立柱塀2条である。

掘立柱塀SA016　第86次調査で検出した東西塀の東延長部分で、柱穴7基を新たに検出し、10間以上の塀となった。柱間寸法は7尺等間で、第86次6トレンチ内で南北塀SA012と取りつく部分のみ8尺＋6尺と柱間を調整していることが確認された。振れは東で北へ53度を測る。

掘立柱塀SA047　トレンチ東端寄りで柱穴2基を検出した。掘形は1m角ほどの隅丸方形、柱間寸法は6尺で、SA016の西から第9柱に南から取りつく可能性がある。SA012との間隔は17mほどである。

Iトレンチ

第86次調査8トレンチのサブトレンチの南に接する、南北5.5m、東西31mの調査区である。基本層序は、暗褐色砂質土（耕土）、暗灰褐色砂質土・褐色砂質土（床土）、褐灰色粘質土（遺物包含層）で、これを除去した褐灰色砂質土面で遺構検出を行った。水田面高はH=108.1m、遺構面高は107.4～107.7mで、この遺構面は、トレンチ東から12m付近まで続き、以西は平安時代まで遡る水田となる。この下層で、トレンチ東から18mに流路SD010の東岸を検出した。SD010の調査は、第86次トレンチの埋土が崩落する恐れがあるため、幅2mの未発掘部分を残し、トレンチ南半の幅4.5mとした。

掘立柱塀SA048　褐灰色砂質土遺構面の西端近くで検出した柱穴2基で、第86次の1基と合せて2間の南北塀と考える。柱間寸法は6尺、北で西へ50度の振れを測る。

掘立柱塀SA049　SA048の東3mで検出した柱穴5基で、4間の南北塀と考える。柱間寸法は5尺。第86次調査の南北塀SA033の南にあるが、振れも柱間も合わず、別遺構と看做さざるをえない。

掘立柱建物SB034　第86次検出の東西塀SA034は、柱穴6基を新たに検出し、SA034を北妻とする桁行3間、梁間2間の南北棟掘立柱建物となった。柱間寸法は桁行・梁間とも6尺で、北で西へ50度の振れを測る。

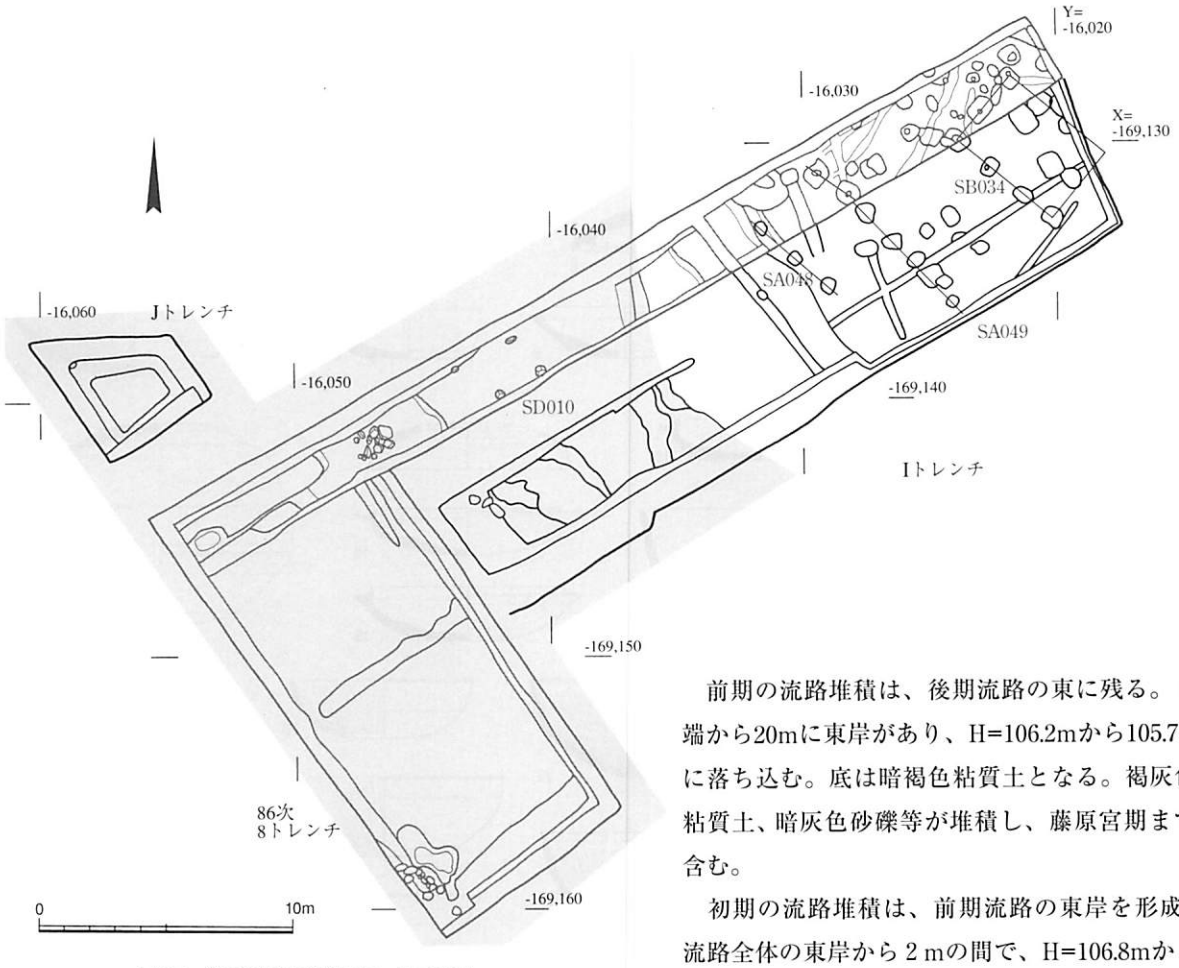


図60　第92次調査遺構図3　1：300

流路SD010　トレンチ東端から18mで、暗青灰色粘土からなる流路東岸（H=106.8m）を検出した。流路堆積は、大きく4時期に分けられる。最末期の流路は東岸から6m付近に中州をもつ浅い流れとなり、中州の東では暗青灰色砂質土、暗灰褐色砂質土、西では暗褐灰色粘質土、暗灰褐色粘質土が堆積する。流路底は西H=106.1m、東106.3mである。平安時代前期の遺物を含む。

後期の流路は、主にトレンチ西寄りにある。トレンチ東端から23m付近が東岸で、H=106.2mから105.3mまで急に落ち込み、幅1.5mほどの最深部を形成し、西へ向かって再び高まっていく状況である。流路堆積は長径70cmまでの礫を多数含む褐色砂、暗灰色砂、灰白色砂である。藤原宮期から奈良時代の遺物を含む。

前期の流路堆積は、後期流路の東に残る。トレンチ東端から20mに東岸があり、H=106.2mから105.7mまで急激に落ち込む。底は暗褐色粘質土となる。褐灰色砂、褐色粘質土、暗灰色砂礫等が堆積し、藤原宮期までの遺物を含む。

初期の流路堆積は、前期流路の東岸を形成していて、流路全体の東岸から2mの間で、H=106.8mから105.8mまで下って底となる。淡褐色砂、黒灰色砂、暗褐色粘質土、暗灰色細砂が堆積し、7世紀前半の遺物を含む。流路外の堆積は上から暗青灰色粘土、礫混り青灰色砂質土、礫混り黒灰色砂質土、暗褐色粘質土の自然堆積があり、底は青白色の岩盤となる。

Jトレンチ

Iトレンチの北側水田（H=107.8m）に設定した、南北5.5m、東西5mの北で西へ振れる台形の調査区である。

耕土、床土を除去したH=107.3m以下は、トレンチ全体が流路SD010の堆積である。灰色砂混りの礫層面（H=106.2～106.0m）を確認したが、流路底まで達していない。なお第84次調査で検出した石組方形池SG30から延びる石組溝SD31は、このトレンチでも確認できない。SD31の東端はSD010で撹乱されているのだろう。

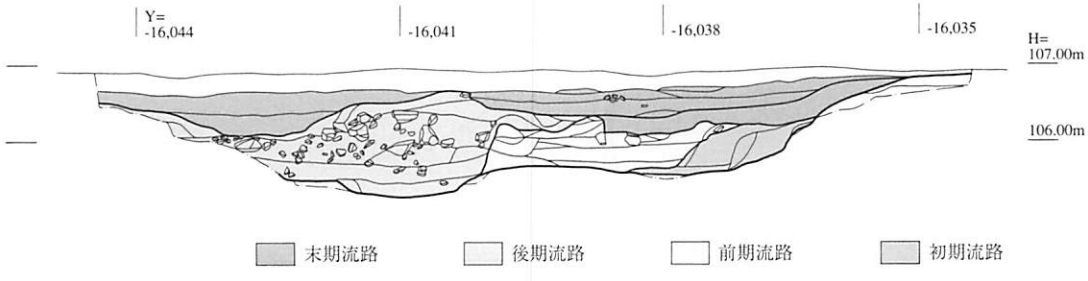


図63　流路SD010土層図　1：100　Iトレンチ部分

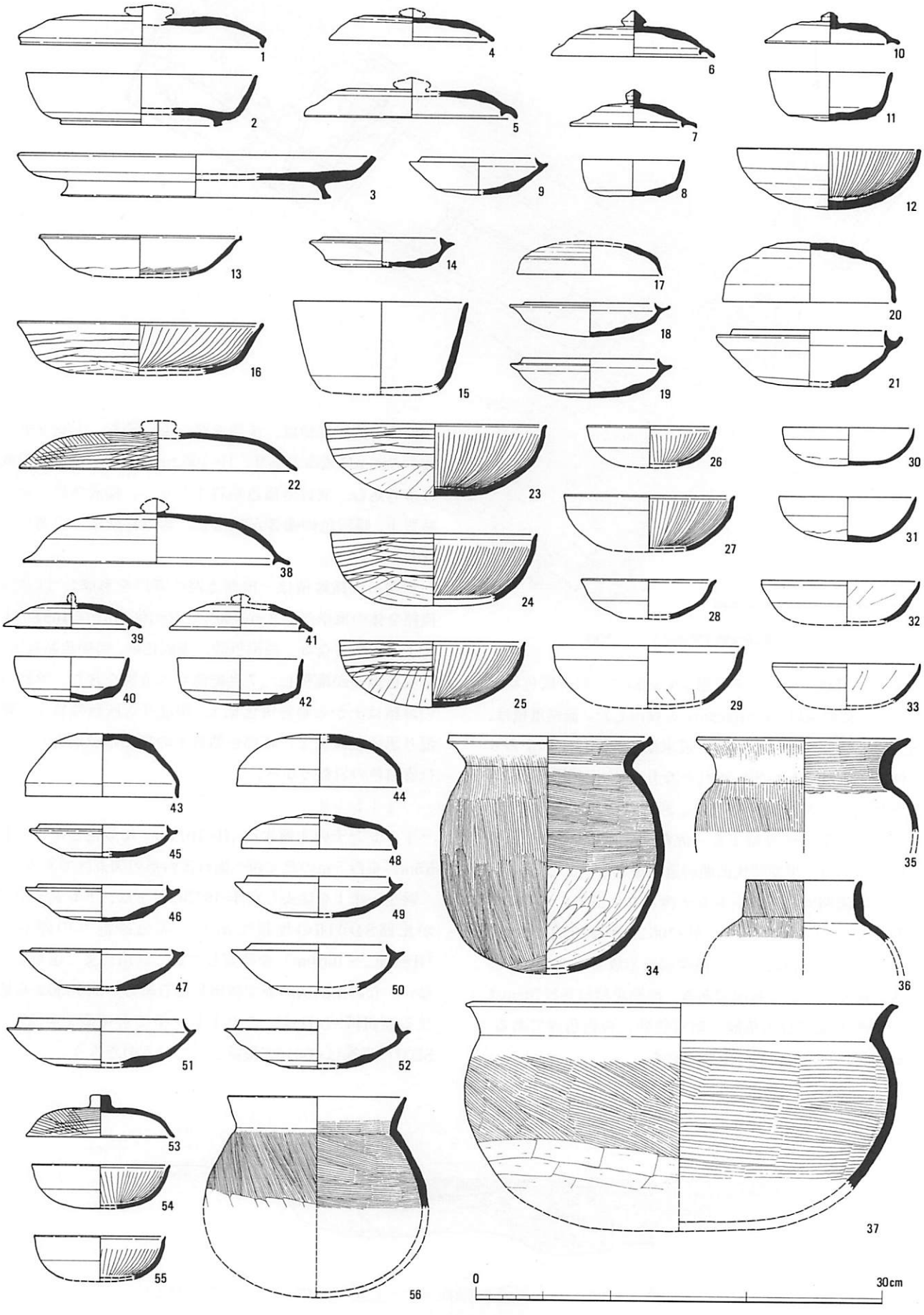


図64　流路SD010出土土器　1：4

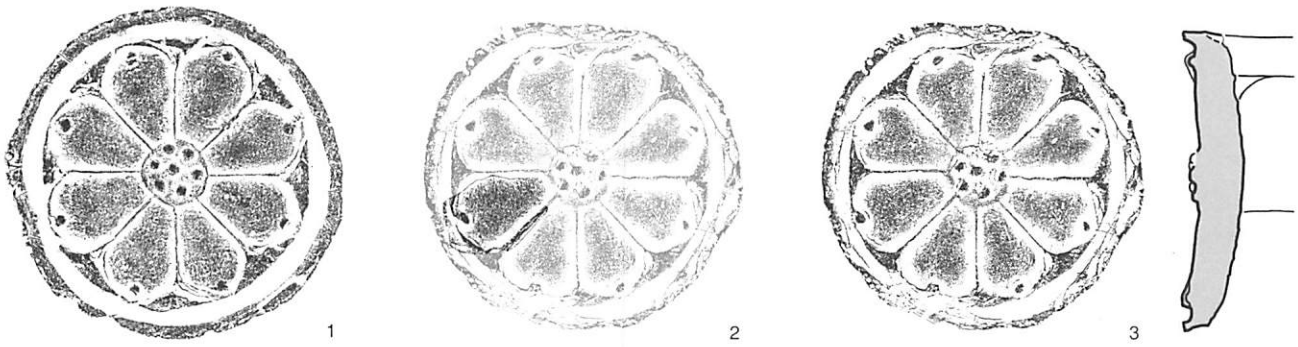


図65　第92次調査出土瓦および同笵瓦　1：4

2　遺　物

遺構面上の瓦礫層および、流路SD010の堆積中から多種多量の遺物が出土した。現在も整理作業が進行中であり、ここでは主要遺物の概要を記す。

木製品　曲物側板1点、曲物底板2点、斎串1点などが出土した。またGトレンチの流路SD010の初期の堆積から木簡1点が出土した。112×20×8㎜の上端両側面に切り欠きをもつ荷札の形で、片面に「煮物」と記す。

金属製品　Iトレンチの流路SD010上層から銅管1点が出土した。長さ63㎜で両端は破断している。外径5㎜で、厚さ0.8㎜の銅板を丸めて鑞付けしている。

工房関連遺物　フイゴ羽口片、熔銅、鉱滓、坩堝が出土し、飛鳥池工房との関連が注目される。　（長尾　充）

土器・土製品　縄文時代から鎌倉時代のものがあるが7世紀代が主体を占める。流路SD010、中でも第86次調査8トレンチに南接したIトレンチの流路出土土器は良好な資料で、7世紀から平安時代にいたる比較的多量の土師器・須恵器があり、少量の縄文中期～後期の土器が含まれる。7世紀の土器には漆壺、漆パレット、トリベに使用した土器があり、口径4cmほどの小型の坩堝などもあって、西方の飛鳥池工房との関係を伺わせる。

ここでは、その存続期間と性格、周辺の遺跡との関係を考える上でも重要なSD010出土土器の概要を記す。

図64にはIトレンチの資料を示し、一連の遺構であることから、Gトレンチ（10～12）、第86次調査8トレンチの土器（1～8）を補足した。流路堆積は4段階に大別され、初期流路（47～51）、前期流路（22～46）、後期流路（16～21）、末期流路（13～15）に配列したが、それぞれの大勢が存続と埋没の時期を示すわけではない。

1～8は第86次調査8トレンチの須恵器で、7世紀中頃～奈良時代初めのものがある。流路の存続期間の大略の幅を示すために抽出した。8は口径7.4cm。杯Gのなかで最も小さく、口径8.4cmの杯H（9）とともに水落遺跡出土例に類似する。10～12はGトレンチの須恵器で飛鳥Ⅱに属すであろう。12は底部をロクロケズリした赤焼きの須恵器であるが、内面の直放射・螺旋暗文と形態が土師器杯Cの模倣であることを示す珍しい資料。

13は平安時代初めの土師器杯A。流路の最終段階の年代の一端を示す。15は飛鳥Ⅳ～Ⅴの須恵器椀A。16は平城宮土器編年のⅢ段階に属す土師器杯A。後期流路の存続年代の一端が奈良時代前半～中頃にあることを示す。17～19は小型で浅い須恵器杯H。20・21は口径12.5cmで深く、天井部底部外面はヘラ切りのまま。飛鳥Iに属す。

前期流路の土師器は杯C（23～26）、杯G（28～33）など7世紀初め～中頃の飛鳥Ⅰ～Ⅱに属すものが多く、甕A（34～36）、甕B、甕C、竈、甑、鍋（37）など多様な煮沸具がある。22はより新しい可能性がある土師器蓋。須恵器も飛鳥Ⅰ～Ⅱのものが多く、杯Hには最大径14cmの51のほか、45～47など小型で立ち上がりの小さいものが含まれる。38は須恵器台付椀の蓋。口径18.2cm。

初期流路の須恵器杯H（52）は飛鳥Iでも古い段階に属し、底部外周をヘラケズリする。土師器杯C（54・55）は径高指数35～32で飛鳥Ⅰ～Ⅱ。土師器杯B蓋（53）は大官大寺下層資料に類例があり、飛鳥Ⅲに属す可能性がある。　（西口壽生）

瓦　丸瓦、平瓦、軒丸瓦、鴟尾、土管などが出土した。全体に量は少なく、丸瓦は576点・64.9kg、平瓦は1828点・177.3kgが出土した。軒瓦は、飛鳥寺創建期の軒丸瓦が8点出土した。その内訳は、Ⅰ型式3点（a：2点）、Ⅲ型式2点、Ⅴ型式2点、新型式1点。新型式（図65-2）は、斑鳩寺（法隆寺4型式A種、図65-1）や四天王寺（図65-3）と同笵で、飛鳥寺では初出の素弁八弁蓮華紋軒丸瓦。斑鳩寺では若草伽藍金堂の創建軒丸瓦の一つとして、伽藍西方の北垣内瓦窯で生産されたと推定される。そののち、瓦笵が楠葉平野山窯（大阪府枚方市・京都府八幡市）に移り、四天王寺用に生産された。今回出土したものは、瓦笵の傷みや胎土、焼成からみて楠葉平野山窯の産品に間違いない。同窯では、奥山廃寺の角端点珠素弁八弁蓮華紋軒丸瓦の一つが生産されたと目されていたが、飛鳥寺に瓦を供給した時期とその背景に興味がもたれる。　（花谷　浩）

3　第91-6次調査

第92次調査のB～Eトレンチを設定した水田で、水路付替工事に伴うバイパス水路の施工に際して、工事立会調査を行った。バイパス水路はボックス・カルバートの埋設による。南区は第92次調査Bトレンチの西約6mで、幅3m、延長20m、南半は1段上の水田（H=112.9m）に及ぶ。北区は第92次調査Eトレンチの北東隅にかかる幅3m、延長15mである。

なおBトレンチの南北2箇所でも、工事試掘により、断面観察を行ったが、掘削深度が浅く、Bトレンチの知見を追認するにとどまった。

Bトレンチ西側の状況　南区では、トレンチ北端でH=111.0m、南端で111.8mまで掘削した。北端での層序は、耕土、暗青褐色粘土（床土）で、H=111.5m以下が流路堆積となり、暗灰色粘質土、灰色粗砂、灰色粘土、灰色砂、灰色粘質土の北東下がりの堆積が観察された。遺物の出土は少なく、流路としては、最終段階の堆積と考えられる。流路底には達していないが、トレンチ西寄りで検出した青灰色粘土（H=111.0～111.2m）は、流路以前の自然堆積の可能性がある。灰色砂から7世紀代の平瓦が出土した。

Eトレンチ北側の状況　北区は東寄りの大半が既存用水路工事時に撹乱されている。トレンチ西辺北端で、西側丘陵の斜面地山を確認した。丘陵に沿って2条の素掘溝を検出している。

北＝上手の溝は、深さ70cmで、丘陵の岩盤をほぼ垂直に掘削している。トレンチ壁面に対して鋭角に交わっており、幅は確定しない。南＝下手の溝はやや浅く、深さ25cmで、断面はU字形で、幅はやはり確定できない。いずれも水田の開墾に伴う溝である可能性が高い。

Eトレンチ下層の状況　Eトレンチでは、緩斜面の遺構面上に数条の溝を検出しているが、この遺構面は、淡黄褐色砂質土、茶褐色粘質土などからなる厚さ70cmほどの整地土上面であることが確認された。これはCトレンチの遺構面から連続するものと推定される。

整地土下のH=110.5m以下は青灰色粘質土の流路堆積となる。110.2mまで掘削したが、流路底の地山岩盤には達しなかった。岩盤は谷底に向かって急激に落ち込んでいるようである。

4　まとめ

万葉ミュージアムの建設を契機として着手した、この地域の調査は、今年度をもって一旦終結する。調査対象地に対して、発掘面積は些少であるが、2箇年の調査の成果と課題を概括しておく。

遺構面の形成　調査地は谷筋で、その両側の丘陵は風化の進んだ花崗岩である。谷内の遺構面は、谷川による堆積の上に、一部、丘陵を削平・整地して形成されている。谷は東丘陵裾から緩傾斜の平地となり、飛鳥池寄りの西側丘陵は、谷川の浸食により、急な傾斜である。

谷の利用状況　流路SD010の堆積中には、縄文時代の遺物もあり、この谷筋が古くから利用されたことを示す。整地を伴う積極的な利用は、7世紀中頃には始まっていたようだ。傾斜の緩い東側を主に利用し、谷川はSD010として、西寄りに管理した。流路に沿った5時期の塀は、流路と活動空間を明確に区画する意図が伺われる。

谷内の活動空間の性格は未だ不明である。建物SB004は西庇付の比較的規模の大きい建物であった。SA046はその北の区画施設となる可能性がある。また、流路に平行するSA012から、東へ折れるSA016は、東側丘陵裾まで延びるようである。SA046とSA016の存在は谷の上流から下流に、複数の区画が設定されたことを示している。

また調査地南寄りのCトレンチで建物遺構が検出され、上流では谷の西側にも、施設を伴う活動空間が存在したことがわかった。

出土遺物では、少量ながら溶銅、鉱滓、坩堝などの工房関連遺物があり、丘陵を挟んで西側に隣接する、飛鳥池工房との関連が注目される。一方、やはり出土量は多くないが、飛鳥寺創建期の瓦が出土し、飛鳥寺との関連にも注意を要する。この地域での活動が、飛鳥池工房に関わるのか、飛鳥寺に関わるのかは、遺構・遺物からは判断しきれない状況である。質的な差はあるが、飛鳥池遺跡北地区の帰属関係と同様の問題を持つ地域といえる。

流路SD010の様相　調査地上流部のBトレンチと第91-6次南区は全体が流路堆積、D・Eトレンチに遺構面があり、流路SD010はD・Eトレンチ間を流れていたと想定される。Dトレンチの掘立柱塀SA042・043が、当時のSD010の方向を示しているようである。中流のGトレンチでは、SD010の東岸から最深部までを確認した。

図66　掘立柱建物SB004　南東から

図67　流路SD010　Ⅰトレンチ南西から

最深部は幅1.5mで、東で1段高いテラス状の流路底を含めて3m程である。西岸は未確認だが、現地形から見て流路幅は最大6～7mであろう。満水時の水深は0.8m程になるが、通常の水量では、浅い流れであろう。下流部のⅠトレンチでは東岸から最深部までを確認した。流路は徐々に西へ移り、現状用水路まで25m程の範囲で推移した。谷から出た流路は、飛鳥寺寺域東辺に沿って北流するのは間違いない。

流路SD010の性格　流路SD010は、谷筋の積極的な利用にあたり、既存の谷川を整理・改修したものと位置づけられる。SD010の成立は7世紀中頃と推定するが、西岸を強く浸食し、平安時代後期には、現在の用水路の位置まで西遷し、当初の流路部分は水田化していた。

さて、前年度の報告では、SD010と書紀にいう「狂心渠」（たぶれごころのみぞ）との関連について言及した。SD010がBトレンチをさらに遡ることは明らかであるが、上流部では人為的な開削の痕跡を確認するにはいたらなかった。また「石上山の石」に相当する天理産砂岩は、今回の調査でも出土していない。「狂心渠」か否かは、SD010がこの谷から出た、さらに下流部の様相が明かになるまで、判断を差し控えておきたい。

（長尾　充・土器：西口・瓦：花谷）

コラム：あ　す　か　ふ　じ　わ　ら　④

表5　1998年度の記者発表

日　付	発　表　内　容	関連調査
1998.4.15.	飛鳥池遺跡検出の梵鐘鋳造遺構について	第87次
4.23.	飛鳥池遺跡　飛鳥藤原第87次調査 現地説明会4.26.　見学者890名	第87次
9.4.	飛鳥藤原第84次調査出土木簡について（その3）	第84次
9.29.	飛鳥池遺跡出土の金・銀 特別公開10.7.～10.30.　於・調査部	第87次
10.15.	飛鳥池遺跡　飛鳥藤原第93次調査 現地説明会10.18.　見学者600名	第93次
12.22.	飛鳥池瓦窯の発見とその意義	第93次
1999.1.19.	飛鳥池遺跡出土の富本銭 特別公開1.25.～2.10.　於・調査部　見学者9300名	第93次
3.11.	吉備池廃寺の発掘調査　南面・西面廻廊および中門推定地 現地説明会3.13.　見学者400名	第95次

◆記者発表の記録

本年度は、当調査部主催の報道記者発表が、計8回行われた。うち7回が飛鳥池遺跡の関連である。これで同遺跡の記者発表は、1997年の調査開始以来、通算13回となった。

現地説明会は、3回を開催して、見学者総数約1900名の盛況であった。

調査部の展示室では、飛鳥池遺跡出土の「金・銀」と「富本銭」の特別公開を行った。とりわけ、富本銭の展示期間の見学者は、一日平均700名を超え、13日間で通常入館者の5年分？を記録した。狭い基準資料展示室は大混雑。庶務室は問合せの電話への対応でおおわらわであった。　（N）

◆川原寺の調査―第91-7次

1　はじめに

本調査は、川原寺史跡指定地内における、電力・水道の共同溝敷設工事に伴う事前調査である。調査地は川原寺南側の県道多武峯・見瀬線で、工事の総延長は250mであるが、史跡指定地の西半にかかる約200mについて調査した。共同溝の埋設については、工事にあたって立会調査とし、竪坑設置箇所については、新たに掘削をうけるため発掘調査を実施した。

共同溝埋設部分については、既存の水道管埋設時に、路面下1.6mまで掘削を受けており、地山まで達していた。遺構は検出できず、遺物も出土しなかった。

当初計画の竪坑位置は、川原寺南面大垣北雨落溝の想定線上で、南門から西へ83mに位置する。南北３m、東西４mの調査区（東区）を設定して調査を行ったところ、後述するように石列と瓦敷きからなる、川原寺関連と考えられる遺構が検出されたため、竪坑の設置を中止し、遺構を現状保存することとなった。協議の上、代替地として南西へ３m移動した地点に南北３m、東西４mの調査区（西区）を設定して調査を行った。調査期間は東区が1998年７月１日～３日、西区が同９日～10日、共同溝敷設工事立会は７月２日～29日まで行った。

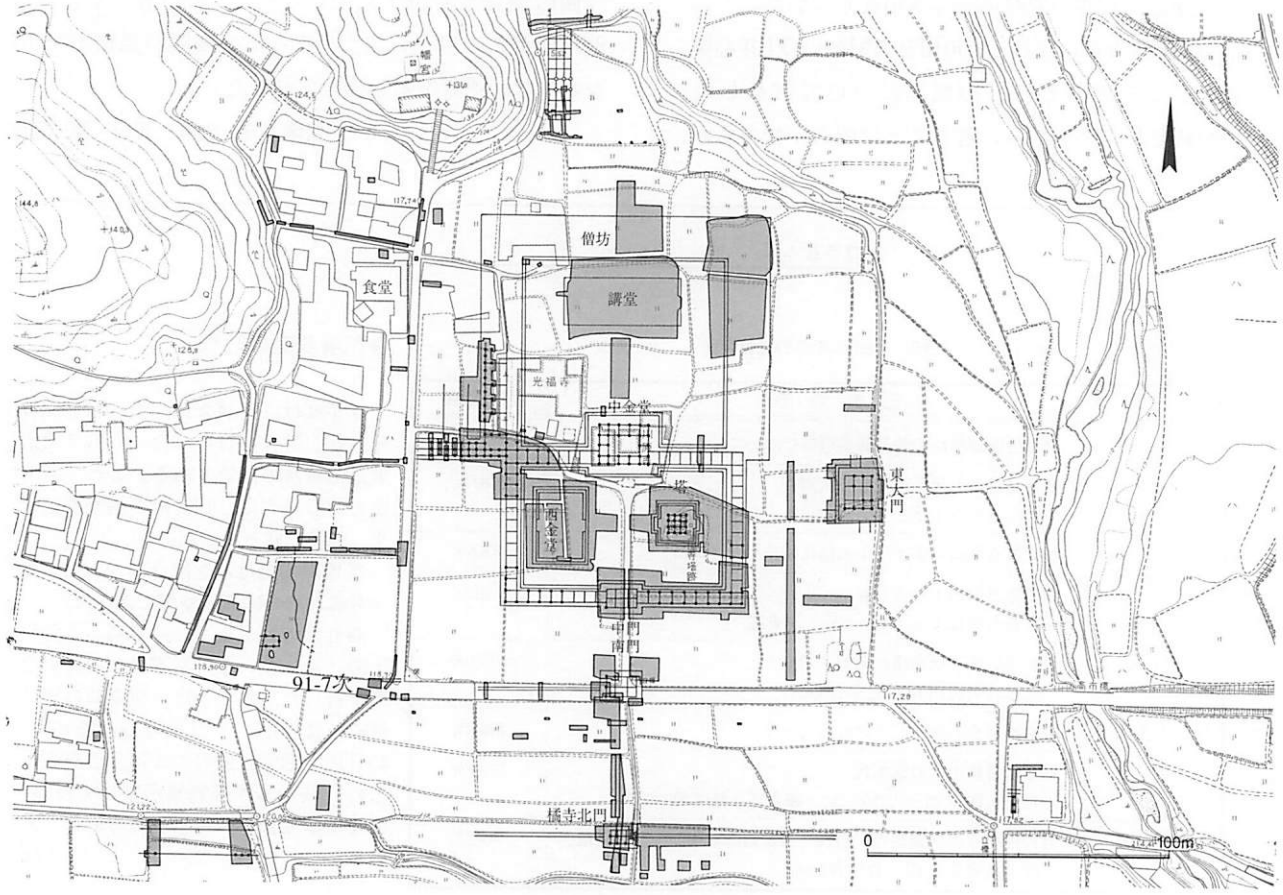


図68　第91-7次調査位置図　１：2500

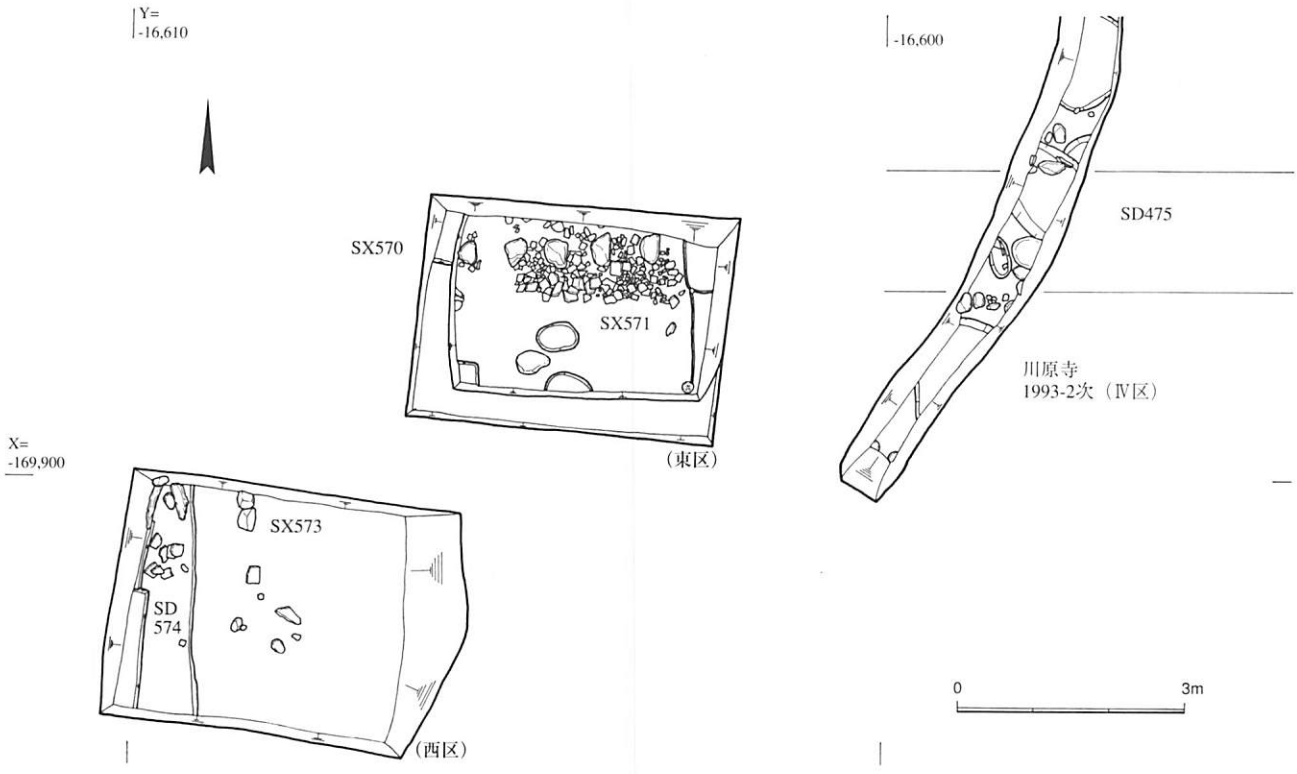


図69　第91-7次調査遺構図　1：100

2　基本層序

アスファルト舗装、道路盛土の下は、旧水田耕土、茶灰色砂質土と暗灰色粘質土（遺物包含層）で、これを除去した青灰色砂質土上面で遺構検出を行った。遺構面高は、東区がH=117.0m、西区が116.9mである。東区、西区ともに遺物包含層中には中世のものと見られる暗渠があり、多量の瓦が詰められていた。

3　検出遺構

SX570　東区北寄りで検出した東西方向の石列。50～70cm間隔で5石が並ぶ。石は長径30～40cmで、長径方向を南北に揃えて、上面を平坦に据える。据付掘形を覆うように瓦敷SX571がある。1993-2次調査Ⅳ区で検出した南面大垣北雨落溝SD475の延長上にあたる。SD475は南側石の残存高がH=117.4m、北側石が117.2m、溝底が117.1mで、SX570の上面117.0mは、SD475の底に近い。

SX571　石列SX570の周囲に敷き詰められた瓦敷き。北側はトレンチ北方へ30cm以上続くが、南側はSX570の南約40cmまで広がって止まる。

SX573　西区北端西寄りで検出した南北方向の石列。長径20～30cmで、2石を検出し、トレンチ北に1石が続くことを確認した。

SD574　西区西端の南北方向の素掘溝。東肩は石列SX573の西60cmにあり、西に向かって落ち込んでおり、西肩はトレンチの西方にあって規模は不明。

4　出土遺物

土器は小片が数点出土しただけである。瓦は包含層中、特に中世の暗渠から多く出土した。丸瓦506点、76.3kg、平瓦1,329点、198.8kgである。軒丸瓦は601A型式2点、601B型式1点、601C型式1点、軒平瓦は751型式1点、重弧1点、651B型式3点、651D型式3点、651型式2点が出土した。なお、東区の瓦敷SX571の瓦は取り上げずに埋め戻した。そのほか方形三尊塼仏1点が出土している。

5　まとめ

今回の調査で検出した遺構のうち、東区の石列SX570と瓦敷SX571について考察しておく。この延長上の東3.5mの位置に1993-2次調査Ⅳ区があって、ここでは石組溝SD475を検出し、川原寺南面大垣の北雨落溝と推定している（『藤原概報25』102～106頁）。この石組溝は両側に花崗岩川原石を立てており、幅は側石内法で約1.5mある。石列SX570を東へ延長すると、石組溝の中心やや南寄りにあたり、瓦敷SX571の南端は、石組溝南側石よりも南に広がるようである。調査範囲の制約から、SX570とSX571の性格は明らかにできていないが、SD475からわずかな距離を隔てただけで、様相が異なっている。両調査区の間でSD475が北側に折れる可能性をも考慮すべきなのであろうか。今後の周辺の調査成果に期待したい。

（鈴木恵介）

コラム：あ す か ふ じ わ ら ⑤

◆飛鳥地域の再開発直前の土器

1990年、雷丘の東方150mで、東西幅110mを越える沼状地形とそれを石組暗渠を設置しながら埋め立てた大規模な整地の跡が発見された（山田道第2・3次調査『藤原概報21』1991）。

近年、奈良時代の小治田宮の発見を承け、推古朝の小墾田宮をも雷丘周辺に推定する説が提起され、この整地はその重要な根拠とされている。

図70の1～21は整地の西端、南北に整形された地山に沿って堆積した、整地以前の土層－黒褐色土層出土の土器である。土器は少量ではあるが、それでも飛鳥寺の造営が始まった588年以前に限定できる「飛鳥寺下層」資料が、『飛鳥寺発掘調査報告』（1958）所載の須恵器杯Hと蓋各1点の実測図であることからすれば、質量ともにそれを補うにたる内容をもつ。

「飛鳥寺下層」発見後、40数年を経て、豊浦寺下層、飛鳥寺西回廊基壇、飛鳥寺南方石敷広場下層など、遺跡変遷の理解と出土状況から年代を推定できる資料も、それぞれ数点ずつながら増えてきた。併せて飛鳥地域の再開発時の姿を探る手だてとしたい。

黒褐色土層の土器には、土師器杯G、杯H、甕、鍋、須恵器杯H、甕、壺等がある。しかし「飛鳥Ⅰ」を特徴づける金属器模倣の器種－土師器杯Cや須恵器杯G・杯Bは1片もない。その点で整地土の土器との違いは明確である。

土師器杯G（9～14）には多様な口縁端部のものがあり、土師器杯H（15・16）は底部のケズリが狭く、口縁部との間に鋭い稜が付かない。これらは古相の飛鳥Ⅰに受け継がれる。土師器甕（17～21）は、旧小墾田宮推定地SD50最下層資料に似た直立気味の口縁部をもっている。

須恵器杯H（1～8）は立ち上がりの形状は多様ながら口径（蓋あるいは身の蓋があたる部分の直径）14cm前後で底部ヘラケズリが大半を占める。口径14.5cm前後の飛鳥寺下層（22・23：1983年再測）より新相を示す。

この時期、須恵器杯は口径、立ち上がりの縮小とヘラケズリの省略の方向に変化する。口径12.5cmの24、25は小さな立ち上がりで底部ヘラケズリ。それぞれ飛鳥寺の西回廊基壇、南石敷広場下層から出土した（『藤原概報13・15』）。飛鳥寺回廊の完成は592年。形態手法の上でも飛鳥Ⅰに共通点が多い。豊浦寺講堂下層の掘立柱建物以前の土層から出土した須恵器杯H（27）は口径14cmで底部ナデ調整。建物が豊浦宮と関わるならば、西暦593年以前。土師器杯C（28）は建物廃絶後で講堂以前の土器。須恵器壺（26）、土師器杯H（29）も講堂以前（『藤原概報16』）。

ともに592、593年以前と推定される飛鳥寺西回廊の須恵器杯H（25）と、豊浦寺下層の27との違いは明確である。どちらがどれだけ、その年代に近いのか。そして、その向こうに「黒褐色土層」の土器、「飛鳥寺下層」がある。上層・埋土資料が「飛鳥Ⅰ」の標式資料となっている旧小墾田宮推定地SD50の評価を含めて検討を続けたい。（西口壽生）

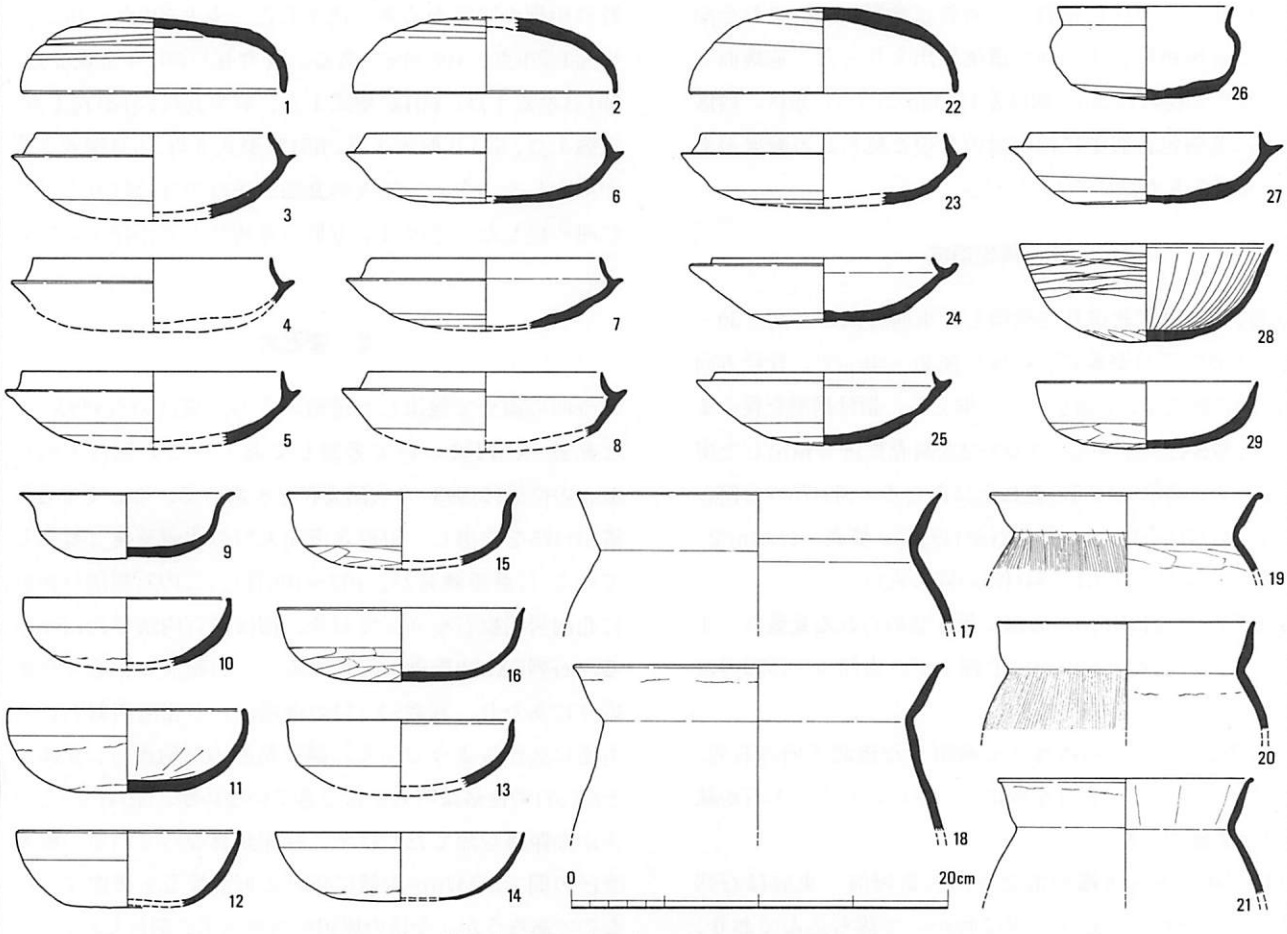


図70　山田道第3次調査出土土器（付　飛鳥寺下層・豊浦寺下層）　1：4

◆吉備池廃寺の調査—第95次

1　調査の経緯と概要

吉備池廃寺は桜井市吉備に所在する溜め池「吉備池」の護岸工事計画に伴う調査で発見された飛鳥時代の寺院跡である。この調査は遺跡保存の資料を得る目的で桜井市教育委員会と共同で行っている調査の３回目である。

吉備池の南東隅と南辺には２つの大きな土壇があり、主に東南部で瓦が採集されることから、瓦窯説と寺院跡説とがあった。南東部の護岸の取り扱いを探るために、1997年１月から東の土壇の発掘調査（第81-14次）が計画され、それに先立つ地中レーダー・磁気探査では、瓦窯ではなく巨大な基壇らしい反応があった。

発掘調査の結果は探査成果を裏づけるもので、東の土壇は東西37m、南北約28mの掘込地業の上に、版築土を積んだ高さ２m以上の巨大な基壇であって、南面する金堂跡と判断した。出土した軒瓦が西暦641年に造営が開始された山田寺所用瓦の祖型にあたり、基壇および想定される伽藍の規模が通常の飛鳥時代寺院の規模をはるかに越える巨大なものであることなどから、この寺院跡は西暦639年に舒明天皇が発願した「百済大寺」跡である可能性が高いと考えられた。

1998年１月からの西の土壇の調査（第89次）では、それが一辺30m近い方形で、高さ2.1m以上の基壇であり、中央部に南北８m、東西６m、深さ0.4mの巨大な抜取穴があることから、塔跡と判断した。ここでは掘込地業はなく、旧地表面から版築土を積み上げて造られていた。基壇規模の大きさからも「九重塔」である可能性が高く、寺院跡が「百済大寺」である可能性はいっそう高まった。

また、塔基壇南端の南方約30mに幅約６mの回廊があることを確認した結果、吉備池廃寺の伽藍は、東に金堂、西に塔があり、回廊がそれらを取り囲む「法隆寺式伽藍配置」であって、両基壇間の中央部南方に中門が開くものと想定された。中門想定位置の水田畦畔が南に張り出してみえることもその推定を支持していると考えられた。

1998年10月～12月、桜井市教育委員会は吉備池の東北部で宅地造成に伴う発掘調査を行って、大規模な東西棟掘立柱建物を検出し、中枢伽藍との位置関係から僧房の一部と推定した。基壇外装材がみられず、出土軒瓦が少ないこと、回廊が痕跡的であることなどを理由に、早くも提出された吉備池廃寺未完成説を否定する重要な発見であった。

これらの成果をうけて、今年度の調査は伽藍の規模と構造を把握するために、(1) 南面回廊の中央に想定される中門跡の確認を目的として、その西半分と回廊の一部が収まるであろう水田（小字カムリ石）と、(2) 西面回廊あるいは寺地の西限を探る目的で、塔の西の水田３枚（小字辻カマチ）に調査区を設けることにした。調査の進行に伴い、(3) 回廊南西隅想定位置にも小規模な調査区を設定した。調査面積は合計約720㎡。

結果、(1) では南面回廊を長さ17m分検出し、それが金堂と塔の中軸線を越えて東に延びていることから、そこには中門が存在しないことが判明した。(2) では南面回廊北雨落溝の抜取溝と類似した溝を痕跡的ながら確認し、塔基壇西端から23mに、南面回廊と同規模で西面回廊が想定できた。また、西面回廊の外に北東～南西へ延びる暗渠SD210を発見し、少なくとも塔基壇から西50mまでは寺地に含まれることが明らかになった。しかし、回廊外側雨落溝の南西隅部に設けた (3) では明確な遺構は確認されず、回廊規模等についても、なお調査検討が必要である。調査は1999年１月７日に開始し、４月22日に終了した。

2　検出遺構

以下では、便宜的に (1) を南１区、(2) を東から西２～４区、(3) を南西区と呼称し、検出した遺構を調査区ごとに概述する。

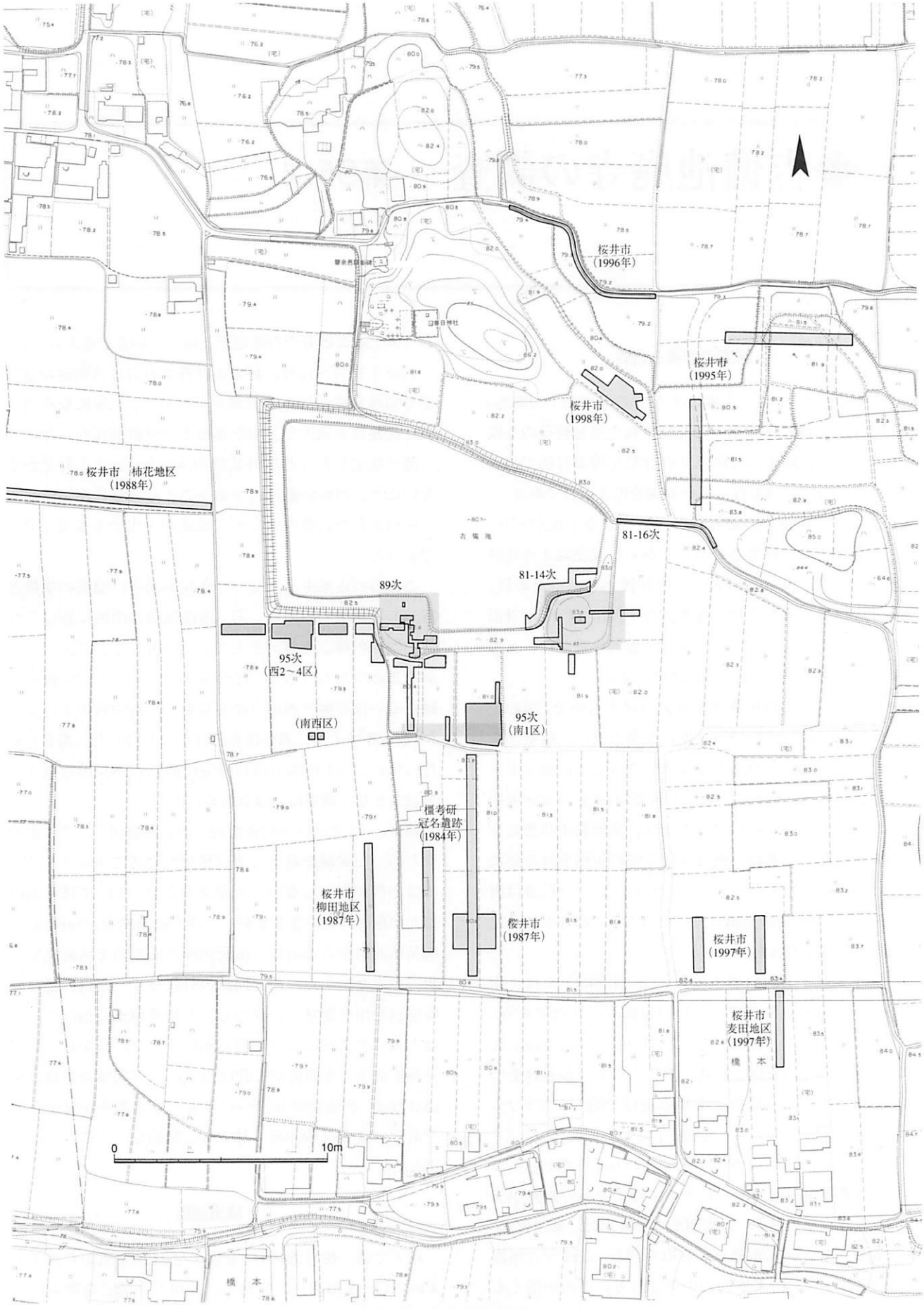


図71　第95次調査位置図　1：2500

南１区

吉備池廃寺に関連する遺構として、南面回廊SC160とその足場穴列SA181・182などがある（図72・73）。

南面回廊SC160　第89次調査の東延長上で、長さ17m分を検出した。南雨落溝にあたる石組溝SD161、北雨落溝の抜取溝SD162、その南岸の黄色粘土の帯SX183、回廊北側柱礎石抜取穴SX185とからなる。

石組溝SD161　幅約１m、深さ0.4mの掘形溝を掘り、その両側に25～50cm大の自然石１石を立て並べている。幅35～45cm、深さ30cm。検出した17m分で西方が約22cm低い。流水による堆積土はなく側石の上まで均一な粘質土で丁寧に埋め立てられている。

抜取溝SD162　幅1.5m、深さ15cmの浅い素掘溝で、底には抜き取られた石の痕跡が点々とみえる。

この溝の南岸にある黄色粘土の帯SX183は、第89次調査区でも確認され、抜取溝よりも古い造作で、基壇縁石の掘形か抜取りの可能性がある。その場合、石組溝SD161の内側は後述するSD180で流されていて確認できないが、基壇の南縁石は石組溝北側石の内側に想定され、回廊基壇幅は約5.6mと推計される。

回廊基壇上は、回廊の南側柱列が東西溝SD180で壊されている上に、基壇土に相当する土はほとんど残されていない。その上面で北側柱列の礎石抜取穴に関わるとみられる土質の違い（SX185）を６箇所確認した。桁行柱間は約３mに復元されるが、SX185は極めて痕跡的であって、その真偽を含めて、なお検証が必要である。

南面回廊のこうした状況は、東西溝SD180の存在を除いて第89次調査での所見と同じで、回廊基壇が大きく削平されていることを伺わせるが、それが塔の真南から塔－金堂の中軸線を越えたところまでの長さ48mについてはほぼ真東西に、一直線に延びていることが判明した。

掘立柱塀SA181・SA182　抜取溝SD162の下で検出した塀SA182は一辺0.3～0.7mの不整形な掘形で、径15cmの柱痕跡が残る。柱間は約2.1m。抜取溝より古く、柱痕跡に基壇土起源の黄色粘土が入る。石組溝SD161の南にあるSA181は石組溝の掘形よりも古い柱穴で、柱間、掘形の規模などもSA182に似ている。

SA181とSA182とは柱位置が微妙にずれており、両者を一体で先行する建物とみることは難しく、ともに回廊造営時の足場穴であろう。回廊が未完成であったとする

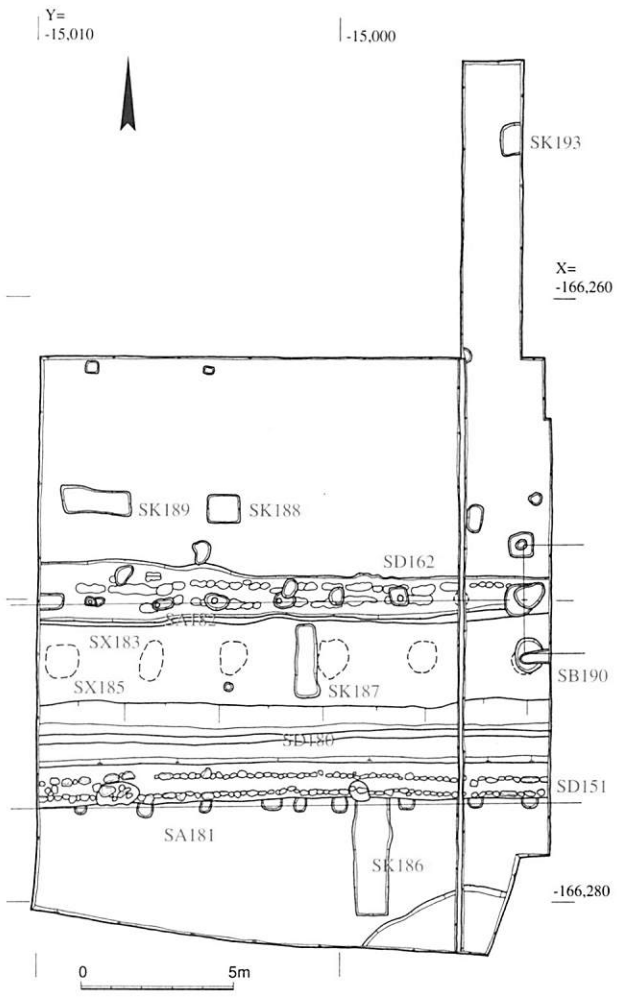


図72　第95次調査南１区遺構図　１：250

議論が成立しないことを示す重要な知見である。

土坑SK193　一辺1.2m、深さ0.1mの浅い土坑で、比較的多くの瓦類が出土した。瓦廃棄に関わるのであろう。

吉備池廃寺廃絶後の遺構には、掘立柱建物SB190、東西溝SD180、土坑SK187～189といくつかの柱穴がある。また、寺造営以前の遺構に南北土坑SK186がある。

掘立柱建物SB190　調査区東端で検出した一辺1.0m、深さ0.5mの柱穴３個で、いずれも柱掘形に回廊基壇土が起源と思われる黄色粘土塊が入り、中央の柱穴は抜取溝よりも新しい。柱間は2.1m等間に復元でき、東西棟建物の西妻柱列と思われる。

東西溝SD180　幅３m、深さ0.8mの素掘溝。底中央部には細い砂溝がある。北壁沿いの堆積土には黄色粘土が混り、上は黄色粘土で埋め立てる（図73）。堆積土からは比較的多くの吉備池廃寺の瓦類と飛鳥Ⅳ～Ⅴの土師器甕・杯、馬骨、木製品などが出土した。位置が推定藤原京三条大路に近く、その北側溝の可能性があるが、規模の大きさと西方で検出されていない点に疑問が残る。

土坑SK187～189　大きさと形状と配置に規格性があり、小礫の多い埋土が共通する。SK189には藤原宮期の土師器杯Ａ等が少量含まれ、当該時期の一連の遺構であ

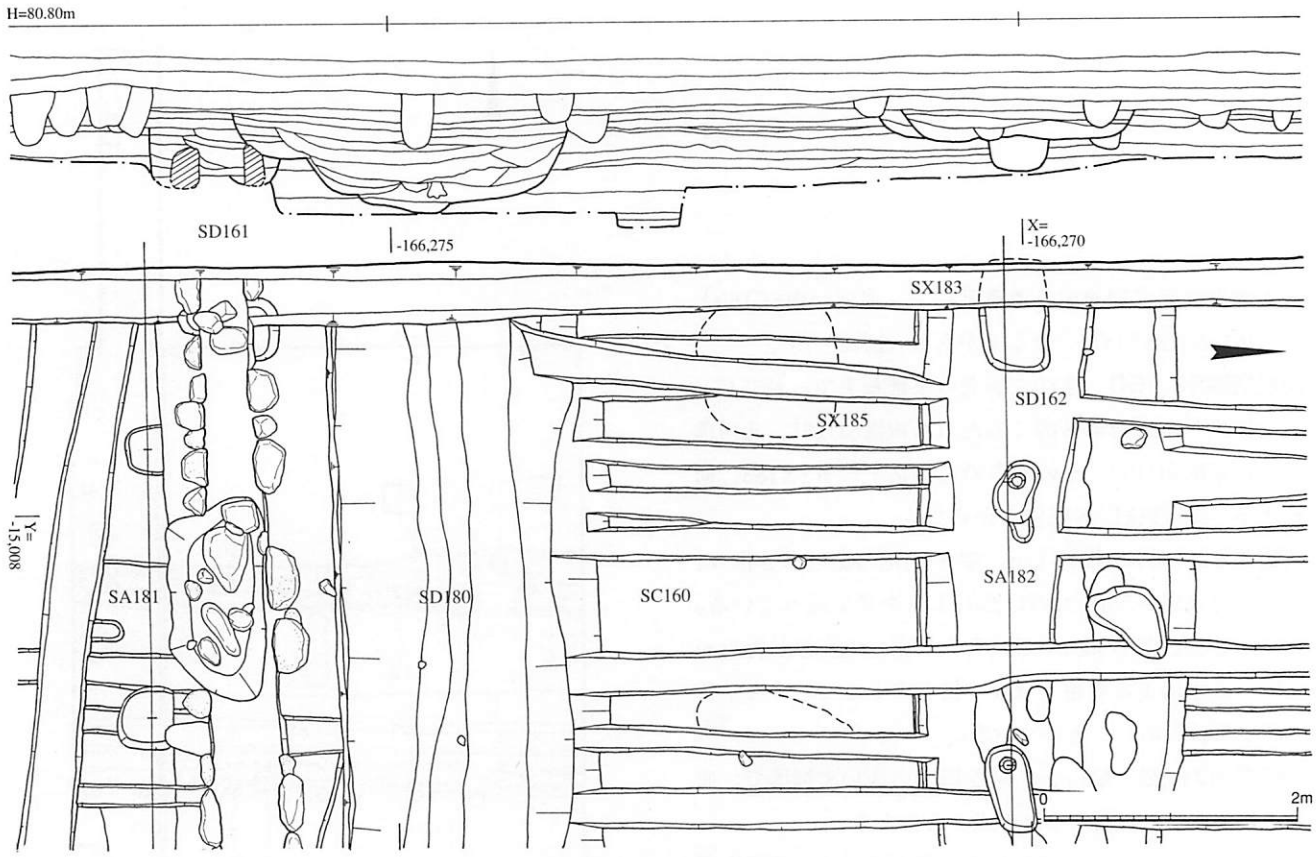


図73　南面回廊SC160土層図・平面図　1：60

ろうが、性格は明らかでない。

その他、柱穴には柱掘形あるいは柱痕跡に黄色粘土が入る浅いものと、埋土が灰色粘土で深いものがある。前者は吉備池廃寺廃絶後の柱穴で、後者は寺以前の柱穴の可能性がある。いずれも建物にまとまらない。

土坑SK186　幅1.2mの南北に長い土坑で、石組溝SD162より古く、埋土には古墳時代の土器細片が含まれるものの、時期・性格は決め難い。

西2～4区

塔の南北中軸線上にある第89次調査区の西に設定し、後に西3区について拡張した（図74）。

吉備池廃寺に関わる遺構には西面回廊SC200、その東側の南北塀SA204、回廊の下から西南方へ延びる溝SD210及びその関連遺構と、土坑SK216～218がある。

西面回廊SC200　西2区の西半部にある溝SD201、礎石抜取痕跡SX203、西2区と西3区との間の水田畦畔下で確認した石抜穴SX202が、回廊に関連する遺構と思われるが、いずれも極めて痕跡的であって別の地点での検証が必要である。

溝SD201　塔基壇の西約23mにあり、北端を柱穴SX205で、中央部を中世の南北小溝で壊されるが、両側底に灰色粘土が点々と続く。この所見は南面回廊の抜取溝SD162と類似しており、西面回廊東雨落溝の石組の抜取溝と考えた。

石抜取SX202　SD201の西約6mにある水田畦畔下で検出した直径20～30cmの石抜取穴4個で、後述する暗渠SD210の埋土である黄色粘土の上面に掘り込まれている。周辺には中世の小溝を除けば、他に遺構はなく、SD201との位置関係から西雨落溝に関わる遺構と考えた。

礎石抜取痕跡SX203　南面回廊のSX185と同様わずかな土質の違いとして認識できる程度で、ここでも回廊基壇は大きく削平を受けていると判断される。

塀SA204　回廊東雨落溝SD201の東2mにある2個の柱穴で柱間1.6m。北の穴が小さな長方形で浅く、南が方形でより深い違いはあるが、ともに掘形埋土に多量の黄色粘土を含む。中軸線をまたぐ位置にあるが性格不詳。

溝SD210　西面回廊下から西南西へ延びる黄色粘土の帯SX215を掘形とし、その底に造られた幅0.9m、深さ0.15mの素掘溝で断面が浅い箱形をなす。掘形は断面V字形で幅2m、深さ0.6m。中央に人頭大の河原石を積み上げ、それを黄色粘土や灰色粘土で厚く覆う。この構造は金堂の掘込地業の底の様子と類似しており、暗渠であった可能性が高い。SD210は西3区西端まで約22m分を検出し、その間で約35cm西方が低い。中枢伽藍内部の水を西面回廊の下をくぐり排水する目的であろう。

溝は近世井戸SE220以西では、上半部を素掘溝SD225に壊される。SD225は幅1.8m、深さ0.5mの断面箱形で砂質土が水平堆積し、SX215埋土のような河原石はない。

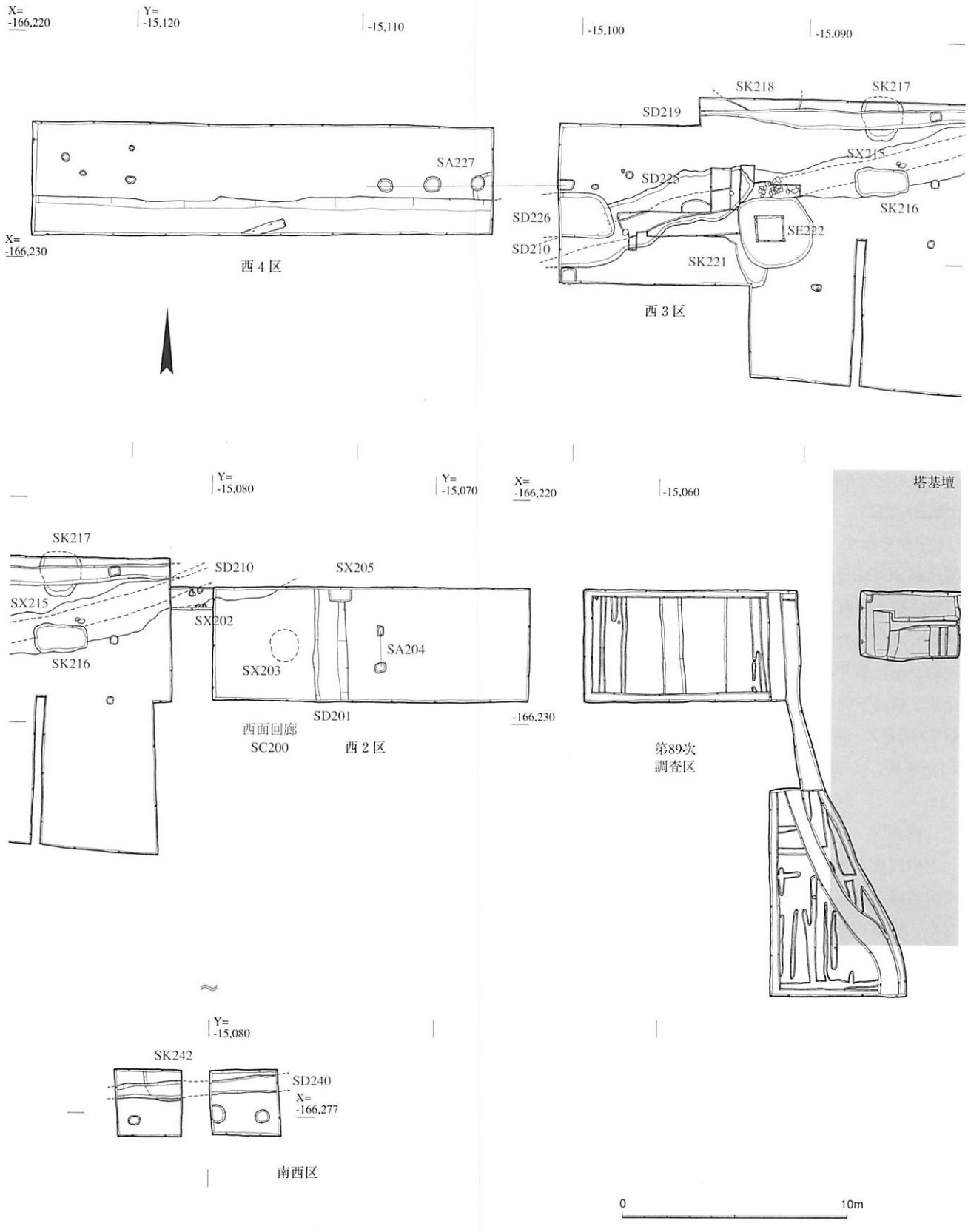


図74　第95次調査西2～4区・南西区遺構図　1：250

土坑SK216～218　SK216は溝SD210を埋立てた黄色粘土上に掘られた東西に長い長方形の土坑で東西両辺側が浅く中央部が深い。東西2.3m、南北1.2m、深さ1.0m。その北３mにあるSK217は径約２mの円形土坑で、西辺には幅５cm、長さ30cmの板２枚が打ち込まれている。両者は埋土が類似する上に、南北に並んでおり、礎石抜穴等の可能性を考慮して、調査区を拡張したが南には続かない。西方のSK218も埋土が共通した土坑で、これら３つの土坑は、溝SD210より新しく、後述する藤原宮期の東西溝SD219より古い。寺廃絶に関わる土坑であろう。

吉備池廃寺以後の遺構には、西３区に東西溝SD219、土坑SK221、西４区に東西溝SD226、塀SA227などがあるほか、いくつかの柱穴および近世井戸SE220がある。

東西溝SD219　溝SD210の北にある幅0.6～0.9m、深さ0.1mの素掘溝で、藤原宮期の土器が出土。推定藤原京三条大路の北60mに位置し、坪内区画溝の一つであろう。

土坑SK221　近世井戸の西にある逆Ｌ字形の土坑。底はV字形をなす。上層から比較的多くの瓦が出土した。

東西溝SD226　幅2.1m、深さ0.3mの素掘溝で、西３区西端に始まり西４区以西に延びる。長さ26mを検出した。杭等で護岸した東端は九条大路の西約48m、三条大路の北約48mにあり、坪内の堀割であろう。藤原宮期の土器少量と判読不能の木簡、板材、獣骨などが出土した。

塀SA227　溝SD226の北1.5mを併走する塀で、柱間2.1m等間、４間分検出した。柱穴は辺0.6m、深さ0.2～0.4m。

南西区

西面回廊が痕跡的であったため、より明確な南面回廊南雨落溝を検出して回廊南西隅部を確定するために設けたが、中世の小溝の他は東西溝SD240と土坑SK242、柱穴数基を痕跡的に確認したにとどまる（図74）。

東西溝SD240　幅0.8m、深さ0.1mの素掘溝で、埋土には砂礫が多く含まれ、藤原宮期の土器が少量出土した。溝の位置は南面回廊南雨落溝の西延長線のやや北にあり、その抜取痕跡である可能性があるが、西面回廊西雨落溝想定線以西に延びる点で疑問がある。また、出土土器からは三条大路北側溝の可能性もあって、決めがたい。

土坑SK242　東西溝SD240の下で検出した土坑で、回廊外雨落溝の南西隅想定位置に近いものの、東の調査区で検出されない疑問点がある。

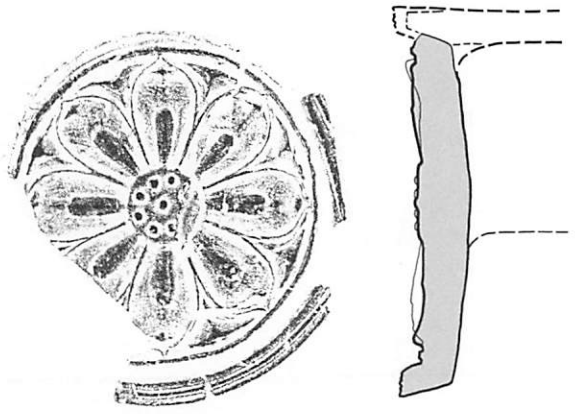


図75　第95次調査出土軒丸瓦ＩＡ　1：4

いずれにせよ、南西区の遺構検出面は、約84m離れた南１区よりも１m余り低く、南１区の石組溝がその傾斜のまま延びているとした場合、石組の下面がSD240の底に相当する。この地区では回廊関連遺構は完全に流失していることも考えられ、西面回廊についてはより良好な状況での調査結果を待ちたい。

3　出土遺物

土器・瓦類のほか木簡、板材、鉄釘、獣骨などがある。

土器・土製品　土師器、須恵器、瓦器、白磁・青磁、施釉陶器、円筒埴輪などがある。東西溝SD180、土坑SK189、東西溝SD226に飛鳥Ⅳ～Ⅴに属すものがやや目立つ程度で、寺跡に直接関わる土器はほとんどない。

瓦類　軒瓦、丸・平瓦がある。主に東西溝SD180、土坑SK193と西３区の土坑SK221周辺から出土し、SD180からは全体の半量を得た。軒瓦は吉備池廃寺創建軒丸瓦Ⅰで ＩＡ、ＩＢの２種がある。総数10点。内訳はＩＡ６点、ＩＢ２点、種別不明２点。軒丸瓦Ⅰは山田寺式軒丸瓦の祖型となる単弁八弁蓮華紋で、半球形の中房に１＋８の蓮子をもつ。『年報1997-Ⅱ』では外縁を五重圏紋と報告したが、実際は三重圏紋でその外側は緩い斜縁である。三重圏紋の二重目が幅広い特徴は、後の山田寺式軒丸瓦に受け継がれる。ＩＡとＩＢの紋様はきわめてよく似ているが、ＩＢの方が子葉や蓮子の配置が整然とし、ＩＡより若干大きな中房に同心円状にめぐる微妙な凹凸があること、外縁の三重圏紋の外から一、三重目がＩＡより太いことなどで判別できる。丸瓦の取り付け手法は丸瓦の広端凹面側を斜めに削るだけのものと、そこに縦方向の刻み目を加えたもの（図75）がある。

丸・平瓦の内訳は丸瓦130点（29kg）、平瓦596点（80kg）で、ともに厚手品（厚さ1.8～2.6cm）と薄手品（1.1～1.6cm）とがある。凸面をナデ消すものが多く、わずかに平行・正格子・斜格子叩きを残すものがある。

4　成果と課題

今回の調査は前回までと異なり、検出した遺構は痕跡的で、当初に掲げた課題が十分解明されたわけではない。以下、成果と課題を列記してまとめとしたい。

＜塔・金堂中軸線上に中門はない＞

前回までの調査成果からかなりの蓋然性があると思われた塔と金堂の中央南面に中門が開くとの推定は、その中軸線を横切って、塔跡の真南で検出されたのと同じ規模の回廊を検出したことで否定された。

中門推定の根拠の一つであった塔－金堂中軸線付近で南に張り出すと見えた水田畦畔は、条里復元図を巨視的にみれば、むしろ塔前付近が北へ寄っているのである。また、遺構図に図示しなかったが、調査区全域で検出された水田耕作に関わる小溝は、南１区南端、石組溝の南２m付近以北では南北方向に著しいのに対して、以南は1984年調査の冠名遺跡を含めて東西方向に著しい。この所見はこの位置が中世段階の水田畦畔－里境の位置であって、より南にある現在の畦畔と小さな水路が形成されたのがそれ以後であることを明確に示している。「遺存条里」による古代遺跡の推定復元の落とし穴であろう。

なお、冠名遺跡の北半が河川状を呈しているとの所見を以て、そこに幅50m以上の河川の存在を想定し、それを「百済川」とみる説もまた、根拠に欠ける。昨年の回廊検出地点や今回の西３区周辺の遺構検出面下には精良な砂層があり、そこには北東部の丘陵に平行した南東～北西への古い流路が確認できる。近世井戸はその水脈に掘られたものである。また、南１区南端には東西方向に砂礫層がみられるが、磨滅した吉備池廃寺の瓦が中世近世の土器とともに含まれている。冠名遺跡北半に広がる幅50m以上の河川とはこの中近世の砂礫層をさす可能性もある。いずれにしても、吉備池廃寺段階の河川ではない。そもそも百済大宮と百済大寺が建てられた場所を示す「百済川辺」の語がもつ距離観は主観的であって、百済川が約200m離れた現在の「米川」である可能性もあり、川の存否は寺名比定の是非を問う根拠にはなるまい。

＜回廊は完成していた＞

建物造営の手順では基壇外装や雨落溝の施工は、建物の造作でそれらを傷つける恐れのなくなった段階で行われるものである。今回、南面回廊南雨落溝を広範囲に検出し、加えて、雨落溝施工以前の足場穴列が検出された。回廊未完成説は成立しえないであろう。僧房とも推定される吉備池北東部の掘立柱建物の存在からも、伽藍の完成度はかなり高かったものと考えるべきである。

しかし、検出した西面回廊は極めて痕跡的な状況であり、西南隅についてはさらに明確でない。今後、より良好な地点での検証を必要としている。

＜中門の位置と伽藍配置は？＞

回廊は完成していたのに、塔－金堂の中軸線上に中門はない。ではどこにあるのか。回廊は塔の真南でも確認されているから、西面と塔－金堂中軸線までの南面は回廊で閉じられており、東西に長い掘込地業をもつ金堂が南面するのはほぼ確かであるから、中門は南面回廊上の塔－金堂中軸線以東に想定しなければならない。残された候補地の第一は金堂正面であろう。

しかし、その場合は中門が伽藍の東に偏することとなり、中門の位置まで含めた場合の典型的な「法隆寺式伽藍配置」のモデルとはなりえない。いずれにせよ、これまで知られていない配置である。

また、伽藍の左右対称性を念頭に置いて、金堂の東や北に他の堂塔を配置する伽藍とみることも、金堂の東の地形からは困難な想定である。すなわち、昭和30年代作成の地形図（図71）では、金堂の東に低い残丘（小字カウベ）があり、西北方の春日神社裏山まで微高地が連なっている。吉備池の北辺の堤はその南西裾を結ぶ位置と方向にある。池北東部での桜井市の1998年調査では、僧房と推定する掘立柱建物は赤黄色の山土上で検出されていて、そこが丘陵の一部であったことがわかる。吉備池廃寺あるいは藤原京の造営に際して削平整地したと考えられる。近年まで丘陵が残る所に、堂塔および東面回廊が作られていたとは考えられないのである。

現段階で伽藍規模を概算すると、回廊の東西幅は、塔－金堂基壇間の中点から西面回廊西雨落溝推定線までの距離約84mを折り返した約168mの数値が得られ、小字カウベの丘陵西裾におさまる。同様に南北幅は、検出した南面回廊南雨落溝が塔の南端から36.8mにあり、塔の辺長を30mとし回廊が南北対称にめぐると仮定した場合、その数値は約104mとなる。しかし、東西幅については、塔－金堂基壇間の中点が伽藍の東西の中軸であることを示す施設などは確認されなかったし、南北幅についても、

塔の一辺長30mは未確定で、巨大な抜取穴の中での心礎の位置も決めがたい。さらに、塔の中心と金堂の中心とは2～4m程ずれていて、そのいずれが伽藍の南北中軸線であるかは、なお検討が必要である。伽藍・回廊規模の確定は中門、東面回廊などの検出を待たねばならない。

＜寺地の範囲は？＞

西3区の溝SD210は、その構造と傾斜から伽藍内部の排水を意図した暗渠である可能性が高く、少なくとも確認した西端（西面回廊の西約22m）までは寺地に含まれる。また、その西24mまで及ぼした西4区内でも西限を示す遺構は検出されていないから、西限は南北里道かその外側と考えられる。他の辺についてはさらに確証がないが、東については比較的多量の吉備池廃寺の瓦が発見された桜井市1995年調査地が含まれるであろうし、北は春日神社裏山を含めた地域までは及ぶであろう。南限は橿原考古学研究所の1984年調査地に及ぶのは確実で、河川状地形の再確認を含めて今後検証が必要であろう。

＜その後の吉備池廃寺＞

今回の調査では東西溝SD180、土坑SK187～189、掘立柱建物SB190、東西溝SD219・226、東西塀SA227など、藤原宮期の遺構を多く発見した。

吉備池廃寺周辺は藤原京域に含まれ、塔跡西端付近に東九坊大路が、南1区南端付近に三条大路がそれぞれ推定される。周辺の調査でも、冠名遺跡、その西の柳田地区、池東北部の1995・1998年調査などで、藤原京の坪内区画溝、掘立柱建物、藤原宮式軒瓦などが検出されており、藤原京の遺構・遺物は案外濃密である。金堂南西部の掘立柱建物も、藤原京の街区に営まれたものと理解される。

藤原京の造営は百済大寺が天武2（673）年に高市の地に移されてから10年未満、天武朝には始まったとされる。残された土壇の上に建っていた百済大寺の堂塔の威容が記憶になお鮮明な頃、その近辺にまでも建物が営まれているのである。跡地がいかに取り扱われたのか。元慶4（880）年、大安寺に返還された百済大寺の旧寺地である十市郡百済川辺の田一町七段百六十歩（『日本三代実録』）がいつ収公されたのか。吉備池廃寺は藤原京の条坊施工や街区利用の実態をさぐる上でも重要な遺跡といえよう。

（西口壽生・瓦：伊藤敬太郎）

表6　その他の発掘調査・立会調査概要

調査次数	遺　跡	概　　要
飛鳥藤原 第91-2次	山田寺	史跡整備に伴う立会。里道の盛土を除去したが、遺構面に達しなかった。また西面大垣推定地で排水溝を設置したが、大垣は検出されなかった。
第91-3次	左京五条三坊	住宅建設に伴う調査。中世の南北溝を検出した。
第91-4次	山田寺	住宅建設に伴う調査。弥生時代～藤原宮期の遺物包含層を確認。顕著な遺構は検出されなかった。
第91-5次	奥山久米寺	史跡整備に伴う立会。遺構面に達しなかった。盛土中から瓦類を採集。
第91-9次	左京一条一坊	国道165号線の拡幅に伴う調査。水路工事・水道管埋設工事の掘形にあたり、調査区壁面が軟弱で、土層観察のみを行い、詳細調査を断念。
第91-10次	左京一条一坊	国道165号線の側溝付替工事に伴う立会。盛土内での掘削で、遺構面に達しなかった。
第91-11次	宮西面内濠	縄手池南東の史跡環境整備工事に伴う立会。遺構面に達しなかった。
第91-12次	山田寺	史跡整備に伴う排水溝設置工事の立会。遺構面に達しなかった。
第91-13次	飛鳥池遺跡	吉野川分水改修工事に伴う立会。立木の移植のため幅約90cm、深さ1.5mを掘削したが、表土直下が地山岩盤となり、遺構・遺物ともになし。
第91-14次	飛鳥池遺跡	万葉ミュージアム建設に伴う立会。外周水路工事末端部で平安時代以降の流路堆積を、構内配水管埋設位置で藤原宮期以降の遺構面を確認。顕著な遺構は見られない。
第91-15次	内裏西官衙地区	農小屋の建て替えに伴う調査。藤原宮期の遺構面と宮廃絶後の斜行溝または土坑の一部を確認。 藤原宮期の遺構はなし。
第91-16次	宮西面内濠	縄手池南東の史跡環境整備工事に伴う立会。遺構面に達しなかった。
第91-17次	飛鳥寺南面大垣	万葉ミュージアム建設に伴う緊急立会。擁壁工事に際し、飛鳥寺関連遺構を検出、土層を確認。 のちに第97次調査を行った。

奈良国立文化財研究所
〒630-8577　奈良市二条町2丁目9-1
Nara National Cultural Properties Research Institute
2-9-1, Nijo-cho, Nara-city, 630-8577, JAPAN